
盾の勇者の成り上がり
11
アネコユサギ
Aneko Yusagi
MFブックス


盾の勇者の成り上がり
11
アネコユサギ
Aneko Yusagi


人物紹介
盾の勇者の成り上がり 11
岩谷 尚文
ラフタリア
フォウル
アトラ
フィーロ
天木 錬
北村 元康
セイン


「う……ううううううう……」
元康の奴、
ガチ泣きしている。
「ごしゅじんさまー！
助けてー！」

盾の勇者の成り上がり 11

アネコユサギ

目次

プロローグ　買い付け

「こちらです」
と、案内され、階段を下りる。
俺の名前は岩谷尚文。異世界に盾の勇者として召喚された大学生だ。
俺達は今、商人と傭兵の国ゼルトブルで追加の奴隷を購入しようと奴隷商達に奴隷地下市場を案内させている。
霊亀関連のゴタゴタが終わった後、次の守護獣である鳳凰の登場や次の波までの間に戦力を増強するために俺はメルロマルクの女王から領地と爵位をもらい、村の開拓を行うことに決めた。
その際、問題として浮上したのがラフタリアの故郷であるルロロナ村の件。
元は国民であったはずなのだが、亜人であるがゆえに村人は奴隷としてメルロマルクで虐待されていた。
俺の活躍により亜人差別の旗頭であるクズと三勇教が潰れ、女王が奴隷解放を命じた。
しかし不運が重なり、その命令は一歩遅く、奴隷達は別の国に売られ、村の連中は高額で取引されるような状況になっていたのだ。
村の連中を保護するために色々と手を尽くしていたら、逆にそれに便乗した商人共に利用され、値を吊り上げられるという残念な状況に陥っていた。
他に奴隷の値段が高騰した理由として俺の相棒をしてくれているラフタリアの噂が独り歩きした所為もあるとかなんとか。
ともかく色々な不運が重なってルロロナ村の連中の値段は高騰していたわけだ。
その所為で俺達は、金を稼ぐためにゼルトブルの闇のコロシアムに参加する必要に迫られてしまった。
まあ……苦労はしたが大会を勝ち上がり、幸いにもルロロナ村出身の奴隷達の買い戻しに成功した。
「ナオフミちゃん、まだ人手が欲しいの？」
「あの程度の人数じゃ足りないだろ……開拓もするんだぞ？」
今、俺の腕に手を絡ませている女の名前はサディナ。
コロシアムに出場し、俺達とは別にルロロナ村の連中を救おうとしていたラフタリアの姉貴分だ。
今は亜人の姿をしているが獣人化するとシャチみたいな姿になる。

顔は……なんていうかお気楽な酔いどれ和風美女か？
呪いの所為で弱体化してしまっている俺達……とはいっても、普通の冒険者よりも強いはずの俺とラフタリアとフィーロの三人で戦ってやっと勝てたかというほど強い。
俺達には弱体化、サディナには強化の援護魔法が掛かっていたから、そこまで強くないと本人は言っているが、技術面や能力面から推測するに、かなりの化け物であるのは確かだろう。
で、俺に腕をしつこくからませてくるのには理由があって、どうやら自分よりも酒が強い奴に求愛すると決めていたらしい。
俺が酒の原液みたいなルコルの実を食っても平気なのを見て色々とアピールし始めてきた。
「ふうん……ナオフミちゃんも村の復興を色々と考えているのね」
「まあな。ただ集めて保護すりゃいいって問題じゃないだろ」
他にもルロロナ村の奴隷が高騰した影響で、奴隷狩りが村を襲ってくるという事件があった。
幸い俺達の主導で村人達を鍛えていたお陰で返り討ちにすることができたんだけどな。
そう……いつまでも誰かが助けてくれるかもしれないなんて甘い幻想を捨てて、現実的に自分達で村を守るという意識を根付かせないといけない。
この世界の連中は困ったらなんでも勇者に頼る傾向がある。
よくよく考えたら異世界人を召喚して問題を解決させることがどれだけ歪なことか。
まあこの世界にはＬｖなんていう概念があって、魔物を倒すとＬｖが上がるという、まんまゲームみたいな要素があるんだけどさ。
「いやーん、ナオフミちゃんすてきー。お姉さん惚れ直しちゃう」
「触るな！　そういうのはする気がないと言ってるだろ！」
「サディナ姉さん！　いい加減にしてくださいよ」
で、そのサディナに注意したのはラフタリア。
俺の相棒として共に戦い続けている元奴隷の亜人の女の子だ。
異世界の勇者の証である刀の眷属器に選ばれてしまっている。
強さは折り紙つきで、盾の勇者という特性上、攻撃ができない俺の代わりに相手を屠ることをしてくれる。

波から世界を救うという使命優先の考えからか、色恋や性的なものに対して拒否感を抱いている。
そこは俺と同じだ。
まあ、俺はクソ女に冤罪を被せられた所為でそういうことが嫌いになったんだけどさ。
ちなみに、巫女服が凄く似合うんだけど、本人は効率主義の所為で着てくれない。
顔はとても良いし、タヌキ耳と尻尾がいいアクセントになっていて、巫女服と不思議なほどマッチするんだ。ずっと着てほしいので効果の高い巫女服を特注しようかと密かに考えている。
「あらあら」
で、サディナはここのところずっと俺にくっつこうとしてラフタリアをからかい続けている。
いい加減、不機嫌なラフタリアを宥める方の身にもなってほしい。
「ふぇえええ……」
後方で情けない声を上げているのはリーシア。
やる時はやる、感情が高ぶると凄い活躍をする奴なのだが、普段は頭脳労働担当。
ただ、ここ最近はちょっと地味だな。色々としているらしいがな。
まあ、コロシアムなんて場所に、まだ強くなっていないリーシアを参加させるのは自殺行為だったからしょうがない。
「んー？」
今、首を傾げているのがフィーロだ。
フィーロは馬車を引くことを何よりも喜びとするフィロリアルという魔物の女の子だ。
勇者が育てると特別な成長をし、魔物の姿から天使のような羽の生えた人の姿に変身できる。
喋らなければ金髪碧眼の天使の女の子そのものといった外見をしている。
性格は天真爛漫。戦闘センスはずば抜けている。
前回の戦いでも活躍したのは記憶に新しい。
魔法が封じられた状況で、フィーロは絆の世界で学んだ魔法に代わる技術、歌……を歌って敵を追い詰めた。
頼りになる戦闘員だ。
「ラフー？」

フィーロの肩に乗って鳴いているのは、ラフちゃんと俺が名付けたラフタリアの毛髪を元に作られた式神……この世界でいう使い魔だ。
サディナが亜人から獣人になるように、ラフタリアが獣人になったらこんな姿になるんじゃないか？　という外見をしている。
「ナオフミ様、また何か失礼なことを考えてますね？」
「あら！　ラフタリアちゃんはナオフミちゃんの考えていることがわかるのね！　羨ましいわー」
「うるさい」
とにかく、ラフちゃんのことを考えてすり減った精神を癒そう。
ラフちゃんは俺が悪ふざけをすると一緒に乗ってくれるノリの良い性格をしている。
俺が召喚された時からくっついて離れない呪いの盾にある技能で強化していくのだが、最近俺はラフちゃんの毛並み等、戦闘であまり意味を成さない項目に着目している。
撫でた時の肌触りを理想に近づけて癒されたいのである。
というのはラフタリアにだけは気付かれないようにしよう。
……思考が脱線したな。
ともかく、現在この面子で村の開拓を進めるために必要な新たな奴隷を安く購入しようとここに来ている。
「着きましたです。ハイ」
「ああ、やっとか」
階段を下りた先の地下奴隷市場で俺は奴隷のいる妙に豪華な檻を見る。
檻の中に……鬼みたいな角の生えた亜人の女性が座っている。
肌は褐色で、顔の作りはかなり良い。
体格はやや大柄だ。胸も大きく、絶世の美女と呼ぶにふさわしい見た目……か？
顔色も妙に良いな。いい物を食ってそうな顔だ。
こういうのって、俺が望む奴隷じゃないな。
性奴隷とかそういった類の商品に分類されそう。
「俺は性奴隷に興味がない」

「いえいえ、亜人種の中でも戦闘はできるキキ種でございますよ」
「あれでか？」
何やらこっちに営業スマイルを浮かべて手を振っている。
なんか寒気がするぞ、あの奴隷。
思わず打ん殴りたくなるタイプの顔だ。いや、あいつからすれば迷惑な話だろうけどさ。
「高そうだし、いらん」
俺の返答にその奴隷がムッとしたような表情になる。
「いえいえ、お安く提供させていただきますよ」
「それでもなぁ……」
なんか嫌、というかアイツを奴隷にしたくない。
まあ子供の奴隷限定で買うとか決めていたわけじゃないから、基準としては問題ないのだが、何か引っかかってしまうのだ。
そう思っていると、理由がなんであるか気付いた。
ビッチを彷彿とさせるからなんだな。
俺が異世界に召喚された時に、俺に強姦の冤罪を被せたメルロマルクの元王女、と似ている。
まったく……俺もくだらないことに巻き込まれたものだ。
「では次の奴隷にしますか？」
「ああ、悪いがあれは断る」
「あらー？　残念ね」
サディナが妙に挑発的に俺にすり寄って、これ見よがしに奴隷に見せつける。
「そっちの女が良くてなんで私はダメなのよ！」
奴隷が怒鳴る。プライドでも傷ついたか？
性奴隷の分際で言動が全く理解できないな。
というか……なんで俺に買われたがる？
「お前は俺の好む奴隷じゃない。それだけだ」

「ロリコン！」
罵声がうるさいな。
……俺は奴隷商人達を睨む。
奴隷商人は一族で奴隷を売買しているらしく、俺の目の前にはメルロマルクで商売している奴隷商人とゼルトブルで商売をしている奴隷商人の二人がいるのだ。
両方とも生き写しのようにそっくりで、強いて違いをあげると燕尾服の色合いだけだろう。
で、俺が睨むとサッと目線を外された。
……まあいいだろう。色々と頼み事には応えてくれているしな。
俺は奴隷の女を睨む。
「ロリコンとは、まるで俺のことを知っているみたいな物言いだな？」
俺の返答に奴隷の奴、口を噤む。
やはり何か裏があるのか。
「あら？　お姉さんそんなに若く見える？」
「……お前、実年齢は幾つだよ」
「二三歳です。うっふ～ん！」
何度も瞬きするな気持ち悪い！
しかもその態度、凄く嘘臭い。
「確かそうですよ？　お父さんがサディナ姉さんの年齢を言ってましたから」
ラフタリアが裏付けをする。
「女性は実年齢を隠すとかするんじゃないのか？」
「そういうことはありますけど、数年前にお父さんがサディナ姉さんにそろそろ見合いをさせようと言っていたんですよ。その時に聞いた年齢に経過した年を足すと二三歳で間違いないです」
「あらー？　覚えちゃってた？　子供の記憶ハンパないわー」
この口調だからもっと年齢が上だと思っていたんだがな。
ぶっちゃけ、おばさん臭いぞ。

とにかく、これでも俺は自分を客観的に見ているつもりだ。
購入する奴隷はみんな子供、そして女であることが多い。
ルロロナ村の連中を重点的に集めている関係で結果的にそうなった。
「あの方の発音、言語から察するに……」
リーシアがどこの奴隷なのかを察したっぽい。
そういえば盾には翻訳する機能があるんだったな。
この世界には俺の世界……地球と同じように、複数の言語があり、便利なことに盾はその全てを翻訳できる。
で、メルロマルクの公用語って確か……人間の多い国で使われている言語のはず。
「まあ気にする必要はないな。リーシアも気にしなくていいぞ」
「は、はい」
「じゃあ次だ」
「わかりましたです。ハイ」
「どうしてよ！　なんで私を拒むのよー！」
とか、怒鳴る奴隷を無視して俺は奴隷商人達に続いた。

一話　神木の薬

「次はこちらです」
と、案内された檻を見ると、またも健康で質の良さそうな亜人奴隷。
子供で……女の子だ。
そして、嘘臭い笑顔でこっちに手を振る。
「あー……却下」
「えー!?」
やはり抗議された。

さっきの奴と比べれば若干子供っぽい反応だが、元気がいいのが気になる。
俺の知る奴隷って、目が死んでいて全てを諦めているんだよ。
あのキールでさえ、ラフタリアの姿を見るまでは怯えていたんだぞ？
夢見る冒険者みたいな顔をした奴は絶対に奴隷ではない。
で、その後も奴隷を紹介される。
どの奴隷も拒むと同じように俺に文句を言う。
コイツ等の目的が大体わかったぞ。
俺は半眼で奴隷商人達を睨む。二人共、揃って汗を拭っている。
「おい」
「盾の勇者様のご希望に添えなくて残念です。ハイ」
「はぁ……しょうがない。この手だけは使いたくなかったんだが」
俺は案内された奴隷を手招きして近寄らせる。
そして徐に胸倉を掴み、ドスの利いた声で問いただす。
「言え、お前の裏に何がいる？　盾の勇者の命令だ。逆らうのならお前の国を滅ぼすぞ」
「ひぃっ……パ、パパが……盾の勇者様の嫁になれって。勇者様は奴隷しか傍におかないから斡旋業者にお金を払って……」
俺の睨みに奴隷が怯えながら答える。
小さな子だ。これはしょうがないな。
「……お前はそれでいいのか？」
「え？」
「家のためとはいえ、好きでもない相手への捧げものにされるんだぞ？」
見た感じ、昔のラフタリアより少し幼い。
こんな子を使って自分の地位を向上させようという考えに嫌悪感を抱く。
「とりあえず、見破られてしまいましたとでも言って帰れ。それで納得しなかったら、盾の勇者様は本当に困っている亜人に手を差し伸べている、と言っていたとでも言え」

どうやら団体で送り込まれているようだな。

「そんなわけだ。丁重にお断りする」

亜人の国シルトヴェルトが斡旋する見合いだったんだな。

金持ちや王族の子供が形ばかり奴隷のふりをして、俺に買われるためにここに送り込まれていたわけだ。

「あの国は確か盾の勇者の言葉は絶対という方針だったな。俺が直々に書状を書くぞ？　これ以上の奴隷の押しつけはお前等が不利になるだろうとな」

「わかりましたです。ハイ。盾の勇者様のお考えであれば、先方も引き下がると思います。ハイ」

「さすが盾の勇者様。偽物の奴隷を見抜くその眼力、私、ゾクゾクしています」

「わからないわけないだろう！」

偽物だって公言してるようなもんじゃねえか！

もっと隠す努力をしろよ。

それこそどこぞの人間至上主義の国で買った奴を送るとかな。

「嘆かわしい……」

ラフタリアまで呆れているぞ。

「ナオフミ様がそんな簡単に誘惑されるはずがないじゃないですか……できたら苦労しませんよ」

ん？　何を言っているんだ？

「そこでお姉さんが割り込んで、ナオフミちゃんの女性不信を治してあげるわ！」

「ラフー！」

サディナのテンションにラフちゃんが釣られて一緒に騒ぎ始める。

ああ、うるさい。無視した方がいいな。

「あら？　この反応は、ナオフミちゃんの許可が下りたわ！　お姉さんがんばっちゃうわよ」

げ!?

無視したら無視したで勝手に解釈しやがるのか！　どこまで面倒なこの女！

「はい！　お姉さんのおっぱーい」

サディナが後ろから俺を抱きしめて胸を当ててくる。

「うっぜー！」

「ナオフミ様、落ちついて！　サディナ姉さんもいい加減にしてください！」

「あらー？」

俺の拒絶にサディナは素直に引き下がった。

が、ニコニコしてて激しくウザい。

「ふぇええええ……」

「フィーロもサディナお姉ちゃんみたいに後ろからモフモフしていい？」

「却下だ」

フィーロに至ってはそういう遊びだと勘違いしたのか、フィロリアルクイーン形態で俺を後ろから抱きしめたいとアピールしてきた。

くそ、無視も利かないとかどうすりゃいいんだよ！

「まったく……他にはいないのか？　無駄足だったら怒るぞ」

「いますとも、むしろそちらの方がメインでございます」

「……時々俺を騙そうとするな」

まったく、本当はコイツには関わりたくないんだ。

「盾の勇者様は何をお望みで？」

「今は手先が器用な奴隷だな。後は、適当に戦闘ができる奴が欲しい」

一応、村にも数名手先が器用な奴がいるんだが、もっと人手が欲しい。

アクセサリー作りを覚えさせているイミアのように、できれば資質のある奴を使いたいというのが本音だ。

「なるほど、ではこちらに」

「偽物を混ぜるなよ？」

「ええ、わかっていますとも」

奴隷商人達が案内する先に……なんか見覚えのある種族がいる。

「こっちにもルーモ種がいるんだな」

俺はルーモ種がいっぱいいる檻に近づく。

イミア自身は元々村出身の奴隷じゃないが、この中にイミアを知っている奴がいれば、仕事もしやすくなるだろう。
ラフタリアやキールみたいにな。
とりあえず聞いてみるか。
「イミアって女の子を知っている奴はいないか？」
「ありふれた名前です……誰を指しているんですか？」
話しかけたルーモ種の……男かな？　イミアよりも背が少し高い奴が尋ね返してくる。
む……同名が多いのか。フルネームを言えないところがネックだな。
なんだったか、あいつの本名。妙に長いのは覚えてるぞ。
リュ……思い出せない。
しょうがない諦めるか、良い考えだと思ったんだがな。
そうだ。知識担当のリーシアなら覚えているかもしれない。
「リーシア、イミアの長い名前を暗記してないか？」
「ふえええ……」
あ、この反応は覚えてないな。
「しょうがない。イミアを後で連れてくるか」
そう締めようとしたところで、ラフタリアが俺に声を掛ける。
「イミア＝リュスルン＝リーセラ＝テレティ＝クーアリーズちゃんですよ。ナオフミ様」
ラフタリアがイミアの本名を当たり前のように答えやがった。
どんだけ記憶力がいいんだ。
ラフタリアって地味にスペック高いよな。人名を覚えるのは得意なのか？
「ナオフミ様こそ、この前、妙に長い名前の料理を言っていませんでしたか？」
「ああ、そういえばあったな。フィレ・ドゥ・サルディーヌ・オ・バジリク、モドキな」
日本名はイワシのバジル風味だ。
この世界にはイワシみたいな魚はいるが、イワシではないしな。

バジルも無いから薬草で誤魔化した。
環境もある程度整ったので、村の連中の帰還祝いに作ってやったのが記憶に新しい。
ちなみにフランス料理だ。
「イミアちゃんの名前とそこまで差がありませんよ？」
「そうか？」
単語の組み合わせだから別に難しくはない。
だがイミアの名前は記号にしか聞こえん。
「イミアってあのイミアか！」
ルーモ種の男が声を掛けてきた。
「知っているのか？」
「姪っ子だ。知らないはずがない」
おや？　イミアの親戚を見つけられたようだぞ。
これは運が良い。
「お前の他に同郷の者はいるか？」
「同じ集落出身の者はここにいる」
「じゃあ、そいつらでいいや。イミアに会わせてやる」
奴隷商に男とその同郷の者達の購入を告げる。
「わかりましたです。ハイ」
「それで……貴方は何者ですか？」
「見てわからないのか？　奴隷使いだよ」
本当のことをここで教えると奴隷達が群がってきそうだ。面倒なので言わないでおこう。
「また嘘を言って……」
「イミアは……その、元気ですか？」
「元気ですよ。私達の村でがんばってます」
素直だもんなぁ、あいつ。ちょっと自己主張が弱いけどな。

「そうか、会うのが楽しみだ」
あの長い名前が役に立つとは。馬鹿にならないな。
「あらあら、なんかにぎやかになりそうね」
サディナが口を開く。
「そうだな。ところで気になっていたんだが、お前とラフタリアはどういう関係なんだ？」
「私はラフタリアちゃんのご両親と同じ所からの流れ者だったのよ。良くしてもらったわ」
「そうか」
代々あの村で生活していたとかじゃないのか。
まあ、そうだよな。
俺が今、任されている領地はエクレールの父親の主導で開拓した地域だったらしいし、亜人との友好のために任された区画だったんだからな。
だが、その実力者が亡くなった所為で、あの地域は荒廃した。
「まあ……こんなものか……」
サディナの借金を返した所為で、懐が寂しくなってきている。
これ以上の奴隷の購入は難しいな。
「さて、そろそろ帰るか」
「お待ちくださいです。ハイ」
ゼルトブルの方の奴隷商が遮る。
「なんだ？　まだ何かあるのか」
「勇者様にはぜひ見ていただきたい奴隷がおりまして」
「あの国が斡旋した奴隷ならもういいぞ」
「いえ、そうではなく……言うなれば本日のメインディッシュにございます」
「金が心許ないのだが？」
「劇薬のような奴隷故、貴方なら使いこなせると信じて格安で提供いたします」
劇薬、ねぇ。

下手をすれば毒になって、使いこなせれば薬と。
まあ、見る分にはタダだ。
「わかった」
俺は奴隷商人達についていった。

「こちらでございます」
と、案内されたのはどうも病を患っている奴隷の隔離区画。
あんまり衛生環境が良くない。
慈善事業を行うつもりはないが、精神衛生上よくない。
檻に近づき、薬瓶を見せてからこっちへ来るように手招きする。
「うう……」
「ほら、薬だ。飲め」
「あ、ありがとうございます」
俺の精神衛生上、我慢できなかったので目の前で苦しむ奴にはとりあえず薬を飲ます。
この世界では薬を売って儲けてきたんだからこの薬も効くはずだ。
「わかってると思うが――」
「「わかっておりますとも、収益の一部を後で還元いたしますとも！」」
「ハモるな、気持ち悪い」
ゼルトブルの奴隷商の方がスキップを始める。
やめろ、気持ち悪い！
そんなこんなで……俺はとある奴隷と出会うことになった。
「こちらでございます」
と、案内された檻には亜人が二人入れられていた。
「な、なんだよ！　仕事ならちゃんとしているだろ！　何しに来た！」

一人は十二歳前後の男の子だ。見た感じだと健康そのもの。
「あら？　フォウルちゃんじゃないの」
「お前は……ナディア！」
ん？　知り合いか？
俺が指差すとサディナは頷く。
「この国に来た頃、コロシアムで時々戦った子よー。裏にも時々出てたわね」
奴隷兼決闘者か。
ゼルトブルでは奴隷に身を落として戦うような奴もいるらしい。
このフォウルという奴は戦闘奴隷なのだろう。
「あっちは？」
檻の奥で横になっている奴を俺は指差す。
「知らないわねー」
暗くてよく見えないが、藁のベッドの上で横になっている奴がいる。
あんまり状態は良くなさそうだ。
「ケホ……ケホ……」
とりあえず男の子、フォウルという奴の方を見る。
まず、髪の色が目に入る。
白と黒だ。その色合いと髪質だけでも他の奴隷よりも質が高いのが見て取れる。
瞳の色は青く……猫をイメージさせる縦筋の黒目の部分がある。
その周りに青、そして白目があり、なんていうか、それだけで威圧感があるような気がする。
顔つきは野性的。
世界全てが敵だと思っているみたいな目をしている。
耳は猫にしては分厚くて丸みがある。そして印象深い白と黒の縞々の尻尾。
これは……。
「何でしょうか？　キズナさん達の世界で似た雰囲気の相手を見た気がします」

「奇遇だな。俺もだ」
「んー……えっとー白い虎さん？」
お？　フィーロも覚えがあるようだな。
そう、どことなく絆の世界で戦った白虎共に似ているような気がする。
同時にキョウに人体改造をされていた奴等を思い出す。
なんと言うか、その完成系を連想してしまうのだ。
とてもよくできた白虎の改造人間……だな。
まあ、亜人なんだろうけどさ。
そういった経緯から印象が良くない。
「高そうだな、子供でも」
「第一印象で値段を視野に入れる勇者様の金銭感覚に私、脱帽です」
ラフタリアに至っては俺の返答で転びかけてる。
「ナオフミちゃんの損得勘定って素敵よ」
無視無視！　いや、まあ最初に金を計算する俺もどうかと思うが。
「というか、他の亜人奴隷に比べて、何かあるんだろうな」
「よくおわかりで、この亜人はハクコ種と呼ばれる有名な種でございます」
「ハクコ種ねー……」
「古の昔、最初の四聖勇者が名付けた種族名だそうです」
白と書いてハク……虎と書いてコか？
白虎の漢字を間違った読み方をしたら出てきそうな名前だ。
昔の時代から存在する種族……なのか？
なら、まあいいのかもしれないが……成長したら霊亀のような化け物になって暴れたりしたらシャレにならんぞ。
というかなんでそんな呼び方したんだ？
カルミラ島の伝承といい、歴代の勇者はセンスがないみたいだな。
まあ……フィロリアルにフィーロと名付ける俺が言えたものではないが。

「へー……で、コイツをどうするんだ？」
「勇者様に進呈致しましょう」
「強そうだとは思うが、劇薬ってほどじゃないな」
絆の世界の方じゃ白虎は倒せない敵じゃなかったしな。
その素材の盾は援護無効とか厄介な専用効果があったのが印象深かった。
ラフタリアの刀にもあるが、滅茶凄く強い。
「Ｌｖや能力値は見れるか？」
「Ｌｖはこんなものです」
と、渡された資料に目を通す。
ああ、やはり兄妹なのか。
……Ｌｖ32？　それにしては随分と外見が幼いな。
俺の村の奴等なら30でもう結構大きくなっている。
「意外と高いな。それでこの見た目って種族差とか個人差ってやつか？」
「このＬｖで子供なのです。この種族は特別で50がクラスアップできる最低値で60が限界値です。ハイ。クラスアップ後も同様にＬｖ１２０まで伸びます」
「つまり大人になるともっと強くなるわけだ」
「その通りでございます」
すげえな。特別な種族ってやつなのか。
あのフィーロですら40でクラスアップなのに、コイツのＬｖを上げたらどうなるのか。
なかなかに興味をそそられる奴等だな。
ちなみに妹の方はＬｖ１だ。
「ハクコ種は、過去にメルロマルクの英知の賢王と呼ばれる者の策略を何度も高い戦闘力によって退けた種族として有名です。ハイ」
いや、例にクズを持ってこられても、俺の中ではアイツの評価って低いし。
ここでも権力を使って横暴な振る舞いをしていたというのか。

「英知の賢王と比べてもな……」
「あの者がいなければメルロマルクなど障害にもならないでしょう」
「……随分と持ち上げるな」
「どちらにしても、勇者を除けばこの世界で五本の指に入る種族ということです。ハイ」
「なるほど」
全盛期のクズについてはこの際無視するとして、優秀な戦力として見ていいということか。
相手の策略を物理的に退ける……防御を基本とする俺には必要な要素かもしれないな。
無論、本当にそれだけの力を秘めていればの話だが。
そして兄妹に聞こえないようになのか、奴隷商は俺の耳元で小さく囁く。
「ちなみにその天下のハクコも、水中ではルカ種に手も足も出ませんです。ハイ」
「……誰のことを言ってるんだ？」
奴隷商人達がサディナに視線を向ける。
「あら？」
……うえ、サディナって亜人種の中でも上位種なのかよ！
まあ、魚に虎と書いて鯱と読むわけだし、虎繋がりで強いのかもな。
と、とにかく、今はコイツ等の交渉だ。
「この兄妹、兄の方はそれはもう健康そのものなのですが、妹の方は遺伝性の病を患っており、目も見えず、歩けず、病弱で余命幾ばくもありません。ですが兄の方は妹をそれはもう大事にしております」
病弱な妹を奴隷の身分になっても守り続けるとか、どこの主人公だコイツは。
主人公じゃなく敵だとしても、その信念から、マンガなんかでは人気のあるキャラになるだろう。
そして種族的に自分の信念を通す力も持っている。
なんとも、決まっている奴だな。
「ふむ」
「兄と妹をそれぞれ別に管理し、兄を働かせ、妹は治療院に入院させたと虚偽の報告をして野に捨てるのがいいかと、もちろん兄には妹が生きているように装うのです。ほら、勇者様には声帯模写が上手そうな魔物がいるでしょ？

声だけ聞かせるのです」
俺の配下に声帯模写が上手そうな魔物なんかいたか？
土掘ってるか、行商しているか、草食っているか、戦っているかの四択なんだが……。
……フィーロか？　俺はフィーロの方に目を向ける。
「なーに？」
「フィーロ、お前、声真似できるか？　メルティの真似とか」
「できるよー。『フィーロちゃん愛嬌』」
フィーロが声真似を即座にする。
メルティがここにいるんじゃないかと思うほど、そっくりな声だ。
というかなんだその台詞は！　愛嬌って何だよ！
今度メルティとはじっくりと話をしなくちゃならないようだな。
俺は奴隷商に話の続きをうながす。
「そうすれば兄は既にこの世にいない妹のためにと、それこそ死ぬまで戦い続けるでしょう。勇者様はその上前をはねるだけでいいのです」
とてつもなく外道な提案をするなぁ……。
ドン引きだ。
それをやると裏切りフラグがたくさん立つぞ。
樹辺りが乗り込んできて、兄の方を救って共に俺を倒す、というのが考えられる結末か？
「冗談じゃない。もちろん返り討ちにするがわざわざ敵を作る必要もない。
「だからお前はその程度の奴隷しか使役できないんだ。今すぐ正しい奴隷の使い方を見せてやる」
俺は奴隷商に檻のカギを開けるように指示する。
「な、何をするつもりだ！」
「はいはい。ちょっと黙ってろガキ」
「なんだと！　俺はガキじゃない！」
「俺から見ればガキみたいなもんだ」

妙に突っかかってくる兄の方を無視して檻に入り、奥にいる妹の方に近づく。
「やめろ！　アトラに触るな！」
兄の方が邪魔をする。俺は懐から薬を出して見せた。
「薬を飲ますだけだ」
ちなみにこの薬、盾で作ったものだ。
自力ではまだ上手く作ることができない。それくらい難しい。
霊亀の神木の盾で出た技能……奇跡の薬学レシピというもので作成可能になった。

霊亀の神木の盾　0／40　C
能力解放済み……装備ボーナス、奇跡の薬学レシピ
専用効果　古代植物の加護　神木の祝福
熟練度　0

盾自体の効果は不明だ。ただ、なんとなく植物に関わる何かであるのはわかる。
この奇跡の薬学レシピで作れるようになった薬は一つだけ。
しかも作成には膨大な薬剤が使われる。
治療薬や、上級治療薬に傷薬、魔力水や魂癒水。
他に毒物を絶妙な配分で配合して、ろ過した後の上澄みと……どこにあるかもしれない神木の樹液だ。
最近、盾を介さずにこの薬の調合に挑戦し、失敗した。
問題点の洗い出しのために薬屋に尋ねたが、無謀だと怒られた。
それほど難しい薬であり、盾の力によって辛うじて入手できる貴重品だ。
その名もイグドラシル薬剤。
あの元気な変幻無双流のババアが飲んだ薬といえば効果のほどは言うまでもないだろう。
なんていうの？　ゲームとかだとエリキシルとかエリクサーと呼ばれるクラスの薬だろうな。
翻訳されているとはいえ、世界樹の名前まで付いているしな。

「……」

あのババア、そんな貴重品を飲めるってどれだけ金持ちなんだ？

変幻無双流を使って世界中で荒稼ぎでもしていたんだろうか？

息子は冴えないのに！　完全に空気じゃないか、息子の方は！

ともかく、どんな病でも一発で治る逸品だ。

「俺はこれからお前の主になる。そしてこれはお前の妹を助ける薬だ。お前は一生を使ってこの薬の代金を稼げ」

時価でかなりの値段になると薬屋が言っていたな。

ただな……これを売っても村の奴隷共を買い占めることは不可能だったし、在庫もあまりなかった。

この薬を使わねば助からない命となるとそれこそ限られるとも聞いた。

あまりにも効果が高く、求める者は多い。死者すらも蘇らすとも語られる薬。

金が少なくなったから、欲しがる奴にふっかけてやろうと持ってきたんだが、丁度良い。

波との戦いを考えれば金よりも力、強い味方に恩をこれでもかと売っておいて、逆らえないようにしておこう。

「……嘘じゃないんだよな」

「嗅いだことはないのか？」

兄の方が薬の匂いを嗅ぐ。

嗅いだことがあったら、今ここにいるわけないけどな。

すんすんと匂いを嗅ぐ兄。やがて顔を上げて叫んだ。

「イグドラシル薬剤だ！」

「……よくわかったな」

犬かコイツは。こういうところも優秀な種族ゆえなのか？

「だ、だけど、毒が入っていないとは限らない！」

「お前はそうやって薬を全部疑って生きているのか？　妹に飲ませる薬を全て疑うのか？」

「う……」

「俺が信じられないのなら飲ませなくてもいい。だが、それで妹は助かるのか？　妹が苦しんでいるいないにかかわらず、俺がお前を買うことには変わりはないぞ」

「く……」

悔しそうに兄が呻く。

「……そこに誰かいらっしゃるのですか？」

咳をしながら女の子の方が顔を向ける。

目が見えないとか言っていたな。声だけで判断しているのか。

「……何か、とても力強く、優しい気配のするお方だと思うのですが……お兄様、どうなのですか？」

「さ、さあ、どうなんだろうな」

「ですけど……そんな、大きな力を感じます……ですが……」

ゆっくりと、その少女はこっちに顔を向ける。

兄の方が渋々俺に近づくように手で指図してくる。

俺はアトラと呼ばれた女の子に近づいた。

これは酷いな……全身が包帯で巻かれていて、素顔も何もわかったものじゃない。

……皮膚も爛れている。生きているのが不思議なくらいだ。

兄と同じ種族なのだろうということが、辛うじて耳としっぽでわかる。

「ですが……なんだ？」

どうやら俺に気付いているようなので話し掛けた。

最初が肝心だからな。いつも通り、偉そうな態度で接する。

「……優しさと力強さの中に深い悲しみを感じます……」

深い悲しみ、ねぇ……。

一瞬ビッチに裏切られて怒り狂った記憶が思い出されるが、すぐにラフタリアとの記憶がそれを打ち消す。

……もしも俺がこの世界に来たばかりだったら、魅力的に感じたかもしれない。

こういう意味がありそうな言葉を吐くキャラクターはマンガやゲームには多いからな。

しかも病床に沈む少女ときたもんだ。

ちょっとできすぎだな。

「あの……それで何のご用で来たのですか？」

「ここがどこかわかっているんだろ？」
「はい……私は兄を働かせるための人質になってしまうのですね……」
全てを理解して、なお……いや、諦めているような口調だ。
「優しい声のお方、よければ、お名前を教えてくださいませんか？」
「尚文だ」
「尚文……様」
発音が上手いな。俺の名前を正しい発音で言った奴は勇者共を除けば初めてだ。
別の異世界でも絆だけで、ラルクやグラスは発音が間違っていたしな。
「尚文、様。どうか兄を大事にしてください」
「アトラ！　何を言っているんだ！」
自分の先が短いのを知っていて、頼んでいるのだろう。
「残念だが、その頼みを聞くつもりはない」
「そう……ですか……」
「俺はお前の面倒も見るつもりなんでな。ほら、薬だ」
一度何かを言いかけたが、アトラは俺の言葉に頷いた。
イグドラシル薬剤を持ち、少女の口元に近づける。
兄の方は妹に止められて文句を言えずに拳を握っている。
「く……ん……」
素直にアトラは薬を飲んだ。
あれ？　薬効果上昇の光以外にも変な光を発している。
結構でかいな。オストの影響で霊亀シリーズをコンプリートしているし、地味にいろんなところで技能を得ているからか。
薬の効果が大きくなっているのはわかる。
「ふぅ……ふぅ……」
薬が効いてきたな。呼吸が静かになってくる。

「あ……れ？　体が……軽くなってきた気がします」
「アトラ？」
「肌が……むず痒くて……体の奥が温かいです」
「ま、薬が完全に効くまでもう少し時間が掛かるだろう。時間を掛けて薬を何度か飲ませるから、素直に寝ているんだぞ」
「はい……何の力にもなれませんが、よろしくお願いします」
俺は立ち上がって檻を後にする。
「で、お前の名前はフォウルでいいんだな」
俺を睨んでいた兄の方が顔を逸らす。
「そうか、アトラ、寝ているところ悪いが――」
「そうだ！　俺の名前はフォウルだ！」
「苗字は？」
「……」
途端に黙りこむ。
種族的に考えて、おそらく良いところの出なのだろうが、剥奪されたか名乗れない事情があるのだろう。
なら聞く必要もない。
「そうか、じゃあお前はこれから俺の奴隷だ。わかるな？」
「……わかった。あの薬も嘘じゃないみたいだし、薬の分は働く。コロシアムで稼げばいいのか？」
ふむ、それも悪くはないが、こんなガキをコロシアムに出すのはな。
もう少し能力を伸ばしたいところだな。
「まだ決めていない。どっちにしても別の目的があるんでな。コロシアムには出なくていい」
「それじゃあどうやって金を稼げばいいんだ」
「俺が斡旋してやるからそれに従っていろ。なに、着服などはしないさ」
邪悪に笑ってやろう。
するとフォウルは俺を鋭く睨んだ。

主人と奴隷は本来こういう関係だよな。

「俺の薬は高いぞ？　市場のイグドラシル薬剤とは一線を画しているからな」

念のために恩着せがましくしておこう。

思い切り吹っかけておけば、金の分は働いたからとの理由で逃げられずに済むかもしれん。

まあ、逃がさないがな。

「ああ！　アトラがあんなに落ちついているのを見ればわかる！」

凄くイヤそうだが、素直にフォウルは答える。

どうやら相当なシスコンみたいだな。

今まで兄妹二人で生きてきたから周り全てが敵に見えるのか？

ビッチに冤罪を掛けられて周りが敵だらけだった俺からすればわからなくもない反応だ。

「だけど……アンタには絶対妹を渡さないからな！」

「コイツは何を言っているんだ？」

「ナオフミちゃんも罪な男ね。やっぱりナオフミちゃんは素敵よ！」

「サディナ、お前素敵といえば俺が喜ぶと思っているなら大間違いだからな？」

元康じゃないんだ。そんなおべっかで浮かれるほど俺は馬鹿じゃない。

ラフタリアのように、俺が悪いことをしたら文句を言うくらいが丁度良いんだ。

「あらー？」

鬱陶しいサディナの発言を流していると、ラフタリアが言った。

「妹さんがナオフミ様のことを気に入ったので、やきもちを焼いているんですよ」

「ラフー！」

ラフタリアの言葉にラフちゃんが同意している。

ふむ、そうなのか。だとしたら見当違いも甚だしいな。

「ち、違う！　なんだそこの女は！　ナディア！　お前も一緒に失礼なことを言うな！」

フォウルはラフタリアとサディナを指差して怒鳴る。

身のほど知らずとはこのことだな。村に着いたらスパルタ育成をしてやる。

強くなるらしいからな。成長が楽しみだ。

あのババアを治した薬だ。妹の方も治ると思う。

妹も治れば、まあ……村で作業くらいはできるだろ。

「大丈夫ですよ。ナオフミ様はそんな方じゃないですよ」

余裕を見せてラフタリアはフォウルに微笑んだ。

「あ、フォウルちゃん、お姉さんの名前はナディアじゃないわよ？　本当の名前があるからちゃんとおぼえなさーい」

どうも緊迫感が薄れているような気がしてならないなぁ……。

「では、後ほど奴隷登録を行います。ハイ」

「ああ、頼んだ」

こうして俺はこの兄妹を譲り受けることになった。

二話　村へ帰る

「さてと、登録が済んだら村に連行するからお前等、並んでおけよ」

奴隷登録が順調に行われ、その度に俺はポータルで村に奴隷共を送り届ける。

もちろん、クールタイムが解消するまで暇なのでどうしたものかと考えているところだがな。

「ラフタリアも転移スキルが上手く使えればいいんだがな」

「帰路の写本ならありますよ？」

「龍刻の砂時計に送り付けられてもな……まあ、そっちからフィーロに連れていかせるのも手ではあるが」

クールタイムは似たようなもんだ。

絆が使っていた帰路の龍脈もな。そういやラフタリアは帰路の龍脈を使えるんだったか？

「そういえばゼルトブルに七星の勇者とやらがいるそうだが、どこに行ったんだろうな？」

女王とアクセサリー商、そして奴隷商の口添えもあって、ゼルトブル所属の七星武器の勇者とやらと会えるかと

思ったが、現在、どこかへ出かけて不在だそうだ。

捜すのも面倒なので、言付けはしているんだがな。

召喚された勇者なのかこの世界で選ばれた奴なのかは知らないが、四聖を何だと思っているんだろうか。

まあ、三勇者共の所為で盾の勇者以外は偽者か問題ありと判断されているみたいだがな。

「とりあえず、ラフタリアは帰路の龍脈が使えるように登録しておいたからいいか」

「はい……世界のために会って話ができればよかったんですけどね」

「まあな」

七星の勇者と強化方法の話をすることで最低でも俺自身の能力の成長が見込めるはず……だったんだけどな。

「ナオフミちゃん。じゃあ時間潰しにデート――」

「ポータルシールド」

面倒だからサディナを先に村へ送り飛ばす。

どうもアピールが過激で付き合いきれん。

「冗談でやっているのかマジでやっているのか……」

「サディナ姉さんも本気でやっているか怪しい方ですからね」

「わかってるって、ラフタリアは世界が平和になるまで色恋に興味ないよな？」

「は、はい……」

こんな雑談をしながら、俺達は随時ポータルを使っていったのだった。

そしてついにフォウルとアトラの番になった。

まだ治療中だが、フォウルはアトラを連れてきて時間まで寝かせておくつもりのようだ。

寝かせた後に、アトラに水差しを持ってくる。

「お兄様、ありがとうございます」

「気にしなくていい。それよりも大丈夫か？」

「はい……凄く体が楽です」

「それは良かった」

「尚文様……出発はいつになるのですか？」

アトラが俺の方を向いて尋ねてくる。

「ああ、もうすぐ出発だ」

「わかりました」

「そろそろもう一回、薬を飲んだ方がいいな」

俺は盾を霊亀の神木の盾に変えて残ったイグドラシル薬剤の瓶の中身をアトラに飲ませる。

良くなっていた状態が更に良くなった気がするな。

「ありがとうございます……」

「気にするな」

俺はフォウルの方に恩着せがましく視線を向ける。

「ぐぬぬ……」

悔しそうにしているな。

しかし……この口調、誰かに似ているような気がするのは気のせいか？

ま、お前は薬の分、精一杯働くんだ。優秀らしいからそれこそコキ使ってくれる。

「尚文様……」

アトラが俺の手を握る。

「お兄様と仲良くしてくださいね」

「喧嘩はしていないさ！　な！」

フォウルが馴れ馴れしく俺の背中に手を回す。

なんだその親しげな態度は。俺とお前の関係を勘違いしてもらっては困るんだがな。

「お兄様もお願いしますよ。この方は立派な方です」

「わ、わかってる！」

「それは、良かったです」

アトラは疲れたかのように横になる。

薬が効いてきたとはいえ、病人には違いない。疲れているんだろう。

「少し、眠くなってきました」
「村には一瞬で着く。そうしたらゆっくりと休め」
「バビュンと到着するよー。フィーロ、走りたいけど面白いから楽しみにしてて」
相変わらずへったくそな説明だなフィーロは。
まあポータルのことをフィーロなりに説明しているんだろうが。
「馬車を引く鳥さん、とても元気で……無邪気な力を感じます。それは……尚文様に匹敵する力強い方ですよね」
アトラがフィーロのいる方を指差す。おお、フィーロの正体を当てたぞ。
目が見えていないけど、別の何かを感じ取っているみたいだな。
「どうしたのごしゅじんさま？」
「ああ、新しく買った奴隷のアトラが目が見えないのに、お前が力強いのがわかるんだと」
「えへへー、フィーロほめられちゃった」
「尚文様の優しさを一身に受けて育ったのがわかりますよ」
「うん！」
フィーロが胸を張って答える。
優しさ？　誰が誰に優しいって？　何を言っているんだ？
なんて話していると時間になる。
「さて、ポータルのクールタイムも過ぎた。そろそろ俺達も帰るぞ」
「わかりました。やっと帰ることができますね」
「そうだな。とはいえ、奴隷商達に村の生き残りがまだいるかどうかを追跡調査させるから、時々来ることになりそうだけどな」
「高騰自体は収まっていますが、まだ……自称ルロロナ村の子は高く取引されていますからね」
とりあえず大半は回収できたと思うが、他にいないとは言い切れない。
だから追跡調査をしているし、可能性としては低いけど奴隷から傭兵とかになっている奴がいないとも限らない。
サディナが保護できていない奴隷達がいるかもしれない。
もういないことを証明するのがこんなにも難しいとは思わなかったな。

「ポータルシールド」
転移スキルで村へ飛ぶ。
すると村の匂いというか……漁村でもあるから潮風が鼻をくすぐる。
「ここが……尚文様の村なんですね」
アトラは目が見えないのに、村を見渡す。
「目が見えるようになったのか？」
「いえ、ですが気配で……」
気配って……。
目が見えなくても不便じゃなさそうなのが凄いな。
「とりあえず、アトラは病人だからな。村の診療所に泊まらせるとするか。フォウル、あそこの建物に連れていけ」
俺は診療所にしている建物を指差す。
奴隷共の傷の手当てをするために建てたものだ。
「わ、わかった」
フォウルがアトラを背負って歩いていく。
「尚文様、また会いたいです」
「後で様子を見にいくからゆっくりと休め」
「わかりました……ではお兄様、行きましょう」
「ああ……」
フォウルはアトラを背負ってキョロキョロしながら俺が指差した建物へと歩いていった。

「おおイミア……」
「叔父さん！　それにみんなも……」
イミアは親戚に出会えてうれしそうに抱き合っている。
親は殺されてしまっているらしいが、叔父に出会えてよかったな。
さて、とりあえず新しく来た奴隷達との友好は勝手に育まれていっているようだ。

現在、村では新しく来た者達の歓迎会を始めている。
俺も連中のやる気を向上させるために手料理を披露してその日は更けていった。
翌日から村に新しく来た奴隷と魔物達の強化を始める。
最初数日は村に慣れさせながら、最低限のＬｖ上げを行わせた。
キールやリーシア、ラフタリアを筆頭に色々とがんばっているな。
サディナもＬｖ上げを手伝ってくれている。
なんだかんだ言っても、ものすごく強いからな。
聞いた話によると襲いくる魔物共を魔法を使って速攻で仕留めたそうだ。
これで二日経過した。

三話　アルブス

夜。
アトラの治療のために俺は村の診療所に来た。
薬が効いたのか、痒みを訴えるからだ。
「尚文様……あの……申し訳ないのですが包帯を巻き直してくださいませんか？」
「そんなのは俺がやる！」
フォウルが俺に突っかかってくる。
このシスコンが。
「皮膚病に効く薬をついでに塗るか。俺がやった方が勇者の力で効果が高いがどうする？」
「尚文様でお願いします」
「くっ……」
アトラの願いにフォウルが下がり、俺が治療するために前に出る。

「……あれ？　火傷みたいになっていた肌が再生してきているみたいだぞ」
「な、なに⁉」
フォウルが呆気に取られたかのようにアトラの肌を見つめている。
そんなに驚くような事態だったのか？
まあ、驚異的な回復力だけど。
で、顔を覆っていた包帯を取って、確認する。
「まあ……」
その様子を見ていたラフタリアが思わず声をこぼす。
良くなるとは思っていたが、アトラを見て俺も驚いた。
なんていうか、想像以上だったという感じだな。
村の奴隷共の中じゃ上から数えた方がいいくらいの美人だ。
奴隷の身であるにもかかわらず、髪には艶があり、肌はキメが細かくて白い。
……兄が十二、三歳くらいに見えるのだから、それよりも幼いだろうけど……包帯が取れるとより一層小柄に見える。
メルティと同じくらいか？
奴隷商の奴、外道なことを言っていたが、このクラスの奴隷なら別の意味で売れるんじゃないのか？
皮膚病が完治したら、だけどな。
とはいえ、言葉に困る。



ラフタリアやフィーロは贔屓目なしに美少女に分類されるけれど、アトラはそれとは系統の異なる美人だ。幼い外見なのに、ガラス細工のような繊細さがあるというか……。

フォウルがなんか涙している。

「すっきりしました。尚文様、ありがとうございます……薬を塗ってくださるのですよね」

「うう……アトラがこんなに綺麗になって……時が経つのは早いな……」

お前は娘が嫁に行く前夜の父親か！

「どうやら経過が良いみたいだ。薬は必要ないな」

「そうなのですか？」

目が見えないアトラは自分の顔に手を当てる。

「デコボコではなくなっています」

「みたいだな」

「尚文様のお陰です。ありがとうございます」

アトラはペコリと頭を下げた。

「気にするな」

扉の隙間から別の奴隷が覗き見ている。小声で美人だと言っているのが聞こえてくるな。

お前等、一体どこから嗅ぎつけてきた。

「ナオフミっちゃーん！　お酒ー、可愛い子を見てお祭りよー！」

サディナ、お前か！

「というわけだフォウル、わかっているな」

「……ああ」

俺の言葉に我に返ったフォウルは悔しそうに頷いた。

病弱な妹をここまで治したんだ。馬車馬のように働いてもらうぞ。

「尚文様」

「なんだ？」

「何かお話をしてください……少しでも村に馴染みたいのです。皆さんは何をなさっているのですか？」

ふむ……。
「村の連中はどんな命令にも従う兵士として育成しているんだ。お前も兄もいずれ、嬉々として死地へと――」
「ナオフミ様！」
ラフタリアがうるさいな。
ちょっと脅かしてやろうと思っただけだろ。
ラフタリアはこういう悪ふざけを嫌うんだよな。
まあ、今までの俺の行動が原因なような気もするが。
「そうだな……」
俺はアトラに村にいる連中についてや、これから何をするのかをラフタリアと一緒に話をする。
些細なことではあるけれど、病弱な女の子が元気になったと思うと、薬の調合を覚えてよかったとも思う。
そんな感じで語っているとずいぶんと時間が過ぎていたことに気付く。
「さて、じゃあ今日はこれくらいにしておくか」
「そんな……もっとお話がしたいです」
「アトラ、ワガママを言うんじゃない」
俺が立ち上がるとアトラは名残惜しそうに急いで手を伸ばす。
それをフォウルが優しく掴んで止めた。
が、アトラは俺に飛びかからんばかりの勢いだったうえに、フォウルに手を掴まれてバランスを崩してベッドから転げ落ち……足を使って受け身を取った。
「……」
「あれ？」
当のアトラ自身も唖然としたような声を出している。
「よいっ……しょ」
アトラはフォウルを支えにして……立ち上がった。
「わぁ……これが、立つということなのですね」
「あ……アトラが、アトラが立った！」

お前はどこのアルプスの少女だ？
やべぇ。フォウルの名前を聞いていなかったら、アルプスってあだ名を内心付けていたぞ。
クズ二号みたいに。
よろよろとアトラは歩きだし、微笑む。
「ありがとうございます尚文様、お兄様」
「うう……アトラ、元気になって」
「はい、お兄様」
ヤバイくらい弱っていたのに、数日で元気になったもんだな。
「す、凄いですね。ナオフミ様の薬は」
「ラフタリアの病気を治したこともあったんだから、ありえた話だろ」
「確かにそうですが……」
今まで立ったことがないらしい病弱な少女がここまで元気になるとは……イグドラシル薬剤、効果が凄いな。
ババア然りアトラ然り。
「それで尚文様……私達は何をしたらよろしいですか？」
「そうだな。お前の兄貴には戦ってもらう予定だ。どうせLv上げには参加したんだろ？」
「ああ、仕事だからな」
「だそうです」
「お前はどうするんだ？」
歩けるようになったといっても、まだ頼りない感じだ。
「私も、戦う術を学びたいと思っております」
「アトラ！　お前はそんなことをしなくてもいいんだ！」
フォウル改めアルプスが遮る。
まあ、目に入れても痛くないくらい大切な妹が戦いたいなんて言うんだから反対もするか。
「いいえ……私は小さな頃から思っておりました。もしも自由に歩けるようになれたなら……守られるばかりではなく守れるようになりたいと」

「だ、だけど」

アトラの強い意志にアルプスが困ってる。

うーん……このまま俺の頭の中でアルプスで固定されたら、咄嗟に言ってしまうかもしれない。

フォウルで統一しておこう。

「ですから尚文様、私にも戦う術を……Ｌｖを上げる組に入れてください」

うーむ。なんか想像していたのとは違う方向に行きそうだが、悪くはないか。

一応アトラもハクコ種なわけだから１２０までは上がるはずだしな。

「わかった。とりあえずフォウル、お前はどうする？」

「俺も戦う！　アトラを守るのが俺の役目だ」

「意気込みはわかった。そこで一つ提案なんだがな？　勇者の奴隷というのは色々と恩恵があってだな――」

俺は勇者の力による補正について、フォウルとアトラに説明した。

Ｌｖ１から上げ直した方が最終的に強くなれるだろう。

今のフォウルは、少し上がって34だから、若干無駄になるかもしれない。

が、細かいところまで考えるとやるべきだろうな。

「あらー？　じゃあお姉さんもやった方がいいのかしらー？」

……窓から身を乗り出して酔いどれ女が聞いてくる。

「お前はもう十分だろ」

大体その手に持っている酒はどこから持ってきた？

サディナのＬｖは現在、98らしい。

ちなみにラフタリアが今、87だ。

元々強いのだから、必要ない。

とまでは言わない。今のサディナはただでさえ強いのに、俺の奴隷となって成長補正が掛かったらどれだけ強くなるのか興味はある。

ただ……強くなったら俺に性的な意味で襲いかかってきそうで怖い。

「お姉さんも強くなりたいわ。ナオフミちゃん、お願い」

だが……悠長に構えているといつ何が起こるかわかったものじゃないのも事実。

より強くなるならやるべきだろう。

「そうまで言うならいいだろう。じゃあ近日中にＬｖをリセットするか」

「お願いよー」

「というわけだ、フォウル。本当に強くなりたいのならＬｖをリセットした方がいいんだが、どうする？」

「そ、それは……」

「補正だけでアトラがフォウルを抜くかもなー」

揺さぶってみる。サディナは今のＬｖまで取り戻すのに時間が掛かるだろうがフォウルの方はフィーロにでも乗せて走らせればすぐにでも取り戻せる範囲だ。

「お兄様に勝ちたいです」

「ぬ……」

フォウルが迷いながらアトラの顔を見る。

目に入れても痛くない妹にボコボコにされたら恥だよな。立ち直れないかもしれない。

「……わかった。俺もＬｖリセットをする」

「了解。さて、夜も遅いからな。今夜はあてがわれた家でゆっくりと休め。アトラは歩けるならフォウルと一緒にな」

「そんな、尚文様ともっと話したく思います」

「もう夜だ。早く寝て明日への英気を養え」

そもそもアトラが歩けるのは薬が効いている間だけとかの可能性だって否定できない。

今は安静にしている方がいいかもしれないんだ。

「アトラ、俺達の家までゆっくりと……歩いていこう」

フォウルが凄く幸せそうに微笑んでアトラの手を引っ張っていく。

「ああ、尚文様！　お兄様、手を、手を離してください！　私は尚文様ともっとお近づきになりたいのです――」

なんか温度差のある兄妹だな。面倒なことにならないといいが……。

「ささ！　ナオフミちゃん！　お姉さんと夜のお時間よ！」

「お前はラフタリアと一緒に奴隷共を寝かしつけてこい！」
「サディナ姉さん、行きましょ？　まだ夜を怖がる子がいるんですから、私達が慰めてあげないと」
「ラフー」
ラフちゃんがラフタリアの肩に乗って手を振る。
最近、あんまりラフちゃんと戯れていないなぁ……。
そう思いながら俺は自宅に戻った。

四話　盾を守る盾

……フィーロはメルティの所に行ってるし、リーシアもあてがわれた自室で絆達からもらった本の解読をしている。
一人の夜だな。なんとなく静かさが心地いいな。
なんて思いながら行商用の薬の調合を始める。
すると間もなく部屋の扉をノックする音が聞こえた。
「なんだ？」
扉を開ける。するとそこには、先ほど兄に引きずられる形で家に帰っていったアトラがいた。
「その……寝所をご一緒したくて……」
「お前は兄がいるだろうが」
あのタイプは下手に気付かれたらうるさいぞ。
厄介事はごめんだ。
「お兄様は既にぐっすり眠っています。ですから……寝ながらお話し相手になってください」
ぐっすりって……アイツが？　まさか物理的にか？
いや、こんな純粋そうな子がそこまでやるか？
俺のことを慕ってくれているような気もするが、あんまり一緒に寝るのは好きじゃない。

寝ている間に身ぐるみ剥がされた経験がな。
自分でもいつまでトラウマを引きずっているんだという気もするが、できれば断りたい。
「ダメだ」
「では尚文様の家の前で眠りますわ」
「なんでだよ」
「他で寝たくないからです」
……なんだコイツ？　サディナ二号か？
絶対に諦めそうもない。
「しょうがないな。ラフタリアのベッドで寝ろよ」
「わかりましたわ」
本人が留守なのをいいことに俺はアトラを部屋に招き入れる。
……フォウルがどうなっているか気になってきた。
アトラが寝入ったら確認してみよう。
部屋に入ったアトラをラフタリアのベッドに案内して寝かせる。
「尚文様は眠らないのですか？」
「ああ、行商用の薬の調合があるからな」
なんだかんだで薬の売れ行きが好調だ。盾で作ってはいるけれど生産が間に合わない。
そろそろ本腰を入れて村の連中にも薬作りを教えていかないとな。
金が回る構図を完全に構築していきたいんだが、今のところまだ人手が足りない。
一応、薬を隣町の方でも売ってもらっているが……なかなか供給が追いつかないんだよな。
薬草自体を売ることもできるけど、単価が安い。
色々と手広く買い取りもしている影響で薬草類の盾は揃ってきた。
目利きに毒の鑑定が付いたり、毒自体の効果の上昇とか耐性アップとかばかりだったな。
「尚文様は働き者なんですね」
「金が欲しいからやってるだけだ」

「でも……そのお陰で私はこうして歩くことができるようになりました」

「……」

打算で動いているのに、善意で返されるとむず痒いものがある。

沈黙が辺りを支配していく。

どうもこの子とは付き合いづらい。

ラフタリアのように俺に理想を押しつけるわけでもなく、なんでも受け入れてしまうような。

よし、股を開け！　とか言ったらアッサリと開いた挙句、のしかかってきそうで怖い。

サディナみたいに！　サディナみたいに！

アイツはこっちが言わなくてもやってきそうで怖い。

まだ実行に移されてはいないが、やりそうな空気が奴にはある。

ヤバイ……そう考えたら二人っきりなんて危険じゃないか。寒気がするぞ！

「尚文様」

「な、なんだ？」

「ラフタリアさんから聞いたのですが、ラフタリアさんは尚文様の代わりに敵を倒す剣の役目を持っているのですよね？」

「まあな」

俺は守ることしかできない。

これはこの世界に来てからずっと変わることのない盾の制約だ。

「ラフタリアは俺のためにがんばってくれている。俺もラフタリアを頼りにしている」

波への対処のため、世界のため、ラフタリアはがんばっている。

ラフタリアを見ていると俺もがんばろうと思えるようになった。

少なくともこの世界で一番信頼できる存在がラフタリアだ。

「この村を見ていますと、尚文様の翼にみんなが守られているように感じます」

「翼ねー」

親鳥の翼の下で守られる雛とかそんな感じか？

ここは鳥の巣……みたいな例えだな。フィーロが思い浮かぶ。

「みんな、尚文様に守られて、いずれ巣立つ時を待っていると思うのです」

「巣立つのはいいが、この村を最終的に守れよ。じゃなきゃ罰則があるぞ」

ここはラフタリアの故郷だ。

その故郷を復興すれば、俺がいなくなってもラフタリアは生きていけると思う。

俺が元の世界に帰ってもキールやサディナがいる。

フィーロはメルティに任せる予定だ。

ラフちゃんはみんなに愛されるマスコットとして村で飼われるだろう。

簡単には滅ぼされないだろうし、世界を救った勇者が作った村を滅ぼそうなんていう暴挙に出た集団は国だろうがなんだろうが、終わりだ。

「この村に来て、私は尚文様の偉業を聞きました。とても……誇らしいことをしていると思います。どんな逆境にも負けずに乗り越えてきた尚文様を尊敬します」

「あ、ああ……そうか。謙遜するつもりはないが、出世したもんだな」

「ですが、その尚文様を、誰が守ってくれているのですか？」

「は？」

何を言っているんだ？　守る？　なんで？

事もあろうに俺を守るって、何を言っているんだ？

盾の勇者相手にそれって愚かにもほどがあるだろ。

だが、俺にはいろんな奴の協力があって、今ここにいる。

それを忘れてはならない。

「……いないわけじゃないさ」

ラフタリアやフィーロ、メルティ、女王……と俺の立場や身が危険になった時に助けてくれた奴はいる。

「私は思うのです。ラフタリアさんが尚文様の剣ならば、私は尚文様を守る盾になりたいです」

「盾ねぇ……そんな良いものじゃないぞ」

誰かの盾になって庇うというのはあんまり良い気持ちのものではない。

なんで俺が庇わねばならないんだと何度も思った。
痛い目を見ることだってあるが、気にしていたら勝てないし、不和を招く。
それでも……ラフタリアやフィーロを含めた大切な人を守るという意識が不快感を拭ってくれる。
その……俺の盾になりたいとか、凄い目標を持ちやがったもんだ。
元々生まれた時から誰かに守ってもらっていた子だからだろうな。
守ることに憧れを持っているのだろう。
俺の右腕がラフタリアなら左腕になりたい的な発言。
でも……いやな気持ちにはならない言葉だ。
「そういう台詞は、強くなってから言うんだな」
「はい。絶対に強くなります。明日から、がんばります！」
「ああ、がんばれよ」
と、話しているうちにアトラは寝息を立て始めた。
まったく、こんな話がしたかったのか……。
「さてと」
俺はアトラを抱えてフォウルが寝ている家に入る……本当にフォウルが寝ていた。
「……おい」
「ぐー」
「ぐーとか……マンガか！　起きろ！」
「んあ!?」
ベッドにアトラを寝かせてから、俺は起きたフォウルを家から出して話す。
「ちゃんと妹の面倒を見ろよ。なんか俺と一緒に寝たいって来たぞ」
「な、なんだと！　じゃあ……アトラは既に――うぐ！」
俺を親の仇みたいに睨みつけるフォウルに奴隷紋を作動させて叱る。
「誰がするか」
「貴様！　アトラに女として魅力がないとでも言うつもりか！」
「あああもう！　面倒くさいな！　俺はそういうのに興味ないの！」
「嘘つけ！　ナディアがあんなにくっついてるし、女共を連れているじゃないか！」
う……言い返せない！
俺はハーレムなんて夢はとっくに捨ててんだ！
これは本格的に連れ歩く相手を選定しなきゃいけない時が来た気がする。
が、俺は仲間の性別を意識したことがなかったのを思い出した。
「別にあいつ等が男でもいいな。性別なんて度外視だ」
「な、なんだと!?　お前、まさか……」
フォウルが青ざめながら距離を取る。
何か勘違いしているな？　大方俺がホモだとか思っているんだろう。
「俺にそんな趣味はない！　近寄るな！」
「こっちもないわ！」
本当、面倒な兄妹だな！
とはいえ……俺の盾になりたいか……変な奴だ。

五話　クズとハクコ

翌朝、村の奴隷共から熱烈なリクエストがあったので、俺が料理をすることになった。
下ごしらえは料理担当の奴隷がやってくれたので調理をするだけだ。
「さーてお前等が所望した料理だぞ」
「「わーい！」」
まったく……外見は大きくなったのに中身は変わらないとはこれ如何に……ラフタリアは中身も成長していたぞ。
「いやーん！　お姉さんほっぺが落ちちゃいそう～」
「はいはい。朝から酒を飲むんじゃないぞ？」



「わかってるわよ！」

ん？　俺達以外に騒いでる奴がいる。

あれは……フォウルとアトラか。

「尚文様の料理、舐めてでも平らげてみせますわ！」

「アトラ！　そんな下品なことをするんじゃない！」

……あそこは論外だな。

なんて思いながら俺は村の奴隷共の皿に料理を盛っていく。

奴隷共はトレイに俺が盛った料理を載せて、各々の席へ着く。

小学校の給食を思い出す光景だ。

……大分人数が増えたな。

手伝いも増えてはいるが、大きな調理用鍋が三つ、一食で空になるとは……。

そう……思っていると――

「ん？　誰だお前？」

見覚えのない奴がさも当然のように並んで俺から料理をもらおうとしていた。

年齢は……一五歳くらいか？　パッと見は人間だ。

印象としては寝ぼけ眼というか、眠そうな顔をしている女の子。

目の色が銀色で、髪も揃って銀色っぽい。肌は白くて、若干華奢に見えなくもない。

亜人が多いこの村の奴隷共の中じゃ異彩を放っているし、城の兵士にも配ってはいるが、そいつ等とも違う服装をしている。

「そういや誰だ？　この子？」

村の奴隷達も見知らぬ女の子を見て囁き始める。
「ラフタリア、村にこんな奴いたか？」
「いえ……兵士さん、ではなさそうですね」
「あらー？」
「ラフー？」
そこにフィーロが走ってやってきた。
「ごしゅじんさま！　ただいまー」
「おおフィーロ、お前も飯を食うのか？」
「うん！　メルちゃんの所でも食べてきたけど食べるー」
……よく食うな。
「あれ？　ピエロのお姉ちゃん？」
「……そう」
ピエロのお姉ちゃん？　そんな奴が知り合いにいたか？
フィーロの知り合いか？
最近、俺なしで行商などに出しているからそこで知り合ったとか、そういうところだろうか。
「どうしたの？　なんでここにいるのー？」
「フィーロ、知り合いか？」
「ごしゅじんさまも会ったことあるよー？」
フィーロも知ってて、俺も会ったことがある奴でこんなのいたか？
眠そうな顔して、俺から飯をもらおうとしてるが……。
「ご飯……ザザ──」
なんだ？　コイツの台詞にノイズ音が混ざったぞ。
ってなんか覚えがあるぞ。背筋にゾワッと嫌な汗が浮かぶ。
「お前は誰だ？　フィーロは知っているみたいだが、答えろ」
「ん？」

すると見覚えのない女の子は腰からハサミを取り出して見せる。
いや、そんなハサミではわからん。
そして、目の前でハサミを糸玉に変え、懐から見覚えのある仮面を取り出して見せる。
「これで──わかるはず」
「お前!?」
そう、数日前に闇のコロシアムでサディナと一緒に戦ったマーダーピエロとかいう、怪しげな奴の装備品だ！
仮面をつけていて、訳のわからない服装をしていたから一目ではわからなかった。
いや、この特徴的な砂嵐みたいな音を出す奴は一人しかいない！
「マーダーピエロか!?　どうして村にいる！」
「歩き？」
「どうやって来たかじゃねえよ！　それとなんで疑問形なんだよ！」
ボケてんのか？
そもそもノイズ音みたいな喋り方をやめろ。
「ん……」
マーダーピエロは身元を証明するための仮面や糸玉をしまうとトレイを俺に差し出して、料理をくれと要求している。
「……無料で配っているわけじゃないんだぞ？」
「……そう」
今度はポケットに手を突っ込んで……俺の手に何かを握らせる。
確認すると銀貨二枚。
いや、別に金を寄越せと言っているわけじゃないんだが……しかも銀貨二枚とか地味に高めだぞ。
一食銅貨三〇枚あったらそれなりに豪華な食事が用意できる世界だぞ？
良い方の定食がそんなものだな。
日本で例えると名店のうな重くらいか？
と突っ込もうとしたが、マーダーピエロはじーっと俺を見ている。

「……はぁ、わかった」

なんか調子が狂う。とりあえず飯を与えてから後で話をするとしよう。

俺は料理を盛ってマーダーピエロに渡す。すると当然のように移動して食べ始めた。

「あらあら」

サディナが楽しげな様子でマーダーピエロの隣に座って何やら雑談をし始める。

とはいっても碌に返答はしていないので、サディナの独り言みたいな状態だがな。

「一体、何者なんでしょうか？」

「さあな。後で問いただすとして、奴隷共の飯を配らんとな」

暴れる様子はないし、サディナもその辺りを警戒しているのはわかる。

村の連中も、気にはしているようだけど、色々と新しい奴隷が来たこの状況でそこまで驚きはしていないようだ。

一体何が目的で村に来たんだ？

なんて思いながら料理を配り終わり、俺も食事をする。

「ナオフミちゃん、あの子、雇い主からの契約を切られてフリーなんですって。だからナオフミちゃんの所で雇ってもらえないかと思って来たそうよ」

コロシアムで俺達と戦ったのはあくまで依頼だそうだ。

敵前逃亡なんてしたら……とは思うが、傭兵業なんてそんなもんか。

「傭兵はいらん」

村の奴隷共を強くしようとしているところだし、こんな怪しげな奴を雇う気もない。

「……そう。なら仲間にして」

「まったく話を聞いていないように見えるのだが？」

「えっと、理由はなんですか？」

ラフタリアが言葉を選びながらマーダーピエロに尋ねる。

「……」

するとマーダーピエロはだんまりを決め込んだぞ。

「そもそもコロシアムで俺に『殺されないように、がんばって』と言っていたが何なんだ？」

「応援――」

どうも砂嵐みたいな雑音が聞こえる。

何だろう。電波状態の悪い携帯電話の相手と話をしているような感じだ。

「尚文様、どうしました？」

そこにアトラがフォウルを連れて近づいてくる。

食い終わったんならサッサと家に戻って出発の準備でもしてろよ。

今日はお前の兄貴をＬｖリセットさせるために城に行くんだから。

「いや、コイツ……ゼルトブルのコロシアムで戦った奴が仲間にしてくれと言ってな」

「そうなのですか？」

アトラはマーダーピエロの方に顔を向ける。

「儚げで今にも消えそうな力と、綺麗な力を感じます。尚文様、悪い人ではないと思いますわ」

「とは言ってもな……」

俺を見た時の印象もそうだが、アトラの感覚は独特すぎてよくわからん。

「理由も言えないのか？」

するとマーダーピエロはブンブンと首を横に振る。

「波――るまで、ここ――住まわせてほしい。そのためなら、協力する」

なんとなく察することしかできないやりとりがこんなにも歯がゆいとは……。

会話するのが面倒すぎる。

「ついでに聞こう。お前は何者なんだ？　お前の武器も含めてだ」

俺の返答にマーダーピエロはしばらく考えた後にパクパクと口を何度か開く。

だが……。

「――と――で――」

どうも単純な言葉以外は砂嵐でよく聞き取れん。

何なんだコイツは？

「あと、コロシアムでのこと……会話の前後から察するに、お前……七星武器か眷属器の持ち主なんじゃないの

か?」

さすがに俺も馬鹿じゃない。

コイツの武器をただ不思議だとだけ思っていたわけではない。

形状をコロコロと変え、不思議な力で相手を拘束。こんな芸当ができるのは眷属器に違いないだろう。

だが、女王から聞いた七星勇者の武器にこんなものは存在しない。

「大方、この程度の強さじゃ乗り込んでくる眷属器の所持者に殺されるとか、俺達に注意しようとしたんだろうが――」

俺の台詞にマーダーピエロの奴、何度も頷いていやがる。

当たりかよ……あと、俺の言うことは伝わってはいるんだな。

アレだ。コイツ……グラス達のようにこの世界に乗り込んで四聖を殺そうとしていて、霊亀の結界の所為で帰れなくなったとか、そんなところだろ。

「俺達を弱いと思っているようだが、これでも四聖の強化はしているんだぞ。今は呪いの所為で弱体化してんだ」

だが、その説明に対してはマーダーピエロの奴、首を横に振りやがる。

「足り――。もっと――」

「ああ、はいはい。上手く話ができる自信はないが、波がどんなものなのか……四聖殺しで延命を図ろうとしているのは知ってるぞ」

と言うとマーダーピエロは首を横に振る。

「他の世界を滅ぼ――も――しない」

砂嵐がさっきよりも酷くなって、ほとんど雑音にしか聞こえない。

何なんだコイツは?

カースシリーズでも使って会話が機能不全にでも陥っているとかか?

「悪いがよく聞こえん」

俺の返事にマーダーピエロは黙りこむ。

「ナオフミ様、どうしますか?」

「信用がおけないな。味方のフリをしておいて土壇場で裏切るかもしれん」

漂流者のフリをして俺に近づき、いざって時に俺を殺そうと考えているかもしれない。

身元を明かしたとしても信用できん。

「……」

マーダーピエロは沈黙したまま俺をずっと見つめてくる。

何だろうか? この目付きは。どことなくラフタリアやフィーロを連想させるな。

敵意は確かに感じない。陰謀の気配もだ。

だが、信用するのは無理があるし、戦う気がないならますます俺の所へ来る意味もない。

勝手に波が起こるまで待って、移動でもすればいいだろ。

「滞在――要なお金なら払う」

う……戦力になり、しかも金まで払ってくれるとか好条件。

上手い話には裏がありそうだが断りづらい。

きっと寝首でも掻く気なんだろ。

「タダより高い物はない。言葉がわかるなら出ていけ」

「……そう」

落胆したようにマーダーピエロが俯いた。そして食事を終えて立ち上がる。

どうも雰囲気的には和解したグラスと似たモノを感じる。

ありそうな他のパターンだと、ラルク達のようにただ強くなりたいために異世界に渡って強化に必要な素材を集めているとかか?

何も異世界へ来たからといって、絶対に勇者殺しをしなきゃいけないわけじゃない。

ラルク達の話じゃ異世界で得た技能、能力アップに関しては共有可能らしいからな。

確かに俺も絆の世界に行った時、Lv1に戻ったが能力アップした箇所は残っていた。

多分、他の四聖を殺す気はないが異世界から帰れないとかで困っているんだろう。

だが、アトラの言った今にも消えそうな力というのは若干気になるな。

「……」

マーダーピエロが牛歩戦術のように凄くゆっくりと歩きながら時々俺の方を見る。

……呼び止めてほしいのだろうか？

黙って睨んでいるとまた歩いては何度も振り返る。

「あの……ナオフミ様？」

「構うな。アレは俺が呼び止めるのを期待してるんだよ」

「ナオフミちゃんもわかってるなら、そうしてあげればいいじゃない。あの子強いのよー？」

「寝首を掻かれかねないし、信用がおけん」

「あらー……大変ね」

で、またマーダーピエロは振り返る。

「絶対に呼び止めることはないから諦めろ」

何か微妙な空気だな。

後々のことを考えたら手元に置いておいて、もし裏切ったら仕留めるとかでもいいのかもしれんが、今の俺にそこまでの余裕はない。

そんな感じでマーダーピエロは村から出るまで時々チラッと俺達を見ては歩いていった。

「いい加減出ていけ！」

奴が村を出た辺りで俺は食堂の方で片付けを始める。

が、そこでラフタリアが疑問を口にした。

「あの……マーダーピエロさんってどうやってここに来たのでしょう？」

「歩きと言っていたがポータルじゃないか？」

「来たことがあったのでしょうか？」

……どうなんだろうな？

聞いておけばよかったな。

つーか、追いだすことばかり考えてたが、勇者との戦い方を熟知していた辺り、仲間になる気がある時に問い詰めておけばよかったと後悔した。

「追いかけますか？」

「相手の術中にはまるようなもんだぞ。戦う気がないからこっちも見逃してやっているんだ。警戒を解く気はな

い」

かなり甘めに見てんだぞ、これでも。

俺の命を狙っていそうだしな。

正直に言えば三勇者共と遭遇したら危なそうだな。

急いで勇者共の保護をしなきゃ、マーダーピエロのような奴が相手だと殺されかねない。

さて、食事も終えたし、今日もやるべきことをやっていこう。

「とりあえず久しぶりにメルロマルクの城に行くとするか。メンバーはラフタリアとフォウルとサディナだな。昨日話したLvリセットをやりにいくぞ」

「尚文様、私も行きたいです」

「……後はアトラだな」

フォウルがうるさそうだからついでにアトラを連れていった方がいいだろう。

フィーロは飯を食い終わったらまたメルティの所へ遊びにいった。

ラフちゃんは自発的にリーシアと村の連中の手伝いに出ている。

ぜひとも連れていきたかったが、しょうがない。

「ポータルシールド！」

俺達はポータルでメルロマルクの城へと飛んだ。

城へ着くと、サディナが城から見える霊亀の山に目を向けて言った。

「へー……久しぶりに城下町の方へ来たけど、塀の外が凄いことになっているわね」

「来たことがあるのか」

「そりゃあ一応、メルロマルクの国民だもの」

サディナが霊亀の山を見ながら答える。

霊亀の方は……ん？　よく見ると木々が切り取られ、開拓が進んでいる。

逞しいな、人間っていうのは。

災害を乗り越えようとがんばっているんだな。

「これからどこへ行くのかしら?」

「女王に挨拶に行ってくる。いきなりじゃ準備もできてないだろ」

一応、女王に会っておこう。

クラスアップと違ってリセットの方は普段やらないだろうからな。

「お城ね。私、メルロマルクの城は見たことあるけど入ったことはないのよ」

亜人や獣人が人間至上主義の国の城になんて入れるものじゃないか。

「そうだろうな。ここは城の中庭だがな」

「何度来ても大きな城ですよね」

「ラルクの所と同じくらいだよな。あと、亜人にはあんまりいい所じゃない」

「ですね。親しい人もいますけど、なんだかんだでいづらいです」

「でしょうねー」

城の兵士が俺達を見つけて敬礼してる。が、なんかサディナを見て微妙な顔をしてた。

基本的にサディナは獣人でいることの方が多い。

そんなサディナを連れていたら渋い顔もされるか。

あ、でも波が終わった時の戦勝会で冒険者とかを招いていたんだから……って亜人は相当少なかったか。色んな意味で亜人はこの国じゃ地位が低いんだな。

改めて認識する。

女王が差別的じゃないだけで国民の差別意識は根強いんだ。

「さて、女王はどこかな?」

いつもの執務室みたいな所で書類と睨めっこでもしているのか?

使用人に女王がどこにいるかを尋ねる。俺が来たのを知ってこちらへ移動中だそうだ。

待っていれば来るのか。ま、城の庭で休んでいよう。

「ここで待機だ」

「わかった。アトラ、立っていると疲れるだろ? 座るか?」

「大丈夫ですわ、お兄様」

ガランガラン……。

なんか後ろの方で何かが倒れる音がした。

振り返ると、なんとクズがこっちを凝視して間抜けそうに口を開けている。

「と……」

いたのか、というか……なんで半裸? パンツ一丁にマント……完全に裸の王様ルックだ。

「なんだその姿は? 罰か? 罰ゲームか?」

思わず笑みを浮かべる。こんな催しをしているなら俺に教えろよ。

しかも背中には『城内一周の罰をしています。どんなに言われても助けないように』と書いて女王のサインまで入った札が下がっている。

何をしたんだこいつは?

「とうとう盾が正体を現した!」

でかい声でこっちを指差して言い放つ。

「さあ皆の者! 盾を! 盾の悪魔をこの世から抹殺するんじゃ!」

なんか札を持ってこっちに向かって走ってくる。

周りの兵士は呆気に取られつつ、クズの前に立った。

そしてクズは遮られる。

「放せ、盾が、盾があのハクコを連れて城に乗り込んできたんじゃぞ! お前等! そこをどけ! 盾を殺せないではないか!」

……ハクコ種とクズの間に因縁があるとは聞いていたが、なんかすごい剣幕。

有名な台詞に似たモノまで飛び出した。

「え?」

そこでアトラが振り返る。

「え……」

クズの地団駄を踏んでいた足が緩やかになって止まった……そして、なんだ?

凄く微妙な顔で佇んでいる。

泣いているような、それでいて笑っているような複雑な顔付きだ。
「あれ？　お兄様？　いつ分身したのですか？」
アトラはフォウルとクズを交互に見る。
「何を言っているんだ？　アトラ」
アトラの奴、よりにもよってクズをフォウルと間違えるってどうなんだよ。
目の前にいるのにさ。
確かにちょっと喧しいところが似ているような気もするが、根本的に違うだろう。
主に年齢や背格好が……盲目のアトラには見えないか。
「……」
それから我に返ったクズはやる気がなくなったかのように踵をめぐらし、とぼとぼと引き返す。
「おーい」
クズの奴、俺の言葉が耳に入っていないようだ。
一体どうしたというんだ？
「どうしたのでしょう？　まるで抜けがらみたいでしたよ？」
「アトラちゃんを見て、凄く驚いていたわね」
「そうだな」
アトラの顔に何か不吉な物でも見たのだろうか？
「何を騒いでいたのですか？」
騒ぎを聞きつけて女王がやってきたのはそれから数分後のこと。
俺はクズがフォウルを見て騒ぎ出したが、アトラの顔を見てすぐに立ち去ったことを伝えた。
「そうですか……そんなことが」
「心当たりはないか？　あんなクズは初めて見るぞ」
「アトラさん、でしたか。ちょっと顔を見せてください」
「はい？」
アトラは前に出て女王に顔をよく見せる。

「……なるほど、そういうことですか」
「何かわかったのか？」
「少々長くなりますがよろしいですか？」
「そうだな……面倒だが、あのクズの様子を見たら気になる」
「ある程度過程は省きますからご安心を」
そうして女王はクズがアトラを見て大人しくなった理由を説明しだした。
「杖の勇者であるルージュには年の離れた目の見えない妹……ルシアがおりました」
クズとはあえて言わないのか。まあいい。
つーか妹？
「このルージュの出生には色々と問題があります」
「そうなのか？」
「はい。ルージュの本当の名前はルージュ＝ランサーズ＝フォーブレイ。フォーブレイの王位継承権第三十番目の嫡子でした」
「フォーブレイってこの世界で一番の大国だったか？　その王子ってやつ？」
「末の者ですが、そうです。ですが彼が王位継承権を放棄する事件が起こりまして……それがハクコ種によって両親や親しい者を皆殺しにされた事件なのですよ」
凄い波乱万丈な人生を送ってきた奴なんだな、クズって。
ああ、だからあんなにハクコ種であるフォウルを憎んでいるのか。
「幸い、ルージュとその妹は現場におらずに助かったのですが、フォーブレイは政治的な理由でその時の事件の責任をシルトヴェルトに問いませんでした。その所為でルージュはフォーブレイ、シルトヴェルト双方に強い恨みを抱き、亜人と敵対する我が国に名字を変えて移住したのです」
女王はクズの戦いの始まりに話が及ぶ前に一度話を区切る。
「王族であることを隠し、ルージュは戦乱渦巻くメルロマルクで将兵として活躍を重ねていきました。やがて、七星の杖に選定され、勇者として名を馳せることとなります」
見事に成り上がり街道だ。少し羨ましい。

が、どうも……女王の奴、若干困ったような顔をしている。

「私も若かりし頃、そんな彼の知略と強さに心を奪われたモノです」

「惚気はいいから続けろ」

「そんな矢先、目に入れても痛くないというほど可愛がっていた盲目の妹がハクコの手によって……死んだであろうほどの血がその場に残されたまま行方知れずになりました。それからルージュは更に復讐心を募らせ、ついには、シルトヴェルトの王であったハクコを打倒しました」

「……で？　それと今回のことと何の関わりがあるんだ？」

なんとなくはわかるけどさ。

大方――

「ええ、イワタニ様がお察しの通り、アトラさんの顔がルージュの大切な妹であるルシアと瓜二つなのですよ」

「やはりそうか」

「はい」

ここからは推測でしかないが、ある考えが浮かぶ。

そのクズの大切にしていた妹が、慰み者としてシルトヴェルトにいるハクコに犯され身籠った子供がフォウルとアトラである可能性。

ただ、どうして人質にしなかったとか色々と疑問が出てくるよな。

昼ドラみたいに、実は妹は相手のハクコと愛し合っていたとか？

どんな経緯があったかはわからない。けど、アトラがクズをフォウルと間違えたということは血の繋がりが感じられるとも言えるわけだ。

そういえば、フォウルってアトラの治療費のために地味に金は持っていたっぽいもんな。

「そんなできすぎた話が……あるんですね」

「あら？　ラフタリアちゃんはナオフミちゃんとの出会いはできすぎてると思わないのかしら？　お姉さんは思うわよ？」

「まあ……そうですけど」

いやいや、別にラフタリアとの出会いに運命とかないだろ。

サディナは、俺がこの世界の酒で酔わない体質だから運命を感じてるだけだって。

「フォウルとアトラは人間とのハーフなのか？」

「さあ……なにぶん、両親が亡くなった頃だったので……詳しいことはお兄様が知っていると思います」

「俺も祖父が凄かったくらいしか知らない。名字も語るなと言われていたし、親も俺が小さな頃に戦争で死んでよく覚えていない。でも裕福だったとは思う。手伝いや色々としてくれる人はいた」

「部下が着服とかは？」

この世界の連中ってクズが多いし、絶対その被害を受けて奴隷落ちしたんだろ。

「そんな奴いなかった。アトラの治療費が払えなくなり、部下には家財を分け与えて別れを切りだしたんだ」

アトラの薬代で没落か……忠誠心ある部下までいたとか。部下には恵まれてたんだな。

「お祖父様ですか」

女王はフォウルの顔をマジマジと見つめる。

「運命は不思議な縁を持ってくるようですね」

「なんだ？」

「貴方……おそらく名字はフェオンというのではありませんか？」

「あ……名乗るなと言われたが、そうらしい。何があるんだ？」

それを聞いて女王が納得したように頷く。

「ぜひ、盾の勇者に付き従ってくださいね。アナタの亡きお祖父様が喜びますよ」

「知らん！」

あー……フォウルはその辺り、反抗的だからな。俺になんて従うはずもないだろ。

「なんで俺の祖父のことを知っている？」

「さっき騒いだ者が、アナタのお祖父様の仇だからですよ」

「な、なんだと……」

あー……なるほど、フォウルとアトラはクズにとって忌わしい敵の孫で、しかも大切な妹の忘れ形見であるのを察してクズはあんな顔をして立ち去ったのか。

「お祖父様のことを詳しく知っていますか？」

「凄かったくらいしか親も教えてくれなかった。シルトヴェルトの王だったのか」
「そうですか……それは失礼なことを言ってしまいましたね」
「……」
フォウルが微妙な顔をする。
親が教えてくれなかったことをこんな所で知ったら気にするか。
もったいぶった言い回しだよなぁ。自分のルーツとか気になるだろ。
だが、フォウルもアトラもそれ以上、女王に質問する気配はなかった。
「……」
フォウルの方はしばらく考え込んでいる。
「たとえなんであろうと私は尚文様一筋ですわ！」
アトラの方は興味がなさそうだ。
「お騒がせ致しましたイワタニ様。どうですか調子は」
女王が話題をかえるために尋ねてくる。
「ま、順調だな」
「領地の方ですね。私の耳にも入っております。ちょうどいいところに来ましたね」
「何かあるのか？」
「まずは用事をお聞きしたいと思います。こちらにはどのような要件で来られたのでしょうか？」
「ああ、奴隷達の中でLvリセットをして育て直したい奴ができたから来たんだ」
俺が理由を説明すると女王は快く了承してくれた。
「わかりました。すぐに手配させておきましょう。イワタニ様達が龍刻の砂時計に着く頃にはできるようになっているでしょう」
「助かる。それで女王、お前の話は何なんだ？」
女王は扇を広げて口元を隠してから俺に告げた。
「メルロマルク近隣で四聖勇者様方が目撃されるようになり、近日中に高確率で現れるであろう場所を特定することができました」

「なんだと？　本当なのか？」
俺の質問に女王は頷く。
「ええ、槍の勇者であるキタムラ様がおそらく、現れると思われます」
元康か……よりによって元康というのが不安だが、この際しょうがない。
「槍の勇者の仲間が見つかったのです」
元康の仲間が見つかった？
女王の言い方からするとビッチではないみたいだ。となると一緒にいた女二人か。
仮に女1と2ということにしておこう。
この表現だとどっちがどっちかわからないか？
だが俺はアイツ等の名前を知らないし、碌に話をしたこともない。
思い出すのも億劫だが、ともかくウザイ女共という印象しかないな。
「死体でか？」
「いいえ、我が国で貴族をしている父親が行方不明の娘の心配をしていたのですが、ある日、家のように母親の家業を手伝わされていたそうです」
どんな状況だよ！
行方不明の娘が当たり前のようにいる光景って、なんか冗談にしか聞こえないぞ。
「あの女の人のどちらかですか？」
「元康の仲間でビッチとは違うというとな」
「あら？　お友達？」
「そんなわけないだろ」
「ビッチってすごい名前だな」
「フフ……」
フォウルの言葉に笑みがこぼれる。俺の偉業だぞ。
「ナオフミ様、何を誇っているんですか……」
「尚文様の栄光ですわね。きっとその名にふさわしい方なのでしょう」

「アトラさん、間違ってはいませんが、その理解の仕方はどうなんでしょう……」
ラフタリアは真面目だな。
話を続けよう。
「保護したりしないのか？」
「事情の聞き取りは致しました。イワタニ様にはその仲間に会って、槍の勇者を誘き出すよう、説得をお願いしたいのです」
なるほど……元康が合流を図る可能性があると。
上手くいくかどうかは賭けだが、元康を捕まえられるのならいいか。
「その作戦に元康の仲間は協力してくれるのか？　裏切られたら元康に情報が筒抜けということになるんだが」
「既に影の監視を付けております。本人も今のところは協力的です」
「ふむ……」
司法取引の要領で自分の立場を守ろうとしているといったところか。
なんていうか元康の女共って下衆ばかり集まっているイメージだし。
「わかった。Ｌｖリセットが終わり次第、村に戻って出発する」
「では所在地をお教えします」
女王は地図を広げて、元康の仲間がいるという場所を教えてくれた。
「じゃあチャッチャとＬｖリセットして村に戻るぞ。大事な仕事が入ったからな」
「上手く説得ができるといいですね」
「まあ……希望的観測だけどな」
不安が尽きないな。

六話　鍛錬のお陰

それから俺達は足早に龍刻の砂時計へと移動して、受付の兵士に挨拶した。

既に女王の命令が届いていたのか、儀式はいつでもできるようになっていた。
「じゃあサディナから先にやれ」
「はーい！　お姉さんがんばるわよー」
ん？　クラスアップの時と同じように儀式を手伝う奴等もいるけど担架が準備してある。
不思議に思って傍にいる兵士に問いかけた。
「リセットによる反動です。数日はリハビリが必要になると思うので」
そりゃあそうか。それまで当たり前だったステータスが急激に下がると体が重くなるし……。
俺でこれなんだから、Ｌｖ１に戻ったら、それこそ思うように動かなくなるのだろう。
「個人差はありますけどね」
そう言いながら兵士は儀式を始める。
龍刻の砂時計が輝いて、魔法陣に力を注ぐ。
クラスアップの時に見た光景と似ている。
「今ここに、新たな道を選ぶために己が力を解き放つ者がいる。世界よ。彼の者に道を指し示す好機を与えよ」
サディナが魔法陣の中で俺に手を振ってる。
「ナオフミちゃん見ててー、お姉さんが生まれ変わる瞬間よー」
……どうも余裕がありすぎるな。
やがてフッとサディナから何かが出て、四散するのが確認できた。
「終わりです。体の調子はどうですか？」
「かなり重たいけどねー、動けないほどじゃないわー」
のしのしとサディナは歩いて俺のところへやってくる。結構丈夫なのか？
「次はフォウルだな」
「ささ、お兄様！　尚文様の命令ですよ」
「あ、アトラ……わ、わかった！」
なんかフォウルが可哀想になってきたぞ。
で、フォウルもサディナと同じくＬｖリセットが完了した。

やはり平然と歩いている。

「Ｌｖリセットしたけど案外普通に動いているよな。担架とか必要なんじゃないのか？」

「動けなくなったらナオフミちゃんが支えてくれるかしら？」

「そんなやわな作りをしていない！」

「お前等何者だよ」

本当に大丈夫か気になってフォウルの腕を突いてみた……アトラが。

「～～～～～～っ！」

やっぱきついっぽいな。

「あははー、くすぐったいわね」

サディナに関してはデフォで平気っぽい。

身体を鍛えている場合は大丈夫なのか？

二人とも体を鍛えているんだな。

Ｌｖ上昇とは別カテゴリーくさいもんな、身体を鍛えるのって。

安易にステータスの加護を受けるのと違って鍛えていれば多少の不調は問題ないんだろうか。

この二人はそういう自己鍛錬をしていたんだろう。

ラフタリアも似たようなことをしていた。Ｌｖリセットで失われる分のステータスとは別に鍛錬で強化した部分は失われない。

後は……盾の効果で多少は補っているのかもしれん。

要するに担架が必要な奴って魔法をメインに使う奴とか、強い奴にレベリングしてもらった奴なんだろう。

貴族のボンボンとかで冒険者を雇ってＬｖだけ上げる、みたいな手法を取っている奴。

ある程度の効果は見込めるし、俺の村の奴等も似たような方法で上げているから悪い手ではない。

問題はＬｖ限界まで行った後で、後は自己鍛錬やババアの修行みたいな方法で上げるしかなくなるわけだ。

勇者の場合Ｌｖ制限がないらしいが、やはり俺も修行とかした方がいいんだろうか。

Ｌｖとかステータスが当たり前にある世界だから、日々の鍛錬や魔法を繰り返すことで限界値とか上がったりしてな。

そうなるとフォウルやサディナみたいに小さな頃から修行していれば、その分強くなれるってことも考えられる。

実際どうなのかは知らないし、この世界に残るわけじゃないから、波を鎮めるまでの修行と割り切るか。元の世界に帰ったらＬｖとかステータスとかどうでもいいしな。

盾もだ。

このどうやっても外れない、せいぜいブックシールドにするくらいしか誤魔化す手がない盾を、元の世界でも付け続けるとすればもはや呪いアイテムの域に入っているぞ。

社会人になって、いつも変な本を持ち歩いている男とか失笑ものだ。

……この考えは危険だ。

そもそも捕らぬ狸の皮算用とか、意味がない。

仮に盾が付いたままだったとしても、その時になってから考えればいい。

「さて、じゃあすぐにでも村に戻って出発の準備だ」

俺達はポータルを使って村に戻る。

「サディナ、フォウル、アトラ。お前等、さっそくＬｖ上げな。俺達はこれから出かけてくる。誰かフィーロを呼んできてくれ」

「はいはーい。じゃあお姉さんがんばるわよー」

そう言ってサディナは一人、なぜか海の方へと歩いていく。

お前……一人で大丈夫なのか？

「わかっている。さ、アトラ、行くぞ。お前は見ているだけでいい」

「そんな！　尚文様！　私も一緒に行きたいです」

「悪いが、Ｌｖ上げをしておけ。最低限自分の身を守れないと話にならん」

これから誘き出す相手は元康だ。

下手に暴れられたらアトラだと痛いだけじゃ済まない。だから連れていけない。

「私がＬｖを上げればお兄様を追い返し、尚文様を独占できるのですわね。がんばりますわ」

「お前は何を言ってるんだ？」

「そうですよ！　いい加減にしてください！」

だよな。まあ……ラフタリアのこの言葉は主に俺に対してなんだが。
それにしてもアトラのメンタルは相当太いみたいだな。
病弱設定はどこへいったんだ？
なんて感じにフォウルとアトラ、そして村の連中をフィーロの配下一号が引く馬車に乗せて出発させた頃、フィーロが走ってきた。
「ごしゅじんさま呼んだ？」
「ああ、これから行きたい場所があるんだ。フィーロ、出発できるか？」
「うん！」
とりあえず連れていくメンバーは……ラフタリアとフィーロでいいか。
リーシアはエクレールと一緒にババアの稽古に行ってるし、変幻無双流という流派を覚えさせておいて損はない。
元康ってリーシアを苦手にしているようだし、連れていくとこじれそうだから置いていこう。
ラフちゃんも村の連中に愛嬌を振りまいてケアしているようだし、連れていかなくていいと思う。
「じゃあラフタリアとフィーロで行くか。別に行商するわけじゃないからフィーロの背に乗っていくか？」
「馬車ー！」
「ああ、はいはい」
「やっとフィーロの馬車が使えるー、フィーロの馬車ー」
ポータルを使うようになってから乗り合いの馬車自体はレンタル品が多かったからな。
最近、あんまりフィーロは自分の馬車を使っていなかった。
せいぜい行商に使う時くらいだ。
まあ、いいだろ。どっちにしても変わらない。
「帰りは……ついでに行商でもしてくるか」
よし、サッサと元康の仲間の所に行くとするか。
俺達はフィーロの馬車に乗り込んで、元康の仲間の所へと出発したのだった。

七話　槍の勇者捕縛作戦

「エレナ！　良かった。生きていたんだな！」
報告を受けて元康の仲間の所へ急行すると、その元康が大きな商店の受付をさせられている女１に向かって親しげに話し掛けているところだった。
ちなみに俺達は店から少し離れた路地からそれを覗き見ている。
くそ！　打ち合わせをする暇もなく獲物が先に来たじゃねえか！
元康が来たんじゃ、準備もクソもない。
「あら、槍の勇者様じゃない」
女１が元康に冷たい反応をしている。
しかし……俺の記憶が正しければ、こいつはもっとキーキーうるさいバカっぽい奴だったはずなんだが、反応が違うな。
仮に元康のことを切り捨てていたとしても、もっと悪女っぽい応答をすると思うんだが。
とはいえ、その態度に元康は戸惑いの声を漏らす。
「ど、どうしたんだい？」
「どうしたんだいと言われましても」
「本当に心配したんだぞ」
「心配されるほどではないですよ。それよりもよく生きてましたね」
「当たり前じゃないか。エレナ達がいるのに、俺が死ねるわけがないだろう？」
元康の奴、楽しそうに答えているなぁ。
逆に女１は氷点下のテンションだ。
目付きが冷たい。ゴミを見るかのような視線とはああいうのを指すんだろうな。
「ナオフミ様、行って話をしないのですか？」
「楽しそうな問答だがしょうがない。とりあえず話をしに行くか」
「んー？」



フィーロは……元康を見て蹴るモーションをしている。
見かけたら蹴るように命じていたからな。
「また、一緒に世界を救いに行こうぜ！」
「すいません。家業を継がされてしまいまして、もう一緒に行くことは無理です」
淡々と答えている。
元康の言葉に頷く気配が微塵もない。
「そ、そんな……」
それは元康にも伝わったようで、凄く困惑している。
今までなんでも思い通りにいっていたんだろうな。
素直に羨ましい。
俺なんて伯爵になり、領土まで手に入れたのに、奴隷共の飯を作る毎日だ。
ぶっちゃけ奴隷共の母親をやってるようなもんだぞ。最近じゃ飯の勇者とか兵士に囁かれている。
正確には――
『いやぁ、飯の勇者様のご飯は本当に素晴らしい』
『滅多なことは言うもんじゃないぞ。飯じゃなくて盾だ、あの人は』
『ああ、そうだったな。あの人の盾、鍋の蓋に見えるもんでさ……』
『お前一度治療院に行った方がいいぞ』
『ハハハ』
何が鍋の蓋だ。
覚えてろよ、あの兵士共。復興計画で散々こき使ってやるからな。
いや、そんなことはどうでもいいんだ。今は元康だよ。
「なあ、本当にどうしたんだ？　いつものエレナじゃないぞ」
「そう言われましても……いい加減、潮時かなと思いまして」
「は？」
「モトヤス……いえ、槍の勇者様、あなたと一緒に行動するのはもう限界だったんですよ」

「な、何を──」

「名声があって、金回りも良かったのはもう昔。今のアナタはなんですか？」

「え？　いや、俺は勇者だぜ」

「……正直、疲れてしまったんですよ、アナタの仲間でいるのは」

「お、俺のどこに問題が？」

「いつでもどこでも女の子を勧誘しますし、女心を全然理解していませんし、一種のステータス程度の認識だったんですよね」

元康の顔から血の気が引いていく。

ああ、振られた経験がなかったとかそんな感じか？

やっべ、元康の不幸に笑みが……。

「ナオフミ様、笑ってます？」

「だってさ、元康が青ざめているんだぜ？」

それにしてもこの女、ずけずけと言うな。

仮にも元康は勇者だぞ。

「私なんか誘っている暇があったら、早く城に戻った方がいいんじゃないですか？」

「ぐ……」

元康が言葉に詰まっている。

「アナタはもう落ち目なの。私と付き合いたかったら出世なさって。盾の勇者のように」

俺の嫌いな女の典型みたいな振り方で、女1は元康を拒んだ。

自分は全く悪くない。お前が悪いんだ、とでも言いたげだな。

いやぁ、ギャルゲとかのヒロインだったら炎上ものの光景だ。

なのになぜだろう。相手が元康だと滅茶苦茶楽しい。

人をチートチートと罵った罰だ！

「ナオフミ様！」

ラフタリアに怒られた。

これ以上笑っていたら見限られてサディナを押しつけられそうだ。

それは避けたい。

「い、一体どうしたんだよ。前はもっと熱い奴だったじゃないか」

「そう言われましてもねー」

問答に夢中になって元康は俺達に気付いていない。

「なあ、嘘だろ？」

「嘘じゃありませんよ」

女1が近づく俺に気付いた。なんとなく事情を理解したみたいだ。

「おい、元康」

俺の声にパッと元康が振り返る。

「な、尚文!?」

「よ。人が別の異世界でヒーヒー言いながら事件を解決してやっと帰ってきたのに、お前は元気そうだな。面倒事を全部俺に押しつけてさ」

正直、お前だけでも俺の話をちゃんと聞けばこんな結末にはならなかっただろ。

女の尻ばかり追ってないで勇者としての責務を果たせっての。

「ぐ……エレナ、俺を売ったのか!?」

「人聞きの悪いことを言わないで。私は強い者の味方よ、今も昔も」

「クソみたいなセリフだな。俺が元康なら罪とか罰とか全部捨てて、槍で突き殺すぞ」

元康を説得しなきゃいけないのに、なんか女1を詰問して仕留めるみたいな空気になっているのはなぜだろうか？

「なんだと尚文！　エレナに何をするつもりだ！」

……お前を庇ったつもりなんだが。

というか久々に話をするが、やっぱりすげぇな、コイツ。

そんなに女が大事か。

「さあ、アナタも盾の勇者と同じく、強くなって。盾の勇者がそうしたように」

「エ、エレナ……！」
ビッチよりは思いやりがあるのか？　どちらにしてもクソだが。
元康は旗色が悪いと理解するなり、槍を構える。
こんな往来で戦うつもりか？
「話を聞け元康」
「悪いが俺は身の潔白を証明しなければならない」
「身の潔白って……別にお前を殺すつもりは微塵もない。というか波での戦いをサボられる方が困るんだよ。何度も言うが、俺は防御専門であって攻撃がほとんどできないんだよ」
「俺は弱くなんかない！」
「聞けよ！」
「仲間と再会して世界を救うんだ！」
「だから――ああもうめんどくせぇな！」
俺が言いたいのはちゃんと武器の正しい強化方法を学んでもっと強くなって、俺や国、果ては世界に迷惑を掛けるなってことだけだ。それ以外なら好き勝手やってればいいさ。
もちろん、波には出て戦ってもらうがな。
「ともかく、別にお前を裁く気はないから話だけでも聞け」
「断る！」
「お前、俺に同じことを言ったよな？　立場が逆ならソレかよ。それとも俺と同じで何か理由でもあるのか？」
「ない！」
「お前な……」
いや……じゃあなんで元康は頑なに俺の提案を断り続けるんだ？
「俺はここで捕まるわけにはいかない！」
「指名手配なんてしてねぇ！　話をするだけだろうが！」
話にならない。これはとりあえず力ずくで捕まえるしかない。
三分の一にまで低下したステータスで元康と戦えるか？

ラフタリアやフィーロがいるんだ。きっと大丈夫だろう。
一人分の強化ではLvがあっても俺達より僅かに弱いだろ。
見た感じ、一人っぽいし、逃げられさえしなければ問題ない。
「素直に同行してください」
「んー？」
刀を抜くラフタリアと魔物の姿でポケッとするフィーロ。
「ラフタリア、元康のSPを枯渇させろ」
ポータルスキルはSPで発動する。本来なら別の手段で逃走妨害しなきゃいけないのだが、今の俺達にはその手段を講じる術がない。
転移妨害の方法……今のところ、転移ができなかった事例から考えて守護獣の近くや、周りの地形に何かしらの影響がある魔法の類で阻害できることはわかっている。
当初は、元康が来る前に罠を張って、転移を阻害してから説得を試みるつもりだったのだ。
だが、罠を張る前に獲物が来てしまった。
ならば一撃で昏倒させるかSPを枯渇させるしかない。
じりじりと近づく俺達に元康は槍を大きく掲げる。
「ポータルスピア！」
チッ！　ブウンと元康の姿が歪む。一瞬で元康の姿は消失した。
「逃げられたか」
思っていた通りだが、こりゃあ……勇者を捕まえるってのは困難を極めるぞ。
「……どこへ行ったのでしょう」
「さあな」
「さて、久しぶり……と言うべきか？　それとも初めましてか？」
「……そうね」
女1、本名エレナだったか……に、俺は声を掛ける。
「一応、城の連中には話しているんだろうけど、俺にも事情を教えてくれ」

「……わかったわ」

エレナは大きく溜息をついた後、話し出した。

エレナの話によるとこうだ。

元康は錬や樹と同じく、俺を出し抜いたつもりで霊亀の封印された国へ向かったらしい。

「平均Ｌｖ60あれば余裕だからさ、ここに眠る奴から出る素材や武器がすげー優秀なんだよ」

ビッチとその仲間達を連れた元康は、遠くにいる霊亀を指差してそんな感じで言ったそうだ。

もちろん、そんな化け物が迫ってきているわけだから元康達とは反対に住民はこぞって逃げ出そうとしていた。

「はっはっは！　お前等、逃げなくても槍の勇者である俺が霊亀なんてすぐに仕留めてやる！」

そう高らかに宣言して元康は槍を掲げて見せたそうだ。

「な……槍の、勇者だと!?」

「ああ、悪いな。ちょっとしたイベントをクリアするつもりだ。みんな、盾の勇者なんかよりも俺が如何に強いかを見せてやる！」

元康は風車に突撃するドンキホーテの如く、愚かにも霊亀に向かって走り出した。

逃げ惑う人々は元康に対する僅かな期待と自身の身の安全を天秤に掛けながら、時々後ろを振り返って様子を見ていた。

「見た目はああだが、大丈夫、見かけ倒しだ！　いくぞ！」

「はい！」

「いきますわ！」

と、エレナ達も霊亀に向かって駆け出す。

そこからが、絶望の始まりだった。

霊亀が使い魔を召喚し、辺りの命を刈り取ろうとし始める。

それを阻止しながら、元康とエレナ達は走り続けた。

やがて霊亀の顔にまで到着。

「いくぜ！　イナズマスピアー！」

と、元康が必殺技を放った。

しかし……甲高い音と共に霊亀の顔にわずかな傷を与えるだけ。しかも、その傷も即座に修復されてしまった。

「あ、あれ？　流星槍！」

霊亀の使い魔が群がってきて、元康はそれを迎撃したそうだが、一向に霊亀を倒せる様子が見えない。

「ねえ……」

「まさか……」

「いやいや……」

と、ビッチとエレナ、女2が囁き合う。

極め付けは、霊亀が元康を無視して歩いているということだ。

脅威でも何でもなかったということなのだろう。

俺の時は……必死に必殺技や重力の魔法をぶっ放していたもんな。

この程度なら使い魔でも組み伏せられるとかそんな扱いか。

まあ、爪楊枝で人間を倒せと言っているようなものだもんな。

よくラフタリアとフィーロ、エクレールやババア達であそこまで傷を負わせられたものだ。

しかも結果的には、外側を倒しても再生するわけだし。

キョウも言っていたが、やっぱり負けたんだな。

「よ、よし！　みんな、俺がこいつを引きうけるから魔法で援護してくれ！　いくぞ！」

やあああああっと掛け声をかけながら走り出す元康だが、エレナは即座に見捨てて逃げ出した。

脇目も振らずに逃げたので、ビッチや女2とははぐれてしまったそうだ。

その後は、霊亀の進軍から逃げ切り、騒ぎが収まったのを確認して実家に戻った。

母親は娘が生きていたことを喜び、やはり冒険者は危ないと家業を継がせたそうだ。

父親とは会ってから話をすればいいということで、とりあえず母親は娘の命を優先したらしい。

もしも下手に国へ報告しようものなら重罪で死刑にされかねないと……結局は父親のコネもあり、司法取引みたいな形で、元康が来たらそれとなく誘き出すという話になった。

という顛末だとエレナは語った。
「まさかあの化け物相手に生きていたとはね。驚きよ」
「それを倒した俺に言うのか？」
「ああ、そういえばアレを倒したのアナタ達だっけ？　本当に凄いわね。失敗したわ。あんな底辺から這い上がってくるなんて……取り入る相手を本当に間違えたわ」
はぁ……とエレナの溜息が重たい。
正直打ん殴りたくなるほどのビッチっぷりだが、ここまで来ると逆に清々しいから不思議だ。
「ま、モトヤス様には色々と物はもらったし、Ｌｖも上げてもらったからいいでしょう。家業の手伝いっていう面倒な仕事さえ我慢すればいいし」
「お前な……」
「なんか冷めた方ですね。以前お会いした時はもっと熱い方だと思っていたのですが……」
「そういえばカルミラ島に行く前に城で言い争ったわね。正直、面倒だったわ」
演技かよ……ビッチの意見に同調した振りしてるとかどんだけだ。
あんなクソ女のご機嫌取りとか俺だったら胃に穴が開くぞ。
「んー？」
どうもフィーロは最近、変な口癖がついてきているな。
「そんなわけで一応また来たら通報するけど、あの様子じゃ無理そうね」
「まあなぁ……ついでにビッチがどこに行ったかはわからないか？」
「知らないわね。ああいうタイプはしぶといから死んではいないと思うわ」
元康は捕まえづらいし、ビッチも消息不明か。
こいつについては、今回、元康の件で国に協力したから、改めて罰するのも……というところか。
つーか、『私達は勇者に従っていただけで何も知らなかったんです！』とか主張すれば裁くに裁けないということか。
ま、それでも無理に裁けるが、女王もそこまで鬼じゃないか。
問題は元康だ。
捕らえるにはゲームでいうところの「沈黙」とかの状態異常にさせなきゃ難しい。
しかも永続的でないと、回復した瞬間逃げられる。
説得するにしても聞く耳を持ってないぞ、元康の野郎は。
どうにかして転移を阻害する方法はないだろうか？
……絆の世界では帰路の写本の制御は龍刻の砂時計でできたが、こっちでは難しいみたいなんだよな。
罠を仕掛けて逃げられないようにしてから話をしなければ、聞く耳を持たない奴等に逃げられてしまう。挙句どこかで死なれでもしたらたまったもんじゃない。
「とりあえず、協力には礼を言う」
「いいわよ、別に……ああ、そういえばなんか大きく商売始めたらしいわね。噂は聞いてるわよ」
「まあな。金を稼がなきゃやっていけないからな」
「近々そっちへ物を売りにいくかもしれないわ……面倒だけど」
「物によるな。あと、ホントお前は面倒くさがりなんだな」
「私は楽がしたいの」

元康はこの女のどこに魅力を感じていたのだろうか……ビッチもそうだけど理解できない。
「なんか、凄い人ですね」
ラフタリアはエレナとの会話を聞いてそんな感想を述べた。
「ラフタリアは、こうはなるなよ」
「なりませんよ！」
「フィーロ走りたい」
いきなり何を言っているんだ？
ていうか、フィーロはエレナなど全く眼中にない感じだ。
暇……なんだな。
「じゃあな」
「ええ、さようなら」
エレナは深く溜息をつくと、また受付に座って頬杖を突いて暇そうにしだした。

なんとも怠け者な奴。
そんな感じで、元康の捕縛は失敗に終わった。

八話　ゲームが終わった日

「ん？」
元康の説得に失敗した俺達は村へ戻る道を進んでいた。
適当に行商をしていこうと思ってフィーロに馬車を引かせていたのだが……とある村の自警団の詰め所前で何やら騒ぎが起こっている。
無視してもいいんだが……。
「なんでこいつ等が無罪放免で俺が疑われなくてはならない！」
と、聞き覚えのある声が聞こえたので馬車を停めて近づく。
人垣ができているので、尋ねてみる。
「どうしたんだ？」
「なんでも勇者が盗賊を捕まえたって連れてきたんだけど、疑わしいんだとよ」
……どこかで聞いたことのある話だな。
俺は盗賊から金銭を奪って放置したけどな。
「あ、あんた盾の勇者じゃねえか⁉」
そこで気付かれた。
まあ、後ろには目立つ馬車があるし、フィーロも連れているからな。
人垣が割れて騒ぎの当事者が見えてくる。
そこにはニヤニヤと笑みを浮かべる盗賊共と、自警団の連中に向かって抗議している錬がいた。
……なんとなく経緯は想像できるな。盗賊の奴等、俺の時も似たようなことをしていたし。
しょうがないか。俺は割れた人垣を進んで錬達の所へ行く。

「よう」
下手に刺激したら危険だから、さりげなく話しかける。
「そこにいるのは尚文じゃないか！」
「……久しぶりだな」
錬がこれ幸いというように俺を手招きする。
俺は錬にではなく、盗賊に言ったのだが……まあいい、錬と出会えたのは幸運だな。
今度こそ元康のように逃げられないようにしなきゃいけないぞ。
刺激しないように注意しよう。
盗賊の方は俺を一目見てさっと青ざめた。
まあ……今までに二回、今回で三回目の遭遇だからな。知らないとは言えないだろう。
そもそも今は一方的に自警団に突き出すことも可能な程度の権力が、俺にはある。
「お前等も懲りないなぁ。相手が落ち目の奴なら、自分達は被害者ですって言い張れると、本気で思っていたのか？」
「う、うるせえ！」
あ、これは実験になるかも。
俺がフィーロにけしかけたのは事実だが、コイツ等がその大本だし。
「フィーロ」
「なーに？」
人垣を飛び越えてフィーロがやってくる。
盗賊連中が更に青ざめる。
「召し上がれ」
「うん？」
「なんですか、その命令は！」
ラフタリアの突っ込みを無視する。
今のフィーロは馬車を引いていたのでフィロリアルクイーン形態。威圧感は果てしないだろう。

フィーロ自身はよく理解していないみたいだけどな。

ドスッと一歩踏み出したフィーロを見て、盗賊連中は自警団に縋りつく。

「俺達が犯人です！　どうか助けて！」

自白はえー……そんなにフィーロが怖いのか。

アジトを喋らせて盗品を巻き上げないとな。

コイツ等、中途半端に能力がある所為か結構早く復活してくるし、金を貯め込むのが上手いんだよ。今度も一旦逃がして良い金になってもらおうか？

さすがに無理か。

「俺達は盗賊だ！　何でも喋るし金も渡すからその鳥の餌にしないでくれ！」

「ねえごしゅじんさま、なんかフィーロすごくイヤな予感がするの気のせい？」

「いいから黙って頭でも齧れ」

「むー……」

人垣が囁き合っている。

『あの神鳥って人食い？』

『いや、盾の勇者様って脅しが上手だって噂で聞いたわ』

『ああ、やっぱり？　村々で楽しそうに子供と遊んでいる神鳥を見たっていうのも聞いたものね』

良かったな、フィーロ。お前の本性が食欲の権化とは思われていないみたいだぞ。

魔物として扱われるか、人として扱われるかはこれからのフィーロ次第だ。

「というわけだ。そいつらは俺の評判が悪い時も同じように濡れ衣を着せようとしてきたんだ。みっちり絞ってくれ」

「は、はぁ……」

自警団の連中も呆気にとられた表情で俺に挨拶する。

「こいつ等の賞金、くれるよな？」

「あ、はい……ですが盗賊の首領を捕まえないと」

「アジト……」

「はい！　地図をご覧になってください！」

聞きわけが良くて助かる。

「よーしフィーロ、ラフタリアを連れて、この場所にいる連中を仕留めてこい」

「うん！」

「わかりました。けど、剣の勇者は大丈夫ですか？」

「刺激しないように俺一人で話した方がいいだろ」

錬もポータルを持っている以上、下手をすると元康みたいに逃げられる。

どうせ逃げられるなら説得に尽力した方がいいだろう。

「……わかりました。では行ってきますね」

俺はフィーロとラフタリアに地図を渡し、出撃させる。

しばらくしたら残りの盗賊も送ると自警団に伝えておく。

その分の金はラフタリアに渡してくれ、と言付けてな。

「盾の勇者様がこの場を収めた」

「凄いわね。あの嘘つきの盗賊達に自白させるなんて」

「それだけ大変だったんだろうさ」

「そうね」

まったくだ。正しいことをしても正しく罰することができるとは限らない。

「さて、久しぶりだな、錬」

「あ、ああ……」

錬は警戒しながらじりじりと距離を取る。

「待て待て、別に俺はお前を捕まえるためにここにいるわけじゃない。話を聞きたいんだ。盾の勇者一人でお前をどうにかできるわけないだろう？」

ラフタリアとフィーロを行かせたのは、敵意がないことを見せるためだ。

こうでもしないと警戒されるだろうしな。

「そ、そうか……どいつもこいつも俺を疑ってかかりやがって」

錬がふてくされて答える。その程度で済んでいるだけまだマシだと思うがな。
俺なんて知りもしない話で悪魔とか罵られたぞ。
主な原因はクズとビッチ、三勇教だけどな。
「とりあえず酒場にでも入って話すか」
上手く説得できればいいんだがな。どうしてこうも準備が整わないうちに来るんだコイツ等は。
錬を連れて酒場に入り、カウンターで飲み物を注文する。
ん？　一緒にルコルの実が出てきた。酒場のマスターが期待の眼差しで見てくる。
しょうがないいな。一口頬張る。
「本物だ！」
「すげー！」
俺の証明はルコルの実でっていうのが鉄板か。なんとも微妙な扱いだ。
サディナに見せると異様に喜ぶ。
「色々と苦労しているみたいだな」
一応、当たり障りのない言葉を錬に投げかける。
この手のソロ志向の、しかも追い詰められた奴は何をするかわからないからな。
実際、俺もラフタリアやフィーロを配下にする前は、復讐することだけを考えていた。
「ああ……ギルドもまずは国に戻れとうるさいし。フリーの魔物退治や賞金首討伐を行っても賞金はピンはねされる。挙句の果てにあれだぞ！」
クールを自称する錬が怒りを露わにして愚痴った。
ま、気持ちはわからなくもない。同じ経験をしたしな。
「だから魔物のドロップとかを売って細々と食い繋いでいるが……うんざりしてきた。どいつもこいつも掌を返しやがって。なんで俺がこんな世界を守らなければならない」
称賛欲求しかないのかと呆れてくるな。相変わらずゲーム感覚でいるようだ。
「人なんてそんなもんだよ。盾の悪魔だった頃の俺はお前と同じか、それ以下だったんだぞ？」
自分の経験に当てはめて、理解したような振りをする。

錬も少しだけ気を許したのか、俺の言葉に頷いた。
「そ、そうか……」
少しは俺の体験を経験してもらいたいが、ここで心が潰れて死なれたらたまったもんじゃない。
つーか弱すぎだろ、何もかも。
「さて、何を話すとするかな」
正直言って錬と何を話せばいいかと考えてみても、別段話題にしたいことが出てこない。
いや、波に挑めと言ったり、霊亀の時に何があったのかを尋ねたりはできるが下手に刺激すると危ない。
「……」
沈黙が俺と錬を支配する。
世間話、近況、これまでの状況を話すにしても今の錬には自慢にしか聞こえないよな。
しょうがない。似たような境遇の元康を話題に出して、お前は違うよなと話を持っていこう。
「数時間前に元康に会った。別に俺や国は罰する気はないと言おうとしたんだがな、俺の話も、生き残った仲間の話も大して聞かずに逃げちまったよ」
正確にはエレナが元康を思い切りフッたわけだが、そこは語らない。
「……そうか、元康の仲間は生きてるのか」
と、錬は何やらトーンダウンしながらポツリと呟いた。
「そういえば……」
錬の仲間は死んだのか？
キョウがそれっぽい台詞を言っていたような……違ったか？
イノシシのように突撃してきたとか言っていたな。
「……」
俺が黙っていると錬は重い口を開いて話し出した。
「俺は尚文を出し抜いて霊亀を倒しに行って――」
なんでも錬の知るゲームの話では、この地域一帯全てが手遅れになるほどの大きな被害が起きて、それこそ……

国を挙げての調査班が組織されるほどにまでになったそうだ。
思い切り炎上しただろ、という突っ込みは我慢しておくか。
適正Ｌｖは60前後。80もあれば余裕でボスである霊亀を倒せると錬は踏んだ。
……元康の時と同じだな。
俺を出し抜いて強力な霊亀の武器を得ようとか考えていたんだろ。
確かに飛びぬけて強くはあるな。
だが、根本的な性能ではカルミラ島で強くなった俺の足元にも及ばない。
遠くに現れた霊亀を指差して錬は仲間と共に走り出した。
「よし！　いくぞ！」
余りにも大きなその巨体に仲間達が驚いて錬に尋ねた。
「大きい……こんな相手に勝てるんですか!?」
「勝てる！　俺達は十分強くなった！」
確証を持って錬は言い放ち、霊亀に向けて走り続け、近づいた。
その途中で誰かがスキルを放っているような光景が見えたが、近くにいる冒険者が戦っているのだろうと気にしなかった。
並みの冒険者や自分以外の勇者ではこの化け物を倒せないと自惚れながら霊亀に向けて剣を振るった。
「ハンドレッドソード！」
流れるように発動に時間の掛かるスキル、雷鳴剣に繋げる。
「雷鳴剣！」
しかし……霊亀には、大したダメージを与えられなかった。
この辺りは元康と同じようなことだったから省略。
錬は首を傾げながら剣を振るう。
諦めず、霊亀を倒して、人々を救うために戦い続ける。
「うおおおおおおおおおおおおおおお！」
――気が付いた時、錬の周りには……仲間の死体が転がっていた。

それはもう……無残な死体で、身元なんてわからないほどだった。
ただ、ぼんやりと仲間が死んでしまったことだけは理解したという。
「な……嘘だろ……全員、Ｌｖ80あったはずなのに……」
そんな馬鹿な！　と錬は頭が真っ白になった。それからしばらく放心していた。
僅かな可能性としてゲームのように仲間が蘇生することを願った。
だが、それが叶わないことを、さすがに錬も理解していた。
そんな絶望的な光景に立ち尽くしていると、何者かに不意打ちされ、気を失ったそうだ。
おそらくはキョウの操る霊亀の使い魔だろう。
で、気が付いたら治療院のベッドの上だったらしい。

「俺が負けたのは、アイツ等が弱かったからだ。そして弱いから死んだ……もっと連係を駆使すれば勝てたんだ」
淡々と、自分は悪くないと言うかのように呟く錬。
これは……救いがない。
錬を信じて最後まで戦ったアイツ等も浮かばれないな。
「俺は悪くない。アイツ等が想像よりも弱かったのが原因だ。悪くない。悪くないんだ！」
……これは自分の罪から逃げるために言っているな。
同情する必要はない。
とは思うが下手に刺激しようものならまた逃げかねない。
「それは……しょうがないな」
心にもない台詞を俺は紡ぐ。
正直に言えば錬自身の怠慢が原因なのは明白だ。
自分の知るゲーム知識だけで突き進み、仲間の死について自己弁護で罪の意識から逃げる。
あの当時……ラフタリアやフィーロはどれほどの強さがあったかな？
少なくとも霊亀相手に不覚を取ることはなかったし、死にはしなかったと思いたい。
それくらいの、潜在的な強さはあったはずだ。

そもそも上手く立ち回れれば、あのリーシアですら生き残れたんだ。
人の所為にする前に反省をしろと文句を言ってやりたい。
とは思うが、ここは我慢しておこう。
「錬、今度こそ俺の言った通りに強くなって、新しい仲間を引き連れて波に挑めばいい。次の鳳凰の封印が解かれるまで二ヶ月と三週間ある」
まだ時間はあるんだ。
それまでに俺が教えた知識をもとに努力すれば、錬はやり直すことができるだろう。
素直な気持ちで言えば錬を弾劾したい。
が、世界のためにも死なれたら困る。
四聖同士で協力しないと波や鳳凰に世界を滅ぼされかねない。
……まあ、オストの話が本当ならばこの世界の連中には世界平和のために犠牲になってもらうのも一つの手ではあるんだがな。
だが、霊亀のような事件が起こらないとも限らない。
「ああ」
「体裁が悪いなら俺の管理している村に来ればいい。ラフタリアを知っているだろ？　アイツの故郷だ。最初の波があった場所でな、現在復興中だ。よければしばらく仲間を貸してやってもいい。無茶はさせられないがな」
「いいのか？」
錬は俺の言葉を善意に解釈しているようだ。
良い傾向だ。
上手く話術で引き入れて、飼い慣らしてから強化方法を叩きこむ。
そうすれば容易く死ぬことはなくなるだろう。
後はいつでも村から出ていっていい。
今の錬に必要なのは本当に強くなる方法なんだからな。
俺達しか知らない話をしてやれば、視野も広がるだろ。
「わかった」

「よし！　じゃあ……」
そう言おうとした時、酒場の扉の向こうに見覚えのある人影が見えた。
「少しここで待っていてくれ」
「どうした？」
下手に錬を連れていくのは危ないな。
返答の内容次第じゃ不審に思われる。
なんだかんだで錬は勘が良いと思うから、これからする返答によっては今までの会話が水の泡だ。
「ちょっとな。村に帰るにしてもラフタリアとフィーロが帰ってきてからの方がいいかと思ってな。馬車に大事な荷物があったのを思い出したから取ってくる」
「そうか？」
「ついでに美味い飯も持ってくるから楽しみにしていろ」
馬車にはフィーロが食べたいと騒いだ、とっておきの燻製肉があるからな。
グルメなフィーロが喜ぶんだ。錬も食えば気に入るだろう。
「軽くこの酒場で休んでいてくれ」
錬にはここで待っていてもらおう。
「わかった」
錬が落ち込み気味にカウンター席で頷いた。
俺は立ち上がって早足で、見かけた人影を追いかけた。

九話　ヴィッチ命名

俺は一人で尾行を開始した。
ラフタリアがいればよかったんだが、盗賊狩りに行かせたのだからしょうがない。
せめてラフちゃんがいればな……連れてくればよかった。

どうやら奴も誰かを尾行しているようだ。

いや、正確には話しかけるタイミングを見計らっているように見える。

人気のない場所を歩き続ける。

一体どこまで移動する気だ？

くそ……ラフタリアがいないから見つからないように建物の陰に潜んだりしなきゃいけない。

面倒極まりないが直接話しかけようものなら逃げられるからな。

どこかを拠点にしているならラフタリアが帰ってくるのを待って、何か策を練ったうえで奇襲して生け捕りにするべきだろう。

「どうするかな……エレナみたいなことにならないといいんだけど」

俺が後ろについてきているのをまったく気付いていないのか、尾行相手は前を見て落ち着きなく歩いている。

一体、何に不安になっているんだ、この馬鹿は。

と、思いながら馬鹿の視線の先を覗き込む。

そこで馬鹿が慌てたように立ち止まった。

その視線の先の光景を見て俺も声を失った。

なんとビッチが女２を連れて……なぜか、先ほどの酒場で錬と話をしている。

何を話しているんだ？

馬鹿＝元康を無視してビッチに近づく。

というか捕らえるために進む。

元康はポータルで逃げられてしまうから捕まえられないが、ビッチは別だ。

そもそも錬に何を囁いていやがる！

「槍は勇者の器ではありませんわ。私は初めて出会った時からレン様こそ、世界を救う勇者だと確信しておりました」

ビッチが凄いことを言っている。

飛び出していって顔面に拳を叩きこんでやりたい。

俺は元康を無視してツカツカと酒場に向かう。

「それに……槍は盾と同じく私達に無理な関係を強要しておりましたの。私、言うに言えなくて……こうして自由の身になった今、レン様を捜しておりました」

凄くウザイセリフだ。そしてほとばしる今更感。

お前、元康と何ヶ月一緒にいたと思っているんだ。

俺は思わず、放心状態で隣に俺がいるのにも気付いていない元康を見る。

「ぐぬぬ……」

すげぇ、あの有名な顔つきで覗き込んでいる。

「しかし、お前は前々から何か問題があるって女王が言っていたと思うのだが……」

さすがに錬も警戒気味だ。まあ、あれだけ暴れたわけだしな。

「レン様はママの正体を知らないのですわ。ママはメルロマルクの女狐と呼ばれた女。私を辱めることによって多大な利益を生み出す構図を作り出したのです。外道な盾に信用してもらうために。そして槍も取り込まれてしまっている」

ビッチは更に畳みかけるように言い放った。

俺はビッチの言葉に唖然とし、怒りでわなわなと震える。

「そしてレン様の仲間の命を奪った霊亀を裏で操り、この世界の人々の信頼を卑劣な手腕で勝ちとったのは盾の悪魔なのですわ！」

こいつ、何を言ってんだ？

全て俺が原因ってか。何も変わってないな。

よし、今度こそ処刑してやる。

「そ、そうだったのか……だからあんなに強力になっていたんだな！」

おい！　なんで信じてるんだよ！　話に無理がありすぎだろ！

やがてビッチは錬を抱きしめて髪を撫でた。

「レン様……お仲間を亡くしてとてもつらかったでしょう……今は泣いていいのです。大丈夫です。世界の全てがレン様を罪人だと言い張ろうとも、私は信じます。レン様が世界のために戦ったのだと」

弱った奴に取り入るのがうめぇな。

というかラフタリアのパクリか？
ふざけんな！　ラフタリアと俺の大事な思い出がお前の所為で汚されたぞ！
絶対に許さん！
俺がビッチに向かって怒鳴るよりも僅かに早く――
「待て！」
元康が大声で駆け寄る。
その日には憎悪が溢れている。
これがネトラレというやつだろうか。
いやいや……。
「あら、槍じゃないの」
凄く嫌味ったらしい顔で髪を後ろに回しながらビッチは悠々と元康を睨む。
「どうしたのかしら？」
「それはこっちの台詞だ！　一体どうしたんだ！　錬に取り入りやがって。捜したんだぞ！」
「あはは、無謀な突撃をするほど私、馬鹿じゃありませんの。レン様、聞いてください」
嘘泣きをしながらビッチは錬に縋りつく。
「ピンチになったら、あの槍は私達に向かって『注意を引き付けろ、その間に俺は逃げる』って私達を壁代わりにしようとしたんです。私達は怖くなって逃げたんですよ。そうしたらしつこく追ってくるんです。敵前逃亡は許さないって」
「嘘だ！」
頭が痛くなってきた。というか元康のこの表情、覚えがある。
当たり前だ。あの日の俺じゃねーか！
ビッチ……貴様はまた同じことを繰り返すんだな。
勇者三人を毒牙に掛けようとは……貴様はビッチを超越したビッチ、名付けてヴィッチだ。
魔女という意味も兼ねている。
抵抗されたと言って殺してやろうか。元康をそそのかすには丁度良い！

いくら弱いとはいってもヴィッチ程度、容易いだろ。
「ほら！　レン様！　槍は盾の悪魔を連れていますわ！　レン様を生け捕りにするために槍と結託していたんです！」
うん、そうしよう。それしか考えられん！
くそ！　ラフタリア達がいれば元康に頼らず、あのクソ女の息の根を止められるというのに！
「お前、そんなことをしようとしたのか。尚文と同じかそれよりも外道だな。信頼を裏切るなんて人の風上にも置けない奴だ」
「錬、アバズレは嘘を言っているんだ！　信じてくれ」
「誰が信じるか！」
「そうです！　毎晩私達に関係を強要して……じゃないとパパを殺すって脅したんです！　その証拠に私のことをずっとアバズレと呼ぶんですよ！」
「嘘を言うな！　俺は……本当に心配したんだぞ！」
「本当の仲間ならちゃんとした名前で呼ぶべきだ！」
「そう呼ばなきゃ罰せられるからそうしてたんだろ！」
元康の不幸をもっと見ていたい気もするが、もう我慢できん。
「よくもまあそこまで嘘がボンボン出てくるもんだな、ヴィッチ」
ヴィッチの眉が高く跳ね上がる。憎い相手を見つけながらも、余裕を見せつける表情だ。
だが、それはこっちも同じ。
「悪いがお前には死んでもらうとしよう。こんなところで勇者の不和を招こうとしている罰だ」
ここまで暴れたんだ。さすがの女王も処刑はやむなしと思うだろうよ。
素直に城に帰ればいいものを……この女は勇者同士の不和を招くことしかできないのか！
俺の言葉を聞いて最初に動いたのは錬だった。
「マインに近寄るな！」
錬が剣を振りかぶる。チュインと俺の腕に錬の剣が火花を散らす。
酒場内に悲鳴が響き渡る。

勇者同士の戦いが始まったからな。酒場にいた連中は我先にと逃げ出した。
「おい、錬。俺とヴィッチを比べてどっちが信頼に値するかよく考えろ」
俺は今まで錬に嘘を言った覚えはないぞ？
誠実というわけではないが、錬を騙そうとしたことなんてほとんどない。
「うるさい！　マインから離れろ！　流星剣！」
おっと、今の錬の攻撃がどんなものかは知らないが、後方には元康がいる。
流れ弾に当たって死なれたらシャレにならん。
盾を前に向けて受け止める。
元康も戦闘態勢に入ったな。状況が状況だが、やるしかないか。
「錬、ヴィッチは信じない方がいいぞ。そいつは女王の言う通りの奴なんだからな」
人を平気で冤罪に陥れたり、苦しむ様を見たりするのが大好きな奴なんだ。
きっと錬も近いうちに騙されて捨てられる。
元康のように！
「元康の顔をよく見ろ。情けない顔だろう？　これが本当にそんなことをしていたような奴の顔か？」
「いや、元康も女王に取り込まれていると聞いた！　全ての元凶は女王と尚文、お前等だ！」
「その情報源はたった一人だけなんじゃないのか？」
「それでも俺は、俺を信じてくれる人のために戦う！」
「冷静になれ。普段のお前ならちょっと考えればわかるはずだ。そもそも俺はお前のことを信じただろ」
これでも言いたいことを我慢して錬に歩み寄った台詞を言ったんだぞ？
「うるさい！」
あー……こりゃ無理だ。自分が正しいと本気で思っている。
気持ちはわからなくもない。
俺も最初はおかしいなと思うことはあっても、信じよう信じようと自分を誤魔化していたからな。
ましてや今の錬は精神的に不安定だ。
甘いことを言ったヴィッチを信じたいんだろう。

結局は男の俺よりも女のヴィッチの方を信じると決めたのか！
「やっぱりお前が全ての元凶だったんだな！　仲間が死んだのも、俺が迫害されるような日に遭っているのも尚文、全てお前の所為だ！」
な――！
ブチンとその時、俺の堪忍袋の緒が切れる音が聞こえた。
不幸なのはここにラフタリアがいなかったことだ。
いたらもう少し冷静でいられたはずだ。
「あーそうかそうか。お前がそういう態度を取るというのなら、俺も言わせてもらう。そうやって他人の所為にしていたら楽だよな？　仲間が死んだ？　いつまでもゲーム感覚でいたツケだろ。お前がやったのは無謀な突撃だよ。誰かを恨む前に仲間を殺した自分を恨むんだな」
「なに⁉」
錬が怒りの形相で俺に怒鳴る。
もう我慢も限界だ。
ここまで自分勝手に都合のいいことしか信じない奴のことなんて考えてやらない。
「俺は悪くない？　お前を本気で信じてついてきた仲間のことをそんな風にしか言えないとは……勇者どころか人間失格だな」
仲間のためにとかの綺麗事ならまだしも、自分は悪くないとか。
コイツ……俺の想像した通りの自分勝手な後輩育成プレイしかしたことがないのか。
強すぎるボスに特攻して仲間を全滅させておいて、弱いのが悪いとか言いきるとか……やはり俺の思った通りただのゲームだと考えていたんだろう。

「この世界はゲームじゃない。いつまでもそんな感覚でいられると困るんだよ」

「う、うるさい！」

「どんなに後悔しても、俺達は波が終わるまで元の世界に帰れない。もとはといえばこの世界の連中が行った身勝手な勇者召喚という名の誘拐だったかもしれないし、確かに俺達に非はない。だが、駄々を捏ねても生き残るには戦わなくちゃいけないんだ」

「くっ……！」

「お前は俺に言ったよな『都合が悪くなったら逃げるのか？　最低だな』って、その言葉を口にしたお前にだからこそ言いたい。お前は最低に成り下がるのか？」

自業自得だな。

仲間が死ぬまで危険の有無の分析もできないとは……俺だってちゃんと戦えるかどうか試して進むというのに、こいつは全部ゲーム知識でしか物を見ていないんだ。

自ら調べることもせず、先人が見つけた物をネットで知り、攻略していく。

ある意味、卑怯者だ。

自ら何かを発見したことなんてないんじゃないか？

「もうゲームは終わったんだ。お前の知識は役に立たないんだよ」

「違う！　俺は……俺は、悪くない！」

「レン様、盾の言葉に惑わされてはいけません！」

ヴィッチが間に入ってきて、会話の邪魔をする。

どこまでも目障りな女だ。

「失せろヴィッチ！　死にたくなければ黙っていろ！」

すると、殺気のようなものでも感じ取ったのか、ヴィッチは小さく悲鳴を上げた。だが、更に口を開こうとしている。

「そうか、死にたいのか。シールドプリズン！」

盾で作られた檻が出現し、ヴィッチを一瞬にして閉じ込める。

よし、後はラースシールドに変えてアイアンメイデンでぶち殺すだけだ。



ふと冷静な部分が俺にブレーキを掛ける。
ここでラースシールドにして大丈夫か？　ラフタリアもフィーロもいないんだぞ？
怒りに飲まれてダークカースバーニングSで錬を焼き殺したらとんでもないことになるぞ。
「俺は悪くない！　マインを解放しろ！」
「何が解放だ。元康並みに面倒臭い野郎だな」
コイツ等何かにつけて解放解放ってうるせぇんだよ。
そんなに解放されたきゃ、生から解放してやろうか？
「そもそもお前は以前、俺に『許されないぞ』と言ったよな。お前が認められないなら俺がお前に言ってやる。お前のしたことは許されない。お前は立派な人殺しだ」
「黙れ！　うるさい！　口を開くな！」
ふるふると自分を責めるように震える錬。
疫病の村で多くの人を死に追いやった時に自分が悪いと認め、その場へ向かおうとした姿が思い出される。
自分の中で答えが出ている。でも、それを認められない。いや、認めるわけにはいかないといったところか。
本当はわかっているんだ。
「わざとやったことじゃないのは理解している。だが、それでもお前は生きている。生きているからこそ、しなくちゃいけないことがあるだろう？」
「うるさい！　口を閉じろ！」
「何度でも言ってやる。本当はわかっているんだろう？　お前が今、何をしなくちゃいけないのか。それが、そのクソ女を信じることじゃないことは俺が断言してやる」
「黙れぇえええ！　俺はマインを信じる！」
剣を抜き、錬は振りかぶる。俺は盾で錬の攻撃を往なす。
カンと盾から軽い音がした。
……ん？
「食らえ！」
返す刃で錬は俺の顔面に向けて斬りつける。

俺は……守りすらもしなかった。
ガン……と、金属音が俺の耳元でし、ニヤリと錬が笑う。
しかし直後に信じられないというように大きく目を見開く。
「な……馬鹿な……」
「今装備しているお前の剣、欲しがっていた霊亀の素材で作られた物のようだが……弱すぎないか？」
そう、錬の攻撃を、俺は構えることなく受けきれた。
もちろん、完全強化している盾だが、いくらなんでも弱すぎるだろ。ラフタリアなら今の攻撃で俺は傷を負ったはずだ。
四聖よりも強化倍率の悪い眷属器の所持者で、なおかつ呪いの所為でそれが三分の一になっている攻撃でもな。
「レン様、ここは撤退しましょう！」
チッ……問答をしている間にシールドプリズンの効果時間が切れた。
ポータルを使われないうちに次の対処をしないとな。
本当ならラフタリアかフィーロを使うんだが、今俺が使えるのは一人しかいない。
「元康！　もうわかっているだろう？　さっさとそこのクソ女を仕留めろ！」
「お、おう！」
「嘘だ！　チートだ！　強さを独占するな！」
何度目のチート発言だ。チートになりたいのはお前の方だろうが。
と突っ込みたい衝動に駆られたが、今はそれどころじゃない。
「現実を直視しろ！　お前の敗因は――」
ガンガンと何度か俺に斬りつけるが、その全てを俺は無傷で受け止めた。
「うわあああああああああああああぁ！」
完全に錯乱してるぞ。本来ならお前はもっと冷静に事態を分析できるはずだろ！
くそ……チートチートと俺を罵っていたが、あまりにも状況が悪すぎて冷静に考えられなくなったんだろう。
とりあえず、錬は無視してヴィッチを早く殺そう。
また何か企んでいるようだからな。

「元康！　何を迷ってやがる。早くしろ！」
「わ、わかった！」
俺の意図を察知した元康が槍を構えて近寄る。
こっちも錬と同じく、かなり錯乱しているようだ。
とはいえ、俺の命令を聞くようだから元康にヴィッチを仕留めさせよう。
「レン様！」
ヴィッチが錬に大声で呼びかけると、錯乱していた錬が我に返る。
このままじゃヴィッチが殺されると察したからか？
くそ、そのまま俺をずっと攻撃していればいいものを……。
「わかった！　閃光剣！」
不利を悟ったのかヴィッチの言葉に錬が頷き、スキルを放つ。
剣がフラッシュして目が眩む。
「う……」
元康も目が眩んで動けないようだ。
「く……お前！」
目がチカチカする。
ヴィッチを逃がさないように手を伸ばそうとしたのだが時すでに遅し、錬がヴィッチと女2を抱えて剣を振りかぶった。
「転移剣！」
元康の時と同じように錬が消え始める。
ヴィッチも一緒だ。
「ヴィッチ、今回は逃げ切れたようだが、地獄の果てまで追いかけてやる。せいぜい怯えて待っていろ」
「フンッ！」
俺の言葉に鼻音で返して、ヴィッチの姿は完全に消失した。
このスキルは本当に厄介だ。

とりあえず、俺は残された元康に目を向ける。
元康は力が抜けたかのように俯いて溜息をついている。
心ここに在らずって感じだ。
「どうした？　逃げないのか？」
「もういいよ……みんなを信じて捜したのに、こんなことばっかり……町や村の連中も冷たいし、疲れた……」
目が濁っている。世界の全てに絶望している目だな。
カースに侵食されないか不安だ。
「とりあえず元康、お前を城に連行する。それから色々と俺の話を聞け。やっと真実に気付いたんだからな」
これで元康が信じたかった女が如何にクソ女であるかを理解しただろ。
共通の敵さえいれば結束は深まる。
そうしたら強化方法の共有ができて俺も元康も万々歳だ。
後はその深まった絆で共にヴィッチを殺せばいい。
「……はいはいわかった。どこにでも連れていけ。殺すなら殺せよ……」
投げやりな言い方で元康は頷いた。
「誰が殺すと言った……」
まあ、あんなことがあったらしょうがないのかもしれないが。
「どいつもこいつも俺が助けるのが当たり前で、少しでも失敗すると石を投げてくるし……信じてたアバズレもエレナも本当はあんな奴で……もうどうでもいい……」
仲間を信じて苦境を乗り越えてきていたのに、その仲間の本心に触れて絶望したってか？
……日も沈んできた。
村に帰るか？　とはいえラフタリア達も待たないと。
「災害の原因はもう俺でいいよ……これで満足か？」
「いや、お前じゃねーよ……なんで俺が別の異世界に行ったと思ってんだ」
災害の原因はキョウだろ。間違っても元康じゃない。
「一人にさせてくれ……」

こりゃあ村に行かせるのはやめた方がいいな。

あいつ等騒がしいから元康を下手に刺激しかねない。

アトラやサディナが俺にじゃれついている姿を見たら、自分との差に落ち込みそうだし。

しょうがない……今日はこの村で宿を取って元康の心の整理ができるのを待つとしよう。

「ただいま帰りました。ナオフミ……様？」

そこにラフタリアとフィーロが盗賊共を締め上げて帰ってきた。

「何があったのー？」

「あのな――」

俺はラフタリアとフィーロに先ほどの出来事を説明した。

「あの方はどうしてそこまで……」

ヴィッチがラフタリアのバクリネタをやった件でラフタリアは完全に呆れ返っているぞ。

「俺は絶対に許さん！」

フィーロが落ち込む元康を指で突いている。

まったく、女の正体を知っただけでここまで落ち込むのか。

いや、これまでの生活で疲れ切っていたのかもしれないな。

知ったことではないし、苦しむコイツの顔をもっと見ていたいけど、ラフタリアがなんか俺を睨んでいるような気もする。

「ナオフミ様？　どうかしたのですか？」

「いや、別に。さっさと宿を取ろう」

「村に帰るのではないのですか？」

「元康がな……今、下手に刺激すると危ない。成功している俺と自分を比べて自害でもされたらたまったもんじゃない」

「わ、わかりました」

「後で村に戻って連絡はしておく。丁度良いからゆっくりと休もう」

アトラとかサディナとかいろんな面倒事が村には転がっているからな。

俺自身の休養も兼ねて今夜くらいはいいだろ。

こうして俺達は元康を連れて、宿を取るのだった。

十話　新たな目覚め

今回宿泊した宿では飯が出ないので、元康を連れ、食事も兼ねて酒場に入る。

元康は酒場に入るなり、カウンターの隅に座って酒を注文、それを少しずつ飲みながら俯いている。

どこまでも女しか頭にない奴が、それを失ったらあれか。

尻の軽そうな女が元康に近づく。

「私と一緒に飲まない？」

「……悪いが一人で飲みたいんだ。構わないでくれ」

ありゃあ重症だな。

ヴィッチなんて元からああだろ。そこまで信じていたのか？

俺達の方は適当に晩飯を食った。量もあるし安くていい感じだ。

見た感じだと南西の村で採れた赤いトマトのような実を使ったものが多いな。

で、それなりに美味い飯を食えて機嫌が良くなったフィーロが詩人と一緒に歌い始めた。

「嬢ちゃんもう一曲頼むぜ！」

「うん。いいよー」

フィーロがものすごく調子に乗って歌いまくっている。確かに美声だよな。

なんか詩人と意気投合して変わった歌を歌ってる。アニソンみたい。

絆の世界の歌でも歌っているのかな？

気の所為か……ステージ前にいる連中の目つきが怪しい。

むしろ……。

「……ナオフミ様、私、前に聞いたのですが魔物の中には歌声で船乗りを惑わし船を座礁させる魔物がいると聞き

ます」

「偶然だな、俺もその魔物のことを考えていた。ハミングフェーリーの頃に習得した歌による変わった魔法かもしれん」

ゼルトブルのコロシアムでもその片鱗を見せていた。

いろんな種類の歌をフィーロは覚えているし、詩人の歌を自力で組み合わせて更なる歌を作り出せるっぽい。

で、美声で惑わすというとハーピーとかセイレーンとかそんな類の魔物だ。

なんかそれを彷彿とさせるかのように、周りの連中がうっとりした目で聞き入っている。

やがてフィーロが歌い終わると、歓声が巻き起こる。

アンコールを要望されるがさすがのフィーロも飽きたのか「やー！」とか言いながらステージを降りる。

好評だったお陰か、花束とかを贈られている。

ついでにニンジンみたいな野菜ももらっている。

飯の方が反応がいい分、みんなフィーロに食いものを渡す感じになってきた。

山盛りになったプレゼントを両手で抱えながら、何を血迷ったのかフィーロは元康の隣に行く。

「どうしたの？　いつもの元気がないねー？　らしくないよー？」

そういや元康ってフィーロの外見は好みらしくて失踪前によくフィーロに色目を使っていたな。

天使萌えとか言っていた覚えがあるし、ゲームキャラの中に似たツボがあったんだろうな。

そもそも女は基本的に天使とか思っていたふしがある。

「……」

非常に億劫そうに元康はフィーロを見て、視線を戻す。

フィーロを無視とか……見た目は好みらしいのにな。

こりゃあ重症だ。

「お腹が空くとね。元気がでないんだよ？　元気のでる歌を歌ってあげる」

やがてもう一度ステージに上がったフィーロが歌い出した。

嫌だったんじゃないのか？

なんかテンポがいいな。というか……。

「フィーロっていろんな歌を歌うよな。ハミングフェーリーだった頃よりもレパートリー増えてるだろ、アレ」

「メルロマルク国内の色々な町を巡りましたからね。元々歌うのは好きみたいですよ。酒場に行くと大体詩人さんの歌に聞き入ってそれを覚えていましたよ」

そういや機嫌が良い時はよく歌っていたもんな。

「村の子達にも好評で子守唄を歌っていました」

「ああ、そういえばそうだったな。メルティと寝ない時は村で歌っていたのを覚えている」

元康に向けて踊りながらフィーロは歌う。

見ている俺も元気になるというか、飛行機が変形するSFアニメのノリに見えてきた。

誰だ？　あんな歌を教えたのは？

絆か？　アイツもゲーマーだし、アニメ趣味があったっぽいからな。

釣りバカだったがな。

歌い終わったフィーロはもう一度元康の方へ行く。

「おい、あんまり構うなよー。女嫌いになってるからな」

「はーい」

とか言いながらフィーロはごそごそともらった野菜や花を漁る。

「これ食べて、いつもの欲望に忠実な元気出せー」

戯れとでもいうかの如く、元康にニンジンっぽい野菜と花を差し出した。

フィーロは自分の好奇心に忠実だからな。

珍しく落ち込んでいる元康を見て、興味でも湧いたんだろう。

村のガキ共も最初はあんな感じで覇気がなかったし、俺がどうにかして元康を説得しないといけないと愚痴っていたのを聞いて協力しようとしているんだと思ってやろう。

と、思っていたのだが、元康はフィーロを見て震え始めた。

「う、うわああああああああああ！」

元康が号泣しながらフィーロに抱きついた。

「にゃああああああああああああああああああ!?」

当のフィーロはシャレにならない悲鳴を上げている。

そして抱きついてきた元康から逃げるように体をねじるのだが、元康の力は思いのほか強く、逃げることが叶わない。

「う……うううううう……」

元康の奴、ガチ泣きしている。

「ごしゅじんさまー！　助けてー！」

フィーロの方も涙目で俺に助けを求めて手を伸ばしてきた。

……何がどうしてこうなった？

「何やってんだ……」

フィーロを助けようと近づいたんだが、元康の奴、嫌がるフィーロの胸で嗚咽を漏らしながら泣いている。

ヴィッチがダメならフィーロか？

いや、まあ……元康は随分前からフィーロの人型時の外見が好きだと公言していたけどさ。

「元の姿に戻れば元康も驚いて離れるだろ」

「う、うん！」

元康はフィーロの本当の姿にトラウマを持っているからな。

魔物の姿のフィーロには近づきもしない。

俺の助言通りフィーロは魔物の姿に戻る。

だが……。

「スーハー……フィーロちゃんのかほり……くんかくんか」

元康がフィロリアル姿のフィーロに抱きついたまま匂いを嗅いでいる。

うわ！　気色悪い！

「離れない！　離れないよごしゅじんさまー！」

あの元康がフィロリアル姿のフィーロに抱きついたまま離れないだと？

どういうことだ！　いや、理由は思いつくけど。

敢えて言おう！

「落ち込んでいる奴に甘い言葉を囁くからそうなるんだ！　責任を取って面倒を見るんだな！」

「待ってください。その理屈だとナオフミ様は私にこうなるはずです！」

「何を言っているんだラフタリア!?」

ラフタリアも相当混乱しているっぽいな。

というか俺も元康を励ませと暗に命じたのに、フィーロに責任を擦りつけるのはどうなんだ？

まあ、俺も錬に甘い言葉を投げかけて失敗したしな。ヴィッチが成功したのが嘆かわしい。

……俺も混乱してるな。

「やー！」

「フィーロたんフィーロたん……」

すりすりと元康が頬ずりを始める。

フィーロの奴、怪力で元康を引き離そうとするが、本気で抱きついている元康はタコの吸盤のようにくっついたままだ。

ブチブチとフィーロの羽毛が千切れそうになって、痛みで力が入らないみたいだ。

意外と痛がりだからな、フィーロは。

「助けてー！」

ガチ泣きを始めたフィーロが助けを求めてるけど、これはどうすればいいんだ？

「うーん……元康」

「フィーロたーん」

ダメだ。俺の話なんて聞いてない。フィーロの言葉も耳に入っていない。

元康がついに壊れた。

というか……新しい性癖に目覚めたのか？

フィロリアル姿のフィーロすらも平気なのか。股間を蹴られたトラウマはどこへ行ったんだ？

「ごしゅじんさまー！」

元康を連れていくことになっているのだが、もはやそれどころではなさそうだ。

「責任を持てないならちゃんと言い聞かせて捨ててこい」

「うん！」
「そんな、捨てられる飼い魔物じゃないんですから……」
「元康、元気になったのならいい。俺が教えた強化方法をちゃんと信じて自身の強化に励めよ！」
「わかりました！　フィーロたーん――……」
フィーロは抱きついた元康をそのままにして酒場から走り去っていった。
「ええー……」
ラフタリアが呆れたように気の抜けた声を上げる。
「とりあえず……元康の連行は先延ばしだ。だが、苦しみから立ち直るのが早いな元康は……」
恋多き男・元康。ヴィッチ達がダメならフィーロに鞍替えとは……。
フィーロには馬のような側面があるからな……上手く言ったつもりか？　俺。
全然上手くないぞ。
「あれはもう苦しむとかそういう次元を超えてしまったような気がするのですが？」
「フィーロに悪女を演じてもらえば元に戻るだろ。話が通じるようになったら『ご飯だけが目当てで近づいたの』って言わせれば戻るさ」
「……フィーロにそんな演技ができますかね？」
どうだろうな。
まあ俺がこう言え、と命令すればできなくはないと思うが……不安が残る。
俺はしばらく無言で考えた後、言う。
「まあ、どうにかなるだろう」
「そうですかねー……」
「た、たぶん」
なんか嫌な予感がするけど、こうでもしないと俺達が悪いみたいになってしまう。
大丈夫、あの元気な元康だ。
明日には女のケツでも追っているはずだよ。
ちなみにフィーロは元康を山の崖に突き落として帰ってきたらしい。

容赦ないな。
フィーロの羽毛も結構抜け落ちていた。文字通り捨て身で捨てたようだ。
と、まあ気楽に構えていたのだが……翌朝のこと。

「さて、元康の確保は保留になったし、女王に事情を話して村に帰るか」
村のセクハラ連中の猛攻がない素晴らしい朝。
ストレスも大分緩和してゆっくり眠れた気がする。
今日もやらなきゃいけないことが多いから、がんばらないとな。
「そうですね」
「ごしゅじんさま、フィーロ早く帰りたい……」
フィーロは怯える瞳で俺に懇願する。
元康に苦手意識を持ったようだ。元々嫌いだったからなおのことか。
そもそも嫌いなのになぜあんなにちょっかいを出したのか。
「というか……なんで励ましたんだ？　なんとなく俺のためだとは思うが」
「元気がなかったから、村の子と同じように励ましたの」
まったく……元康には劇薬だったな。
ありゃあしつこいぞ。
「今度遭遇したら俺が言う通りに言ってきちんと振るんだぞ」
「はーい」
「さて、朝飯を作らなきゃいけないから速攻で帰るぞ。フィーロ、俺達はポータルで帰るからお前は馬車を引いてこい」
「やー！　あの槍の人が来るー」
「んなわけないだろ。さすがの元康も――」
と、部屋の扉を開ける。

「おはようございます。お義父さん」

咄嗟にガチャリと扉を閉める……。

なんで元康が部屋の前に陣取っているわけ？

しかも訳のわからないことを言っていた。

いきなり俺をお義父さんとか……年上の息子を持った覚えはない。

そもそも奴は元康だ。どういう因果があってもありえないぞ。

俺は額に手を当てて俯いた。

「なんだ今のは……」

「どうしたんですか？」

「えっと……」

起きたばかりで頭に血が回っていない。

俺はラフタリアに事情を説明するのが面倒だったので、扉を開けてみるように道を譲る。

ラフタリアは首を傾げながら扉を開けた。

「なんでフィーロたんの部屋に狸豚がいるんだコラアアアア！」

ガス！

「ふげ!?」

ラフタリアが素早く刀の柄で元康を殴打して扉を閉める。

狸豚……起きた早々いきなり凄い言葉を聞いた。

もはや罵詈雑言だ。

「えっと……」

俺と同じポーズを取ってラフタリアは頷いた。

「理由はわかりました。どうしましょう……」

「というか、いつからアイツは部屋の前にいたんだ？」

「随分前にゴソゴソと音がしたような気はしましたが、ずっと待っているとは思いませんでした」

「俺も廊下を歩く冒険者の音くらいにしか思ってなかったけど元康だったのか」

崖から突き落とされた割には元気そうだ。

「フィーロ」

「やー！」

「アレは言わないといつまでも追ってくるぞ。ちゃんと強化方法を実践させて彼に挑ませろ」

「うー……」

眉を寄せながらフィーロは扉を開ける。

「おお、フィーロたん！」

元康が飛びかかってくるのをラフタリアが顔面を鷲掴みにして阻止する。

「放せ狸豚！　俺はフィーロたんに愛の抱擁をするんだ！」

「……」

笑顔だけど黒いオーラを立ち上らせたラフタリアがフィーロに目で指示する。

というか何を言っているんだコイツは。

「えっとね。ご飯が目当てで近づいただけなの、勘違いしないで」

「愛は勘違いから始まるんだよフィーロたん。大丈夫、その打算ですら受け入れるよ」

「やー！」

揺るがねえ。ダメだこりゃ。

意味不明な状況に困惑していると元康がこっちに振り向き、真剣な眼差しで言った。

「お義父さん。娘さんとの仲を認めてください」

「誰がお義父さんだ！」

確かに育ての親ではあるかもしれないが、こんな大きな魔物に変身する娘を持った覚えはない。

「お義父さん、自分は娘さんに救われて真実の愛に気付いたのです。必ず幸せにします。どうか娘さんをください！」

「だから、俺は親じゃない！　そりゃあ育ての親ではあるが、なんでお前の嫁に出さなきゃいけない！」

「やー！　ごしゅじんさま助けてー！　メルちゃーん！」

フィーロも混乱してる！　生憎メルティはこんな所にいない。
「そんな！　親子でそれは犯罪ですよお義父さん！」
「聞いていたのか？」
「どう言い繕ろおうとも親子でそんな関係は不純ですよ、お義父さん！」
「もう黙れ！」
ラフタリアが元康を部屋から追い出して扉を閉める。
思った以上に重症だ。
傷口を完治不可能なくらい抉ってしまったような気がする。
「入れろ狸豚！　フィーロたんとお義父さんを解放しろ！」
「いい加減にしろ！」
ドンドンと部屋の扉を叩く元康。
頭が痛すぎる……。
元々会話が成立しない奴ではあったが、何か脳に支障でも起こしているっぽい。
もはや完全にストーカーと化した元康をどうするか、だ。
原因は……きっとフィーロに優しくされたことだろう。
追い詰められた人間は想像以上に一心不乱になるからな。
俺も然り錬も然りだ。
昨日のアレの何がどう作用してああなったのか、さっぱりわからんが、結果的に元康の心を救ってしまったんだろうよ。
考えてもみれば、元康って以前から色恋に燃えるタイプだった。
というか、元康のこの反応を見るに、まさか追う恋派ってやつか？
……すげぇどうでもいい。この考えは激しく時間の無駄だ！
「騒がしいわね！」
隣で休んでいたらしき冒険者の声が聞こえてくる。
「豚がブーブー騒いでんじゃねえよ！　うせろ！」

「ぶ、豚!?　いきなり何よ！」
……あの女好きの元康が女を罵倒している。
相当、醜い女なんだろう。気になって扉の隙間から覗いてみる。
すると、程々に美人な女が元康と言い争いをしていた。
確か酒場で踊り子をしていた奴だと思う。
これまでの元康からは想像もできない状況だ。
一体アイツの頭に何が起こったんだ……。
というか今の元康の目にラフタリアやあの女はどう映っているんだろう。なんか気になってきた。
カースにでも侵食されているんだろうか。
「どうしましょう。あれでは出られませんよ」
「フィーロ、責任を取って元康を――」
「やー！」
どうすればいいんだよ。あの元康はしつこそうだぞ。
「とりあえず窓から出よう。宿の主には事情を説明して逃げるぞ。馬車はどうするか……」
「わ、わかりました」
馬車を置いている納屋に行ったら元康が察して先回りしていそうだよな。
「フィーロの馬車ー……」
フィーロもそれを理解しているのか目が泳いで落ちつきがない。
元康って本当に馬鹿なんじゃないか？
どうしてこんな事態になったんだ……意味がわからない。
なんで俺達が元康から逃げなきゃいけないんだよ。逆だろ、今までの流れ的に。
「とりあえず元康が物音で気付くから馬車は諦めろ。状況を見て回収する！」
「わかった……」
落胆したようにフィーロは渋々頷いた。
馬車と天秤に掛けても嫌なのか。どんだけ嫌なんだろうな。

こうして俺達は宿屋から逃げ出したのだった。

で、ポータルで城の方へ行く。

ヴィッチのことを女王に報告するためにな。

……フィーロは相変わらずキョロキョロと辺りを探っているな。

「元康がいたらわかるだろ。警戒しすぎだ」

「わかってるけどー、なんかいそうで、やー！」

苦手意識も極まったな。好き好き騒ぐのも逆効果じゃないか。

それに、さすがの元康も城へは……たぶん来ないだろ。

城下町だと顔も知られていて、隠れるのは実質不可能だし。

あいつ、魔法の勉強とかせずに水晶頼りだから、レパートリー増えてないと思う。

ラフタリアみたいに隠れる魔法は使えないだろう。

仮に隠れてもラフタリアなら見つけられそう。

スキルで隠れられたらそれまでだけど、これまでの行動から考えるに、馬鹿正直にフィーロに突撃してくるに違いない。

それに、まだ馬車の所で見張ってるだろうし。

「ま、気にするな」

「うー……」

で、玉座の間で公務をしている女王の元へ行き、昨日のことを説明した。

「というかお前のヴィッチな方の娘はどうにかならないか？　つーか、遭遇したと同時に殺したくなったんだが」

おそらくヴィッチが何やら企んでいるのだろうから、もう賞金首にでもして殺した方が早い。

「ですが……できれば生かして連れてくることを推奨します」

これで生かして連れてこいとか、賞金首にしては甘さが感じられる。

「……あの子がどのようにして国境を越えたのか。槍の勇者の他の仲間は親と同伴していたのでわかりますが」

「エレナの話や元康のことを総合すると、確かに他国から来てるもんな」

なんだかんだでヴィッチが関所とかを通れば顔でわかるはずなんだ。元姫だしな。

なのにそれを突破する方法といったら……山越えか？

あのヴィッチが？　なんていうかつらいことは絶対にやらなそうなヴィッチがそんな泥臭いことまでして国に戻ってくるか？

密入国？　積み荷にまぎれてか？　これなら考えられなくもない。

「奴隷紋で炙り出しはできないか？」

「どのように妨害しているのか……できないのですよ。そして他にも問題が浮上しました」

「なんだ？」

「我が国の刑務所としていた管理区域が霊亀の進撃を受けて壊滅……一応は犯罪者のほとんどが死亡したとのことだったのですが」

「ですが？」

「生き残りがいた可能性が捨てきれません」

「へー……」

国の犯罪者が生存して逃亡中か。確かにちょっと嫌な話だな。

「私の勘ですが、どうも今回の騒ぎに交じっていると読んでおります。イワタニ様の件で大量に更迭した、三勇教の関係者が」

……おい。それって三勇教関係者が逃亡したってことじゃねえか。大問題だぞ。

あいつ等が国内に潜伏してんのかよ。事前に察知できただけ救いだな。

毎度毎度、いきなりの理不尽についていけないことが多い分、事前に話を聞けてよかった。

というか、ヴィッチと裏で関わっている可能性が高すぎるだろ。

国境を越えたのも三勇教が何かしたのかもしれない。

「もうあの女は問答無用で殺すか？」

「それはできれば……」

女王もそれを察知しているんだな。

「三勇教の残党との繋がりを吐かせる意味もあります」

「なるほど……生け捕りにできるように、できる限り情報の収集を頼む」
「承知しております」
「……犯罪者って奴隷紋とか刻まないのか？」
「一応は刻むのですが、所有権を持つ監視が、霊亀の犠牲になってしまいましてね」
ああ、なるほど。罰することのできる権利を持つ者が死んでしまっているのか。
相当厄介だな、おい。
「本来、あの子を生け捕りにする意味は別にあったのですけどね」
「というと？」
「具体的に言えば戦争を回避するための手段です。涙を飲んで捧げる生贄のようなものですよ」
生贄とまで言ったか。だから城に来ないのか？
いやいや……女王も鬼じゃないだろ。こんなに暴走しなきゃもっと穏便に済ませるはずだ。
そうでなければ俺の機嫌を取ったりなんてしないだろうしな。
「あの子が、心の底から嫌がることなのですよ。それこそのたうち回って拒否し、懇願し、わき目も振らず逃げるほどの。その罰が、勇者様との同行で免除されているのです」
「ほう……つまり奴は今その免除を自ら蹴ったのか」
馬鹿じゃないのか？　大人しく元康に寄生してろよ。
「内容は貴族女性なら、聞くだけで自害するほどのことで……言うなれば死んだ方がマシな罰ですね」
ふむ……なんか知りたいような知らない方がいいような気がする。
「あの子に一番効いた脅しがこれなんですよ。もはや脅しでは済ませませんが」
「まあいいや。じゃあ、生死不問だができれば生け捕りで、その方が賞金高めでいいだろ」
「しょうがありませんね。イワタニ様の命ずるままに、何か仕出かす前に、私も親としてせめてもの選択をしましょう」
女王は頷いてから配下の者へと命じた。
こうしてヴィッチの生死を問わない指名手配が始まった。
問題はあの錬と一緒にいることなんだよな。

下手に暴れて敵対する勢力の旗頭にされたりしないことを祈るしかないな。

十一話　ふんどし犬

女王との話を終えて村に帰ると……。
「兄ちゃんおかえりー」
と、ふんどしを着用した子犬にキールの声で出迎えられた時は、俺の目がおかしくなったかと思った。
外見はシベリアンハスキーの子犬っぽい。
ふわふわの毛並みで大きさは頭から足までで八〇センチくらいだろうか？
子犬と思えるのは成犬にしては顔とかいろんなパーツに幼さが感じられる所為だ。
で、二足歩行でふんどしを着用して誇らしげにしている。
「キ、キールくん？」
「お前……」
「へへ、すげーだろ？　サディナ姉ちゃんに教わったんだぜ」
自慢げに胸を張るキールなのだが……村の連中は微妙な顔をしている。
凄いというか、愛玩動物化しているぞ。
子犬というところで既に残念だ。
獣人になったんだろうが、どちらかというと犬と言った方が正しい外見だな。
サディナは若干誇らしげにしている。
ウザイ。激しくウザい。
「キールちゃんは資質があったから教えてみたのよー」
「資質ね……」
「キール君が可愛くなってますぅ」
最近地味なリーシアが修行の休憩時間なのか、やってきてキールを抱え上げて撫でまわす。

どうもリーシアは最近、ババアの所へマメに修行に行っているようだ。

俺達がコロシアムで戦っていた時も情報収集の合間に行っていたみたいだし、ババアも異世界での戦いの経験が資質開花を促進している、とか言っていた。

キョウ相手限定だった覚醒を使えるようになるのなら万々歳なんだがな。

「わ、放せよ、リーシア姉ちゃん！」

とは言ってもリーシアはキールを撫でるのをやめない。

気持ちはわかる。一言で言えば俺もワンコなキールを撫でてみたいと思った。

「で？　村にはこんな感じで獣化できる奴が他にもいるのか？　というか能力的にどうなんだ？」

「種族によるけど、基本的には能力アップするわよー、私みたいに」

「へー……」

「資質はごく稀にしか持っていないからこの村じゃほとんどいないわね」

「そうか、ラフタリアは？」

「ラフタリアちゃんは違うわねー」

ラフタリアが獣化か……ラフちゃん化かな？

他だと、なんか信楽焼を想像してしまうな。

俺がじっと見ているとラフタリアが不機嫌になる。

「何か失礼なことを考えていますね。私が獣人になったらラフちゃんみたいになるかもとか」

「そうなのか？　兄ちゃん」

キールが不思議そうに尋ねてくる。

俺はそっぽを向いて知らないフリをした。

「まあ、そんなに素敵なのですか？」

「はい。キール君が可愛いですぅ」

アトラがフォウルとやってきて首を傾げてリーシアの話を聞いている。

気配はわかっても、目が見えないアトラは姿を判別できないから当たり前か。

「可愛い言うな！　カッコいいだろ？」

「その見た目じゃ可愛いの方だな。ラフちゃんといい勝負だ」

と、俺がポツリと言うとキールがなんかガックリと頭を垂れる。

「ラフラフ」

ラフちゃんも騒ぎを聞きつけてやってきてキールの隣に立つ。

完全に村のマスコットズの完成だな。

フィーロ？　知らんな。

「そんな……せっかくカッコよくなったと思ったのに……」

「普段の方がまだマシだったな」

女顔だからやはり可愛いというカテゴリーに入ってしまうが。

そんな様子を見てサディナがケタケタと笑い、爆弾発言を投下した。

「ちなみにフォウルちゃんも資質を持ってるわよ」

「アルプスは多芸だな」

「なんですかアルプスって⁉　フォウル君のことですか⁉」

「ああ、奴の台詞から思いついて心の中で呼んでいたニックネームだ。定着させるべきだと思うか？」

「どうせ由来がとても酷いモノなんでしょうね」

ラフタリアがツッコミを入れる。

「まあな」

「なん、ですって……」

アトラが呻くように言う。

なんだ？　何がアトラの気に障ったんだ？

「ア、アトラ？」

「お兄様、尚文様からニックネームを授かっていて、それでいて可愛らしさまで会得する。尚文様の心を掴むおつもりなのですね。羨ましいです妬ましいです」

「ち、ちが！　俺はそんな真似はしない！」

……ダメだこりゃ。

コイツ等は無視して、とりあえず村の連中のＬｖを再確認するか。
お？　地味にみんなＬｖが上がってきてるな。
リーシアは……あれ？　69でずいぶん足踏みしている。
霊亀に挑んだ辺り……樹に育てられた時点で既に68だったわけで、その後、絆達の世界に行ったんだったな。
それからこの世界に戻って奴隷共の育成を手伝っていたんだが……あまりにも遅い。
絆の世界でも同様に遅かった。あと少しで70になるか？　という段階だった。
なんていうか、69まで不自然なほど素早く上がったが、そのツケを支払うかの如く70になるところで壁にぶつかっている。
これは開花の兆しか？　注意しておかないとな。
まあ、こんなところか？　とりあえず村の連中で戦闘にやる気を見せている奴等が大体Ｌｖ40になってきたようだ。
クラスアップの時期に差し掛かっている。そろそろみんなでクラスアップに行くのがいいだろうな。
「とりあえずお前等もクラスアップの時期になってきているみたいだな」
「おお！　クラスアップか!?」
俺の言葉にキールが元気を取り戻し、興奮したように言った。
「ああ、見た感じだとキールを筆頭にクラスアップをしなくちゃいけなくなってきた奴が何人かいるみたいだ。お前等、やりたいだろ？」
「やりたい！」
村にいる奴隷共がやる気を見せている。
「よし、じゃあクラスアップさせに行くぞ。フィーロ、わかってるな」
「うん！　だけど槍の人……」
「脅えなくてもいい。さすがに龍刻の砂時計にまでは来ないだろ」
ポータルで移動したわけだし、あの元康もまだ宿屋で俺達が出てくるのを待っていると思いたい。
そういや武器屋の親父に手先の器用な奴隷を預けるという話をしていたんだったな。
「ルーモ種の連中はいるかー？」

「なんですか？」
ルーモ種が集まってくる。コイツ等は手先が器用で、村での雑務を率先して行ってくれている。
イミアを先に保護していたお陰で村にはすぐに馴染んだ。
今じゃ村の端に穴を掘って住居にしようとしてくれているくらいだ。
「お前等Ｌｖは上がっているか？」
「はい。元々Ｌｖが多少ある者は既に30に達しています」
イミアの叔父が率先して説明する。イミアの方は真面目にアクセサリーや服といった生活用品を作ってくれているので自由にさせている。
「そうか、じゃあお前等の中で鍛冶を覚えたい奴は一緒に来てくれ。知り合いに預けて覚えてもらう」
「鍛冶ですか？　それなら自分が」
イミアの叔父が手を上げる。
なんだ？　お前ができるのか？
「村では鍛冶をしていたので、お役に立てると思います」
「そうか、じゃあついてきてくれ」
「わかりました」
「そのうち、炭鉱で働く奴も募ると思う。そっちは誰かいないか？」
「それなら皆、得意としております」
便利な連中だな。こうして少しずつできることを増やしていって環境を整えていくのが俺の仕事だな。絆達のように。
「わかった。他の奴等は真面目に仕事とＬｖ上げに取り組めよ」
「「はーい！」」
元気な連中だな。
「じゃあラフタリア、帰路の写本を使ってくれ」
「ああ、ナオフミ様はクールタイム中ですものね」
「そうだ。龍刻の砂時計ならラフタリアの方が早い」

「じゃあみんなが集まったら出発ですね」
そんなこんなで俺達は時間を待って、ポータルで移動したのだった。

十二話　決断

龍刻の砂時計へとラフタリアのスキルで飛んだ。
「うわ！　盾の勇者様!?」
いきなり現れた俺達に警備の兵士は驚きの声を上げた。
城の方の兵士は俺がボンボン行くから、慣れているみたいだけどさ。
「今日は仲間のクラスアップに来た」
「りょ、了解しました」
ラフタリアやフィーロの時と同じように儀式を始める。
「フィーロ」
「なーに？」
「場合によってはこの建物から出ていくんだぞ」
「えー……」
「お前やラフタリアみたいなことが起こってもいいのか？」
能力が総合的に上がるから結果的にはいいんだが、本人達にとって良くない場合もある。だからそのことを考慮して、クラスアップの時はそれに干渉するフィーロの居場所を考えないといけない。
「うー……わかった。槍の人、外にいないよね？」
よし、フィーロの承諾は取ったぞ。
「いたら呼べ」
「でも、ごしゅじんさま守ってくれないよ？」
う……あの状況でどうやって助けろというんだよ。

「フィーロ、私がどうにかしますからお願いします」
ラフタリアがフィーロを諭す。するとフィーロは渋々といった様子で頷いた。
「わかったー」
面倒なトラウマをフィーロに押しつけやがって、元康の奴め……。
さて、クラスアップの時間か。
「お前等、ちょっと待て」
「何だ。盾の兄ちゃん？」
「一応、お前等に尋ねる。ここでクラスアップという儀式をするというのはわかっているよな？」
「前々から聞いてた！」
奴隷達がそれぞれの顔を合わせて頷く。
「でだ。俺は自分の未来は自分で決めさせる方針だ。もちろん、皆で取り組んでいる波に備えた復興とは別の話だ」
「兄ちゃん、どういう意味だ？」
「これまで俺は波に参加したいという奴を優先的にＬｖを上げさせてきた。だがな、同時に波を乗りきった時のことを考えろと言っているんだ」
「……」
ラフタリアが黙って俺を見つめる。
そうだ。ラフタリアのことを考えて俺は村の復興を考えた。
だが、それ以上に、こいつ等の未来はこいつ等自身で決めさせないといけない。
「ここから先、自分の可能性を広げると同時に狭めるかもしれないクラスアップが控えている。それはみんな理解しているだろ？」
奴隷達は頷く。
俺はそれを確認した後、再度問う。
「お前等にとって不測の事態が起こる可能性がある。自分で選べずに、最も能力の伸びが良いクラスアップ先が勝手に選ばれてしまうかもしれない」
「そんなことが起こるのか？」

その質問に俺は大きく頷いた。
「ラフタリアとフィーロがその被害者だ」
二人がそれぞれ軽く手を挙げる。
「フィーロのこのアホ毛……冠羽は特殊でな。勝手にクラスアップする先を選んでしまう。だけどその時に選ばれたクラスは能力の上昇が高い」
「そうなのか!?」
「ああ、だが、お前等のこの先の人生は何も戦闘能力だけが全てじゃない。何かやりたいことがあるのなら自分で選んでそれに特化することにも意味が絶対にあるはずだ」
流されたまま強くなってほしくない。
だからこそ、そんなイレギュラーが起こっても大丈夫だと覚悟してほしいのだ。
「一応、ラフタリアもフィーロも何をさせてもそつがないほどに技能はあると思う。けど、絶対ではないと俺は考えている」
完璧超人にクラスアップしたわけではない。いや、この世の中に完璧なんてあるはずないんだ。
だからこそ。
「後悔をしないように選べ」
奴隷達がそれぞれ囁き合う。
「わかったよ、兄ちゃん。俺は……少しでも強くなりたい。その可能性があるのなら選択肢はいらない」
キールが率先して頷く。キールは奴隷共の躾をするようになっている。
霊亀の使い魔相手に重傷を負ったことが良い経験となったみたいだな。
戦闘時に調子に乗ることはないそうだ。
獣化するようになっているから、どういった変化が起こるか見物だな。
で、そのキールの隣に立っていた男の子の奴隷が前に出る。
「俺は……自分の未来は自分で選びたい」
「わかった。じゃあ二手に分かれてくれ、選びたい者と選ばない者」
俺の命令に従って奴隷達は分かれた。

「じゃあフィーロ、選ばなくてもいい奴が先に受けるから、選ぶのを選択した者の時は下がってくれ」
「わかったー」
「俺だな！」
キールが手を上げて砂時計に触れる。興奮してるのか尻尾が揺れてる。
魔法陣が展開され、俺の視界にアイコンが浮かび上がる。
「わ!?」
フィーロのアホ毛が抜けて俺の視界を通じてキールのクラスアップに干渉した。
もうもうと煙が立ち込める。
……ラフタリアの時と同じようにステータスが跳ね上がっている。
ただ……ラフタリアの時と比べると若干倍率が低い気がした。
まあ、ラフタリアは暇さえあれば腕立てとかで体を鍛えていたし、その差だろ。
「すげぇ……なんか、何でもできそうなくらい力が漲るような気がする」
で、選ばなくていいから強くなりたい奴等をクラスアップさせていく。
それが終わった後。
「さて、じゃあフィーロは外で待っててくれ」
「うん、わかったー」
自分の未来を自分で選んだ奴の番になり、フィーロには建物から出ていってもらった。
これで多分、クラスアップに干渉はないだろう。
俺の読み通り、クラスアップは普通に終わった。
「兄ちゃん兄ちゃん！　強くなった俺を見てくれよ！　狩りに行って評価してくれよー！」
「そうだな……どれくらい強くなったのかを直に見る必要はあるだろうな」
実際、組み手はラフタリアやフィーロ、リーシアやエクレールがババアの指導のもとに対応しているが、俺が直接見ないとわからないこともあるだろう。
「じゃあ城で馬車を借りて、フィーロに魔物のいそうな場所へ行ってもらうか」
「えー……フィーロ怖い……」

元康を警戒して出かけることすら嫌がっているのか……重症だな。

「気にするな。また出てきても蹴り飛ばせばいいだろ」

なんか色々とネジが外れてしまっているだろうが、脅威というほどじゃない。

「別に槍の勇者は悪人というわけじゃないんですけど……そもそも遭遇と同時に蹴り飛ばしていたフィーロが悪いと思うんですが……」

「狸、豚と罵られたにもかかわらず擁護するとは……ラフタリアも良い子に育ったな」

若干ホロリとしてしまうのは俺も心が広くなったからなのだろうか？

いや、どちらかと言えば、俺が捻くれているからラフタリアの反応に善性を感じているんだろう。

ラフタリアがまっすぐに育ってくれて嬉しいぞ。

「なんで今まで見たことがないような表情で感動しているんですか……」

「ぶー……」

なんかフィーロは不満そうに頬を膨らませているな。

「とりあえずフィーロ、元康と遭遇したら今まで通りに蹴り飛ばせばいいんだよ。アイツも喜ぶだろ」

「わかったー」

「なんか兄ちゃん達が凄いことを言ってるような気がすっぞ？」

「その認識で間違いないですよ。もしも遭遇したらキールくんも止める手伝いをしてくださいね」

「お、おう。なんか知らないけど、俺はやるぜ！」

何やらラフタリアが俺の方針に何か言いたそうだ。

「わからなくもないですが……蹴るのはどうなんでしょう……」

「ふん。フィーロに蹴るのをやめさせたら面倒事が増えるのがわからないのか？　せっかくの魔物退治もできなくなることを覚悟しろよ」

俺の言葉にラフタリアも諦めたな。

「さて、フィーロ。いつも通りに馬車で走っていけばいい。今度新しい馬車を発注してやるからやる気を出せ」

「ホント!?」

フィーロの目が輝いた。

まあ、あんまり使っていない馬車だけどな。

そもそも前よりも良い馬車を買ってやるとは言っていない。

「ああ、本当だとも」

「じゃあフィーロがんばるー。で、槍の人が出たら蹴る！」

フィーロが元気よく馬車を取りに城へと駆けていった。

「あの……」

イミアの叔父が申し訳なさそうに手を上げる。

「心配するな。寄り道を考えてる」

「わ、わかりました」

それからほどなくしてフィーロは馬車を引いてやってきて、俺達は乗り込んだ。

「フィーロ、出発の前に武器屋に寄ってくれ」

「わかったー」

俺達はフィーロが引く馬車に乗って武器屋の前まで行く。

素早く降りて俺は武器屋の親父の所へ顔を出した。

「お、アンちゃん」

武器屋に入ると相変わらず親父がカウンターに立っていた。

なんか安定の落ちつき感がある。俺も親父のことを信用しているんだなぁ。

「どうだ？　鎧や盾の開発は進んでいるか？」

「さっぱりだ。霊亀から見つかった鉱石ってのも癖が強くてな」

「ふむ……」

「開発の難易度が高くて今じゃその界隈でも研究に躍起になってる。見てくれよ」

ふむ……加工が難しいのか……？

「色々と加護やオプションを付けやすいし、型に合わせて削るだけで元が固いから武器になる」

ゼルトブルで見たな、くそ高かったし無骨な感じだった覚えがある。

槍や剣とかだと、べっ甲みたいな刀身だったな。あれは削って形を取っているのか。

「だが、それを武器と呼ぶのもどうかと俺は思うのよ。腕前の良し悪しが関係ない。最悪、無骨なハンマーまで出回る始末だ」

「こだわりか」

「まあ、そこは作り手の腕前が関わるから俺が思うだけでいいんだけどな。これが防具となるとそうも言ってられないんだ」

「そうなのか？」

「おうよ。どうもこの素材、エアウェイク加工と相性が悪いみたいでな。効果がないんだ」

エアウェイク加工。確か重い防具とかを軽くさせるものだったはず。

ここで俺は盾にあった専用効果、グラビティフィールドを思い出した。

重力場というこの専用効果。霊亀シリーズの盾には高確率でついているこれは、どうやら重力を操る効果がある。

もしも霊亀の素材にその効果が僅かにあるのだとしたら、そりゃあエアウェイク加工と相性が悪くなるのも頷ける。盾だと便利だが、悪い方向に働いているのだろう。

「素材も根本的に重くてな」

霊亀の甲羅自体が攻撃を跳ね返さなくてはいけない……だけど重い。

「薄くするという発想もあるんだけどなぁ……それだと肝心の防御力がな」

「なるほどな」

難しい素材なんだな。まだ完成していないだろうと思ったのだが……。

「できあがった試作品が二つある。見てくれ」

親父に店の奥へ案内されて、試作品を見た。

一つは普通に霊亀の甲羅で作られた盾。問題はかなり大きいし分厚いこと。

「これか？」

「ああ」

「持ってもいいか？」

「おうよ」

試しに持ってみようと思ったが、重い。

持ち上がりはするが、これで戦うのは厳しい。

振り回せない。下ろすだけでずしんと音がした。

で、重要な問題なんだが。

ウェポンコピーが作動しなかった。

つまりこれは盾という扱いではないということだ。基準がわかりづらいが、壁……と見てもいいかも。

ただ、僅かにバチッと手ごたえがあるから微妙なラインなんだと思う。

「どうだ？」

「盾じゃないみたいだな」

「ああ、ぶっちゃけ失敗だ」

「他のは？」

「これだ」

と渡されたのはべっ甲で作られた凄く薄い半透明な盾だ。見た目は凄く綺麗だ。

一応持ってみる。持てなくはない程度の重さだ。振り回すには良さそう。

だけど……あれ？　こっちは盾っぽいのに反応しない。

「あーやっぱりアンちゃんでも疑問に思うか」

「どういうことだ？」

「その盾はな、なるべく軽さを追求したんだ。その代価として防御力がない。一発で砕ける」

使い捨てか。というかこれはもはや……。

「皿じゃないか？」

「そう言われると、返す言葉がねえな。最初作った時、同じ物を土産物屋が出したのを見て泣きたくなったぜ」

「見た目よりも重いよな」

「そうなんだよなぁ。素材に癖が強くてなぁ……」

「極端すぎるだろ、中間はないのか？」

「そうなんだけどな。どうも癖が強くて中途半端なものになっちまうんだ」

……扱いづらいな。オストの置き土産なんだ、どうにか有効活用したい。
盾の加護とかで素材に干渉は……できそうもないよな。
何か助言ができないものかな？
「そういやゼルトブルで――」
俺はゼルトブルで見た霊亀剣という剣の話を親父にした。とにかく、一目見るだけで名工が作った一振りだとわかるとも付け加えて。
「アンちゃんが言うんだから相当な代物だな……見れば誰が作ったか、作り方がわかりそうなものだが……」
「買ってこいってか？　勘弁しろ、あんな高そうな武器は手が届かん」
親父に作ってもらった武器を売れば多少は金になるだろうが、それでは本末転倒だろう。
……そういえば、魔物のドロップのユニーク武器とかレア武器とかを売る方法もあるんだよな。
珍しいから高値になるだろうし。
考えておこう。
「そうそう、親父の弟子にしてもらおうと思っている奴隷を連れてきた」
「誰だ？」
俺が連れている奴隷共の中でイミアの叔父を指差す。
「久しぶり……だな、お前も師匠の所をちゃんと卒業して武器屋を開いてるのか」
「おお！　トーリィネミアじゃねえか」
何か微妙に長い名前だな。
「知り合いか？」
「ええ」
「昔な」
何でもイミアの叔父と武器屋の親父は若かりし頃に同じ名工の所で弟子をしていたそうだ。
「とはいっても……自分は中途半端なところで色々な理由で辞める羽目になりました。実家の方も大変だったし、イミアとか甥(おい)や姪(めい)の子育ての手伝いもありまして」
「あの時は経営が傾いちまってなぁ」

「名工だったのにか？」
些(いささ)かおかしな話だな。
「大きな商談と女がらみでな。俺の師匠って色恋に現(うつつ)を抜かす奴でな」
元康みたいな師匠だったみたいだ。脳内で、親父の師匠が元康になる。
ま、俺の知る元康は既にフィーロ馬鹿になってしまったが。
このイミアの叔父ってどういう人生を歩んでいるんだ？
イミアも奴隷になっているし、経緯がわからないんだよな。
聞けばきっと教えてはくれるだろうけど、つらい記憶を本人達から強引に聞くことはさすがの俺もやるつもりはない。
「じゃあ知った仲なんだな。それなら話は早いな」
「まあ、そうだけど……まさか鍛冶の奉公先がお前だったとはな」
「俺も驚きだぜ。アンちゃんの頼みで弟子を取ることになったけど、まあ相手としては楽だからいいんじゃないか」
「懐かしいな。昔を思い出す」
「親父、宿泊費込みで、どれだけの金を払えばいい？」
「住み込みなんだろ？　コキ使っていいならいらねえよ」
「気前が良くて助かる」
「おい……死ぬまで重労働とかはやめてくれよ」
「アンちゃんの所で奴隷やっているお前がなに言ってんだ。お前がいれば鉱山での採取にも安く行かせられる」
若干補正があるから、普通の亜人や獣人よりは頑丈になっているだろうなぁ。
親父も教える時はスパルタなのか？
というかよくよく考えてみるとイミアの叔父ってキセルとか葉巻が似合いそうなのに吸ってないんだよな。オーバーオールを着てて田舎くさい。
「昔やったのと同じ程度の仕事をさせるくらいだ」
「死ぬぞ、それ」
「ハッハッハ、案外大丈夫なもんだ」

などと親父はイミアの叔父と雑談をしながら仕事を始めていた。
これなら大丈夫そうだな。
「じゃあ俺達は用事があるから」
「ああ、店の仕事を徹底的に叩き込むぜ」
「親父が俺の領地に来るか、こいつに技術を叩き込んで一人前にするかのどっちかにしてほしいが？」
店番をさせる程度の腕前か、それとも親父に匹敵する腕前か、それによっては村の方で武器防具を作ってもらうことになる。
「あんまり考えてねえな。とりあえず、どれだけの腕前かを見なきゃな」
「金物業を多少続けていた程度だ」
「謙虚な態度なことで、お前の金づちを振るう腕前がどの程度か見させてもらう」
「楽しみにしてろ」
俺相手の時みたいな敬語じゃない。
なんか昔からの友人が再会したような空気がある。悪くはないな。
イミアの叔父……トーリィネミアだからトーリと呼ぶか。
「じゃあ、何かあったらまた顔を出す。俺に用事があったら村の方か、城に連絡してくれればいい」
「わかったぜアンちゃん」
「親をなくしたイミアがあんな楽しそうにしているんです。自分も盾の勇者様に力を貸したいと思ってがんばって仕事を覚えます」
「がんばれよ」
二人でがんばって難しい霊亀の素材を上手く使えるようになってくれ。
こうして俺達は武器屋を後にした。

十三話　襲撃の数々

で、出発したのはいいんだが。
やっぱり……奴は現れた。
「やああああああああああああああ！」
「フィーロたあああああああ――……」
本日三回目の元康が宙に舞う光景を溜息交じりに見送る。
転移スキルで先回りしているんだろうけどよくやる。
ラフタリアを含めて奴隷共が最初、揃って悲鳴を上げた。
まあ、人が蹴り飛ばされる瞬間なんて目にしたら悲鳴の一つも上げるか。
「あの槍を持った兄ちゃん、蹴られながら笑ってた……こえー……」
「夢に見そう……」
「怖い……怖い……」
奴隷共のトラウマになってどうしようというのだ、元康は。
蹴るように命じた俺の所為かもしれない。
「あの方は一体どこへ向かっているんでしょう」
「さあな」
壊れた元康を保護するにはどうしたらいいのかと考えるんだが、ここまで高頻度に遭遇できるのならどこかで説得くらいできそうだ。
なんて思いながら人里から離れた山奥へと馬車を走らせていると……行く手に人が立っているのに気付く。
「元康か？」
「違うよー？」
お？　フィーロは目が良いな。
かなり離れた場所だというのにわかるようだ。
「とりあえずはね飛ばさずに移動しろ」
「わかったー」
フィーロはいつも通りの速度で走り出す。

で、すれ違うつもりだったのだが、前方にいた奴は両腕を広げて俺達の進路を妨害した。
「なんだ？　止まってほしいのか？」
緊急で何かあるのかもしれない。
フィーロは俺の意図を察して相手の前で足を止める。
「なんだ？」
行商時には時々、こうして馬車を止める奴がいた。
大体が怪我人や魔物に遭遇して助けを求めるような奴等だったな。
見た感じだと男……年齢は幾つだろうか？　小柄だな。
年齢は……小柄な割に老けていて二十代か？　ちょっと判断が難しい。髪は茶髪。
顔付きはエロい話とか好きそうな若干小悪党気味の憎めない三枚目みたいな感じだ。
人間だけど、ネズミみたいな奴と表現するのがよさそう。
マントで体を包んでいて、服装は判断できない。
見た感じだと、マントの辺りに赤い液体がこびり付いている。
怪我でもしてるのか？
「イヒヒ……ちょっと止まれ」
「既に止まってんぞ」
無駄に偉そうな奴だな。
走っている馬車の前に立って止めようとするとか結構危ないんだぞ？
「ちと聞くが、その馬車は盾の勇者が乗っている馬車でいいんだよな？」
目印の看板は一応女王が気を利かせて付けてくれている。
俺が乗っているという合図みたいなモノなんだよな。
「……ああ、俺が盾の勇者である岩谷尚文だが……どうした？」
大方、このパターンだと助けてくれとか言ってくるのだろう。
だが、俺の予想とは大きく異なる対応を……目の前の敵はしてきた。
「そうか！　イヒヒヒ、じゃあ……死ね！」

バサアッとマントを開いて男は小さな魔法の弾を投擲する。
なんだ？　死ねとか三勇教徒か？
「流星盾」
俺を中心に防御結界を生成して攻撃に備える。
油断があるわけじゃない。だが、この世界の連中で俺に怪我を負わせられる奴は限りなく少ない。
呪いは防御力に干渉しなかったからな。唯一の救いと思えばいいだろう。
それよりも俺を襲撃してくるとは笑止千万だな。
とは思いつつ、思考の片隅にマーダーピエロが浮かんでくる。
奴のような前例がないとは言えない。念のため、俺はフィーロの背に乗って盾を構えた。
まさかそれが当たりだとは思わなかったがな。
魔法の弾が流星盾に届く直前、大きく膨れ上がりバキンと音を立てて破裂する。
「なに!?」
「わ！」
爆発が俺の盾を中心に起こり、後方の馬車の屋根が消し飛んだ。
ちょっと待てよ。どんだけ攻撃力が高いんだ！
「隙あり！」
男はシャムシールのような剣を俺とフィーロに向けて振りかぶってきた。
「ツヴァイト・オーラ！」
咄嗟に魔法を唱えてフィーロの能力を上昇させる。
「いくよー！」
俺を乗せたフィーロは宙返りをして、男を蹴り飛ばさんとする。
が、男は剣を盾にして蹴りを受け止める。
「いきなり何なんですか！」
ラフタリアが刀を抜いて男に斬りかかった。
「おー、美女幼女を引き連れてると聞いていたが、やっぱり聖武器の勇者は、イヒヒ……ハーレム指向のようだ

な」

すっげー癇に障る感じでイヒヒヒとうるさい奴だな。

余裕を見せながら男はあいている方の腕でもう一本剣を抜いてラフタリアの刀を受け止める。

嘘だろ？　いくら能力が低下しているとはいってもラフタリアの攻撃力は相当あるんだぞ？

並の剣なら切り飛ばすことくらいできるはずだ。

「――!?」

ラフタリアは何か掴んだのか、スキルを放つ構えを取った。

「剛刀・霞十字！」

ラフタリアの必殺の、二本の刀で十字の切り口を作るスキルだ。

これを受け止められたら相当だぞ。

「おっと！」

フィーロの蹴りとラフタリアの必殺スキルを同時には受けられないとばかりに男は一歩下がる。

させるか！

「エアストシールド！」

後方に下がろうとするのを俺は盾を出して止める。

「うお！　守護・土壁！」

斬りつけようとするラフタリアの目の前に地面から壁が生える。

刀を振りかぶっていたラフタリアは壁諸共、敵を斬りつけるのだが、その間に屈まれて避けられる。

そんな避けかたがあるのか！　闇雲に盾を出しても意味はないし、瞬間的な対応とはいえ戦い慣れている印象を覚える。

「魔弾・隕石招来！」

男が素早く手で印を結んで魔法らしきものを唱える。

かなり速かったぞ!?

まあ、無詠唱を自慢していたクズ二号みたいな奴もいるからそこまで驚くほどじゃないがな。

「兄ちゃん！」

キール達が唖然としていた状況からやっと立ち直って声を掛けてくるが、俺達はそれどころじゃなかった。

俺達の上空に巨大な隕石が出現して、今にも降り注がんとしていたのだ。

あまりにも速い！　なんだこの魔法は!?

見覚えのない魔法。推測ではあるがマーダーピエロと同じく異世界の奴だろうな。

だが、今はそんな思考をしている暇はない。後方にはキール達、奴隷共がいるんだ。

そんな状況で範囲魔法なんて放たれたら。

「フィーロ！　ラフタリアは足止めをしろ！」

「うん！」

「わかりました！」

「セカンドシールド！　ドリットシールド！　シールドプリズン！　更にツヴァイト・オーラ！」

セカンドシールドを足場にして空中に立ち、ドリットシールドを上空に展開。

更にEフロートシールドで上を守りつつ、盾を構える。

ラフタリアに向けてツヴァイト・オーラを詠唱して僅かな時間を稼ごうとしたのだが。

「解除弾・土遁！」

ラフタリアが男の魔法を受け止める。

が……。

「ち、力が!?」

目に見えてラフタリアの速度が落ちる。

「イヒヒヒ、援護魔法を解除されるのは初めて？　対人も経験してないのか」

余裕を見せられているような気がする。

くそ……可能性として懸念していた問題がここにきて噴出したぞ。

「あれ……？」

ラフタリアが首を傾げる。

そんなことよりも降り注ぐ隕石にどう対応するか……だ！

隕石が上空にあったドリットシールドとシールドプリズンにガツンと命中して破壊され、Eフロートシールドが

限界を迎えて砕ける。
　そして俺に向かって降り注いだ。
「ぐ……」
　重たい衝撃が盾を通じて伝わってくる。
　だが、辛うじて耐えられそうだ。
「兄ちゃん達に何すんだ！」
　キール達が各々武器を取り出して男に向かって走り出そうとしている。
「待て！　お前等は下がれ！」
　と言ったのだがキール達は止まらない。
「遅いな。もっと歯ごたえがあるかと思ったんだがな。イヒヒヒヒ」
「キールくん！」
　ラフタリアが呼びかけるのとほぼ同時に、弱いと判断したのか男がキールに向けてシャムシールを振りかぶる。
　どうにかして間にラフタリアが入ろうとするが、間に合うかギリギリのラインだ。
　気の所為か、先ほどよりもラフタリアの動きが遅い……けど間に合いそうにない。
　やばいぞ！　能力アップしているはずのキール達ですらも追いつけないとは……完全に足手まといになっている。
　俺の視界がスローになり、男がキールの胸をシャムシールで貫こうとしたその時！
　ガキンとキールを守るように大きなハサミが間に入る。
「あ!?」
　俺も我が目を疑う。
　そこにはマーダーピエロがハサミを持って立ちはだかっていたのだ。
「スパイダーウェブ！」
「チ！」
　マーダーピエロは糸を男のシャムシールに絡ませて動きを封じようとしたのだが、男は糸を切って後方に飛んだ。
「大丈——？」
　マーダーピエロは相変わらずノイズ混じりの台詞でキールに声を掛ける。

「う、うん！」
　そしてマーダーピエロがキールを守るようにその前に立ったと同時に上空にあった隕石が爆散した。
　うぐ……耐えきれなくはなかったが、かなり痛かったぞ。
　鎧が所々破損している。
　セカンドシールドから飛び降り、スタッと着地した俺は男に向けて盾を構える。
「……誰かと思えば滅びた世界の眷属器持ち様じゃないか。まだ生きていたのか。イヒヒヒ」
　知り合いなのか、マーダーピエロは敵意を見せて男を睨む。
　滅びた世界？
「しっかし、どうやらこの世界の四聖は強くねえな。こりゃあ余裕で楽しい。イヒヒ」
　なんだコイツ？　台詞からこの世界とは異なる世界の住人なのは読み取れる。
　しかし……キョウのような傲慢さとも、クズ二号のような身勝手さとも、ラルク達のような使命感とも違う印象を覚えるな。
「お前は眷属器の所持者なのか？」
「あ？　俺も欲しいが選ばれてない。イヒヒ」
「コイツ——他世界の——選ばれた勇者の仲間——」
　マーダーピエロが説明をする。
　つまりキールやフィーロと同じポジションの敵？　テリスとかと同じような？
　よくよく観察すると胸の辺りに付けている、変なペンダントが気になる。
　言語翻訳をするアクセサリーとかかもしれない。
「期待はずれもいいところだな。もっと楽しませてくれよ。イヒヒ」
「私達が弱い……ですか」
　ラフタリアが刀を向けて答える。
「正直、思ったよりも弱いな。これなら楽勝だわ」
「それはどうでしょうね！」
　ラフタリアが……ものすごい速度で敵の懐に入り込んで刀を振りかぶる。

「おっと!?　なんだ？　いきなり速くなりやがった！」
敵も驚きで目を大きく見開いた。
俺も驚きだ。なんでラフタリアがここまで素早く？
「ナオフミ様の援護魔法を解除する魔法を使った時、あなたはミスをしたんですよ」
ミス？　奴の攻撃にそんなものは感じなかったが……。
いや、援護魔法を解除したということは、プラスに傾いている上昇効果を消したということだ。
つまりマイナスに傾いている効果も同様に消える可能性が高い。
「私に掛かっていた呪いまで解除したのでしょうね」
「チッ！」
ラフタリアが追撃を繰り返し、敵は防戦一方になる。
「イヒ！　やるねぇ！　じゃあこっちの番だ！」
魔法を唱えようと手を前に構える敵にラフタリアは刀で斬りかかった。
ほぼ無詠唱で魔法が飛んでいくがラフタリアには当たらない。
時に斬りつけ、時にかわし、相手を追い詰める。
単純な強さはそこまでないか……だが、眷属器を持っていないのが気になるところだな。
「く……こりゃあ一度撤退した方がよさそうだ。イヒヒ」
「逃がすと思うか？」
「ええ、逃がしませんよ」
ラフタリアはそう言いながら追撃を行う。
マーダーピエロも好機とばかりに狙いを定めている。
「逃げられるさ。対策くらいしておけよ」
男がペンダントに触れてから手に魔法の弾を生成して地面にぶつける。
カッと閃光が辺りを支配して、一瞬俺達の目が眩む。
勇者じゃないのにこの能力……強化されたテリスみたいな奴だと思えばいいのかもしれない。
くそ、このパターンは逃げられたと思って――。

「――ガハ！」
……？
何度も瞬きして男のいた場所を見るとマーダーピエロがハサミを男の胸に突き立てていた。
「やると思って――。だから」
「イ、イヒ。やるじゃねえか！　次は、こうはいかねえぞ！」
ズルンとマーダーピエロがハサミを引き抜くと鮮血が飛び散り、男が倒れる。
殺した……のか？
チャキッと音を立ててマーダーピエロは俺の方を振り返り道を譲る。
よく調べろとばかりに。
俺はマーダーピエロが殺した男を確認する。
推測だがこの世界とは異なる世界の人間、死体を調べれば何か見つかるかもしれない。
そう思ったところで、男の体から淡い光が漏れ出しているのに気付く。
なんだ？　まさか何かあるのか？
そう思ったのだが、まるで蜃気楼のように男の死体は消え去った。
「なんなんだ？　一体……」
「奴等は――」
マーダーピエロは説明をしようとしてくれてはいるのだが、音飛びが激しくて何を言っているのか聞き取れない。
やがてマーダーピエロも説明を諦めたのか端的に聞いてきた。
「大丈夫――？」
「ああ、だが……できすぎたタイミングでお前は出てきたな？　奴とグルなんじゃないのか？」
「そんな、ナオフミ様……いくらなんでも疑いすぎでは？」
「そうだぜ、兄ちゃん」
ラフタリアとキールが俺に抗議する。
二人の言い分は理解できるし、個人的には信用したいと思っている。
だが、あまりにもタイミングが良すぎるだろ。

俺の信用を得るために打ち合わせしていたという可能性が捨てきれない。
自分でも捻くれているとは思うが、今の俺には守るものが多すぎる。
安易に他人を信じるわけにはいかないんだ。
「違う――」
マーダーピエロは俺の鎧の肩に手を触れて何かを引っこ抜いた。
待ち針か？
「これを付けて見張ってた――これさえ――ればいつでも駆けつけられる」
「ポータルスキルみたいなものか？」
俺の場合は登録した場所だが、マーダーピエロのスキルの場合は針を付けたものの所へと移動するということか。
「というか、いつの間に……」
「コロシアム――」
「ああ、あの時の戦いの最中に付けていたのか！　って、お前は俺を監視していたのか！」
あ、マーダーピエロが視線を逸らして冷や汗を流している。
「聖武器の――を殺されるのは見たくない。できれば協力――」
どうもマーダーピエロは俺に対して協力を申し出たいのかもしれないが……。
「呪いで能力低下――だったのね」
「はい……あ、もう治ってしまいました」
ラフタリアは刀を鞘に収めて答える。
「敵が援護魔法を解除する魔法を唱えたお陰で、呪いの能力低下まで解除されたのは運が良かったな」
とはいえ、次はないだろう。
一人いれば他にいないとも限らない。
四聖の命を狙う連中がいるということは、呪いでいつまでも能力低下なんてしていられないぞ。それに錬や元康、樹を早く見つけないとあいつ等だと殺されかねない。
……あいつ等が俺の教えた強化方法を実践してくれたら、心配もある程度解消するんだがな。
「ナオフミ様、マーダーピエロさんがキールくん達を助けてくれたのは事実なんですし、せめて一緒に行動すると

いうのはどうでしょうか？」
「うーむ……」
マーダーピエロが俺達を監視していたという点がちょっと気になるが、何か罠を仕掛けてくるにしても目の届く所に置いておくのは悪い話じゃない……。
「兄ちゃん。この姉ちゃん強いのか？」
「言葉は音飛びが酷いがな。強い方だろうな」
というか敵の台詞が気になるな。
滅びた世界の眷属器？
「あの敵が言っていた滅びた世界の眷属器というのは……」
マーダーピエロが俯く。
そしてハサミに目を向けた。
「私の世界の――は殺されて、世界は――」
ポツリと呟くその表情には後悔が滲んでいるように見える。
絆達の世界にある伝承が思い出される。
グラス達は他世界の四聖を殺そうとしていた。自分達の世界を守るために。
つまり、マーダーピエロはその戦いによって敗れた世界の生き残りということ……なのだろう。
音飛び等も、もしかしたら世界が滅びた所為で眷属器が機能不全に陥りかけているのかもしれない。
他世界に乗り込んでいる間に世界が滅び、死ぬわけにもいかず、波でいろんな世界を渡り歩いている。
そう思えば何も不思議じゃない。
村に来た時も次の波が起こるまで、いさせてくれと言っていた。
「はぁ……わかった。だが、信じたわけじゃないぞ？　監視するからな」
「うん……」
「とはいえ、助かった。感謝する」
「……ん」
頷くマーダーピエロから視線を外し、キール達を見る。

「さて、とりあえずキール達のクラスアップ後の強さを確認したかったんだが、それどころじゃなさそうだな」
「すっげー残念だけど、わかったぜ兄ちゃん」
「とりあえずマーダーピエロ。お前の名前は何なんだ？」
リングネームが本名とは考えづらい。
一応、呼びやすいように名前くらいは聞いておいた方がいいだろう。
「セイン＝ロック」
む、ヴィッチの冒険者名と一文字違いか。ますます信用が置けないな。
ちなみにヴィッチの元冒険者名はマイン＝スフィアだ。今はアバズレだがな。
「とりあえずは、よろしく頼む」
「よろしく……」
そんな奴が村に居つくことになったのだった。

十四話　正式依頼

村に到着した後、セインは村の端っこで何やら裁縫を始めた。
裁縫道具の眷属器と思えばいいのかもしれないな。
パッと見、ぬいぐるみを作っているようだ。
何をするのやら……。
なんて思いながら元康や錬、樹の捜索に重点を置かねばならない時が近づいているのを俺は自覚していた。
あんな敵相手に三勇者共が勝てるとは思えない。
だが、あのフィーロを襲撃する元康さえ、見つからなくなって一週間が過ぎようとしていた。
あれから、異世界からの新たな襲撃を警戒している。
まあ、セインも村で常時警戒しているようだがな。
こう……いつ現れるかわからないというのが不気味で嫌な感覚だな。

それとは別に……俺の領地内で盗賊が活発に活動しているという問題が浮上した。
この一週間、俺だって何もしていなかったわけじゃないぞ？
キール達の底上げに始まり、行商で金銭を稼いでもいる。
警戒ばかりしていられないからな。
「ん？」
それ等の問題をどう対処しようか考えながら歩いていると、見慣れた奴等がいた。
オドオドした幸薄そうな女と簡素な鎧を纏った強気な女。
要するにリーシアとエクレールだ。
「ただいま帰りました」
「イワタニ殿」
最近、修行に本腰を入れるとかでババアと一緒に出かけていたんだったな。
「おお、お前等、修行が終わったのか？」
「まだですけど、ナオフミさんの手伝いをしてこいと言われました」
「私もそうだ」
手伝いをしてこいとはどういうことなのだろうか？
「……修行の成果はあったか？」
「リーシアと共に実戦を経験してこいという話だ。まだ修行は続くだろうな」
実戦を経験してこいか……なるほど、ババアも面倒な指示を出してくるな。
というか問題はエクレールだろ。
お前は自分の仕事を何だと思っている。
一応、領主代理なのに暇さえあればババアの所で修行している、とかメルティが愚痴っていたくらいだ。
俺やメルティに何もかも丸投げか？
「まあ、私は表の変幻無双流を学んだだけなんだがな」
「私は全部叩きこまれている最中です……」
「表？」

「誰でも習得できるのが表で、特別な資質が必要なのが裏だそうだ」
「へー……」
俺はエクレールを凝視する。
「なんだ？ イワタニ殿」
「本当に大丈夫なのか？ 中途半端に教わって、噛ませ犬のようにお前がやられそうで怖いぞ」
「ふ……私を誰だと思っている。リーシア殿がスタミナ切れで倒れているところを師範についていったんだぞ」
「比較対象がリーシアじゃなぁ……」
「ふぇええ……」
ある程度強くはなったと思うが、リーシアにスタミナはないだろう。
ステータスという基礎的な意味で。
「技よりも基礎の体の動きや魔力、気の流れを重視する流派だからな。コツを掴むのが大変だった」
あのババアは凄く強いので信頼はしているが、流派の方はよくわからないところがある。
命力水でドーピングすると感覚を掴みやすくはなるみたいだが……。
「大分、コツを掴んできました」
「お？ キョウ相手じゃないとできなかったあの技が開花したか？」
「た、多分。あの時の感覚を少しは再現できるようになりました」
「……それは凄いんじゃないか？」
俺の言葉にリーシアがキョトンとした表情になった。
もはや当たり前になっているのか……これがパワーのインフレってやつ？
一撃で俺がやられたりするんだろうか。
俺の知っているマンガにそういう展開があった。
……嫌だぞ、そんなの。
「ラフタリアはどうする？ 俺とずっと一緒にいるから修行は中途半端になっているだろう？」
俺の質問にラフタリアが困ったように答える。
「えっと……グラスさんと稽古していた時にも説明しましたが、ある程度はできるようになっていますよ？ ただ、

眷属器の所為でエクレールさん達みたいなことはできないみたいですけど」
「へー……ババアの話だとスキルの強化とかはできるって話だったな」
「そうですね。力を込めると威力が上がります」
一応、ラフタリアも近い動きができるのか？ 俺もかすかにできそうだった覚えはある。
フィーロは既に習得しているんだったか？ あくまでラフタリアとグラスの話によればだが。
「私も本格的な修行をした方がいいとは思うのですが……」
「今はいつ襲撃があるかわかったもんじゃない。警戒ばかりしてても始まらないが」
ラフタリアを修行に行かせるにしても、状況が許してくれない。
というか、俺も自分を鍛え直した方がいいと思うんだが……時間的余裕がない。
「ババアは何と言っている？」
「ラフタリアさんはナオフミさんの右腕なのだから、まだ覚えないといけないことが沢山あると師匠は言っていました」
「そうか……」
ラフタリアがいると色々と助かる。今までずっと一緒にいたわけだし、連携もとりやすい。
とはいえ、この際俺を含めて修行をするのも悪くない。
敵の襲撃を警戒しなきゃいけないからタイミングを考えないといけないがな。
「イワタニ殿はこの後何をする予定だ？」
「ああ、いつまでも警戒していたら動けないからな。繁殖しすぎて人里近くにまで来ている危険な魔物を退治しに行こうかと思っている。そのついでにメルティの頼みでこの辺りで活発に行動している盗賊狩りをする予定だ」
「ふむ」
「何が、ふむ、だ。本当はお前がする仕事なんだよ」
「うっ……」
図星を衝かれてエクレールは黙りこんだ。
まあ……そろそろ俺自身の底上げを視野に入れていたので定期的な経験値稼ぎ、というわけだ。
ステータスは下がっちゃいるが、Ｌｖを上げられないわけじゃないしな。



「で、では私も一緒に行かせてもらう。もちろんリーシアもだ」
「丁度良いな。お前等の成長を見せてもらうか」
えっと、俺、ラフタリア、リーシア、エクレールに……移動用にフィーロだな。
戦力的に申し分ない構成だ。これで負けたら、どうやっても太刀打ちできないほどの状況とも言える。
まあ何かあったらセインが駆けつけるだろ。
今のところ、俺の鎧に待ち針を付けているみたいだし。
「後は……アトラ」
「はい、なんですか？」
俺が呼ぶと間を置かずにアトラがやってきた。
待機していたのかってくらい早かったな。
最初は病弱キャラだったはずなのに……。
「なに⁉」
フォウルが忌々しそうに俺を睨んでいる。
コイツ等、地味に活動しているんだよな。
まだクラスアップはほど遠いが、どんなものなのか確認しておきたい。
というか、俺がアトラを呼んだだけで『なに⁉』ってどういう反応だよ。
「お前等、Lv上げにいくから手伝え」
「はい。尚文様と一緒に行けるのを楽しみにしておりました」
「アトラ！　お前はそんなことをしなくても――」
「お兄様、うるさいですわ」
アトラが騒ごうとしているフォウルの胸をトスッと指で刺した。
「ぐふ……」
それだけでフォウルが腹を押さえて倒れ込む。
なんだ？　アトラの方が強そうな感じだな。

というかなんだ今の？
ツボを突いたとかそんなところか。
「イワタニ殿、師範曰く、アトラ殿には変幻無双流を教える必要がないそうだぞ。盲目であることが資質を大きく開花させているそうだ」
ババアは村に来た奴隷達を一応確認はしているんだ。
戦闘顧問という扱いで俺の村にいるわけだからな。
資質が高い奴を見抜くのが得意らしいし。
アトラを購入する前に聞いた話では、フィーロとサディナは能力が格段に高いとか言っていた気がする。
で、アトラもそうなのか？
元気そうな兄であるフォウルよりも？
だが、考えてみれば目も見えないのに平然と生活しているし、気とかいう概念に詳しい。
こりゃあ兄貴よりも良い買い物をしたのかもしれん。
「えっと……それだけできれば十分だな。頼りにしている。じゃあ出発するか」
「イワタニ殿、盗賊はどこに出没するのだ？」
「最近とある山間で盗賊が徒党を組んで根城を築いているそうだ」
俺は地図を広げてエクレールに山賊の活動地域を説明する。
襲撃するには良さそうな場所だ。
「ふふ……群れているのは良い状況だな」
「なんでそんな楽しそうに笑っているんだ？　イワタニ殿がそんな笑い方をするなんて初めて見たぞ」
エクレールが不気味そうに言う。そんな顔をしていたか？
盗賊って結構金目の物を貯めているんだ。奪うにはいい相手だよな。
正式な依頼だから報酬もあるし、一石二鳥だ。
「ナオフミ様は盗賊狩りが好きみたいですよね」
「実入りがいいからな。同時に領地の治安向上に努めたいんだよ」
エクレールが怪訝な目で俺を見ている。

知らんな。領地経営よりも修行を優先する奴に文句を言われる筋合いはない。
「こいつ等は、最近台頭している首領を捕縛しなきゃ始まらないそうだ」
どうも今回の盗賊は組織だった行動をする厄介な連中らしい。
昨日も行商中に盗賊に遭って捕まえたのだが、奴等がボツリと呟いたのだ。
「首領？」
「捕まえた盗賊の証言だと、最近近隣の盗賊のボスになった者なんだそうだが、相当の武闘派らしい」
奴隷共が行商中に襲撃に遭って返り討ちにした。
なんだかんだで大分強くなってきて安心だな。
「武闘派なのに逃げているのか？」
「そこだ。よくわからないが、相当疑い深いボスで滅多に人前に出ず、それでいて強い猛者である冒険者を一人一人確実に潰す手堅さを持っているとか」
「よくわからないのだが……」
まあな。それってボスなのかって思うよな。
策略家といえば聞こえはいいが、セコイ奴とも言える。敵にすると面倒なタイプだ。
だからこそ、本格的に俺が討伐しなきゃいけなくなったわけだしな。
「盗賊共はそのボスの言う通りに狙った相手を攪乱して、混乱して逃げた者を孤立させてボスが直々に狩るっていう戦略をとっているらしい」
とはいえ……なんでそんな面倒な戦い方をしているんだ？
目的が不明瞭な奴だな。
「そのやり方だから部下の盗賊を捕まえてもボスが捕まえられない。俺達はその首領を捕らえるのが仕事だ」
「ふむ、厄介な盗賊が現れたものだな」
まあな。面倒な相手なのは確かだ。
ボスが生きていたら部下は幾らでも補充できる状況か。
そこまで手の込んだことをやりたがるということはアジトも一つじゃないだろう。
とはいえ、盗賊狩りは儲かる。

「まあ予定通り、盗賊が出るって辺りを巡回して魔物を狩るつもりだ」
「ああ」
「わかった」
「わかりました」
そこでラフちゃんがトコトコと近づいてきた。
「ラフー」
「お？　ラフちゃんだ」
久しぶりに思い切り撫でまわしてやろう。
奴隷共の癒し担当をしてて全然俺に近寄ってくれなかったからな。
ラフタリアがいると気を利かせているのか距離を置く慎ましいところがラフちゃんの魅力だ。
「ラフー！」
「よーしよしよし」
「ナオフミ様？　なんでそんな楽しそうな顔をしているんですか？」
「楽しいからだ」
やはりラフちゃんは可愛くていいな。
最近はあんまり構ってやれなかったから撫でられる時に撫でておかないと。
「はぁ……」
「ラフちゃんも盗賊狩りに来るか？」
「ラフー！」
お？　やる気を見せているぞ。ラフちゃんも一緒に連れていくか。
楽しくなりそうだ。
「イワタニ殿……ラフタリア、がんばるのだぞ」
「はい……」
何やらエクレールがラフタリアを慰めている。何かあったか？
「ラフー？」

「よーし、じゃあ隣町でメルティと一緒にいるフィーロを誰か連れてこい。魔物退治と一緒に盗賊狩りへと出かけるぞ！」
俺の指示に、みんなテキパキと行動を開始した。

「見違えるほど動きが良くなったな」
ババアの教育の賜物か、リーシアが率先して魔物を屠っている。
以前のリーシアを知っている者から見たら、幻でも見ているような気分だろうな。
実際、俺もそんな気分だ。
武器は小剣……ペックルレイピアを主軸に紐付き投げナイフと鞭。
投げナイフを投げると同時に鞭を相手に絡ませて、ナイフが刺さると同時に引き寄せてペックルレイピアで串刺しにしている。
あの突きは変幻無双流、缚突とかいう攻撃らしい。
名称がシンプルすぎて逆に中二病っぽい気もするが、それ以外は高評価だ。
しかも、早業。
元々リーシアは感情が高ぶると強くなったが、それを超えて更に強くなったと見ていいな。
物を投げて敵に当てるの上手いし。
あれに防御貫通なんかを混ぜられたらきつそうだ。
俺も真面目に修行すべきだろうな。
なんだかんだでラルク達と友好関係を築いたから急務ではなくなっていたわけだが……今後の敵を考えると同列の攻撃ができるに越したことはないだろう。
ちなみにリーシアのＬｖは現在70。
長い69を乗り越えてやっと70になった。
次のＬｖまでは69から70ほどではないが、多いな……開花するかと思ったが、70になった直後に大きな変化はなかった。
それでもステータスに見合わない強さに、正直かなり驚いている。

多分だが、樹が今のリーシアを見たら戻ってきてくれとか言いそうだ。
あいつはプライドが人一倍高いから実際は言わないだろうけどな。
「そうですか？　私はいまいち、実感が湧かないのですけど……」
自覚なしか。強くなっても根本は変わらないらしいな。
なんて思っているとエクレールが魔物を剣で突き倒した。
こっちもリーシアほどではないがなかなかの腕前だ。以前よりも確実に強くなっている。
「エクレールさん、凄いですね」
ラフタリアが感心してエクレールを褒めている。
「ラフタリアほどではない。だが、変幻無双流では私の方が一歩先を行っている。早く追いついてくるがいい」
「ええ、絶対に追いつきますよ」
何やらラフタリアとエクレールの間には友情が築かれているみたいだな。
そんな光景をよそに、アトラが近づいてきて俺に言った。
「見ててくださいね、尚文様」
「ああ」
後はアトラがどれくらいやってくれるか、だな。
兄貴よりも強いのだろうか？
「アトラ！　そいつは俺が――」
「お兄様。邪魔ですわ」
「うわ！」
アトラに突かれてフォウルが前のめりに転がり、そのフォウルをアトラが踏んで足場にする。
襲い掛かってくる巨大なイノシシの魔物、レイザーバックの突進をアトラは正面から片手で受け止めた。
指一本をレイザーバックの鼻先に付けているだけだ。
レイザーバックは必死に走ろうとしてるみたいだが、一歩も進めていない。
なんだ？　怪力でも持っているかのようだ。
「ごめんなさい」

ツン。
アトラがレイザーバックの額に向かって飛んで、突く。
それだけで……レイザーバックは白目を剥き、泡を吹いて倒れた。
は？　あれは死んでいるのか？

ＥＸＰ70獲得。

……経験値が入った。
まるで暗殺術か何かだ。普通に倒されるよりダメージが強そうに見えるのはなんでだろうな。
脳みそをえぐり取ったとかだろうか？　普通に突いただけにしか見えん。
「やりました！」
「そ、そうか……」
天才って凄いな。リーシアや女騎士よりも遥かに強く見える。
ていうか素手かよ。
よく考えたら武器を持たせていない。
いや、他の奴隷共と同じく武器を渡したはずだが、使わなかったんだろう。
魔物の平均Ｌｖが……40前後か。この面子だと余裕だな。
俺はアトラの足場となっているフォウルを指で突く。
なんていうか可哀想な兄だな。
「とー！」
フィーロはフィロリアルクイーンの姿で元気よく魔物を蹴り飛ばしていく。相変わらず戦い慣れた感じだな。
それにしても俺が盾を使う必要もなく魔物達が倒されていく。
俺も何かした方がいいんだろうが、必要性を感じない。
みんな強くなってきてるんだな……ちょっと疎外感。
「ナオフミ様。どうかしましたか？」

「いや？」
「ラフタリア、イワタニ殿が活躍できるように魔物を連れてこよう。でないとサディナ殿にイワタニ殿が取られるかもしれないぞ」
「はい！」
「構ってほしいわけじゃねえよ！　ラフタリアも力強く頷くな！」
エクレールの奴、なんてことを言うんだよ。
俺がどうしてあの酔いどれ女と一緒にいなきゃいけないんだ！
「まあいい。この調子ならこれだな。ヘイトリアクション！」
とりあえずヘイトリアクションを使って周囲の魔物を呼び寄せながら、もう少し強めの魔物がいる所へ行くことにする。
山の奥の方へ行くとやがてドラゴンが混ざったような魔物が出てくるようになった。
ああ、そういやドラゴンって辺境に生息しているんだったな。
盗賊の出没地域とは外れてしまったか。
まあ、どこまで行けるかの確認もできるからいいだろう。
素材を盾に入れれば地味に能力が向上するし。
とは思うのだけどドラゴン系はなぜか解放されない。
魔竜の盾も出るまでにタイムラグがあったしな。
「イワタニ殿！」
「ナオフミ様！　お願いします！」
「やっと俺の出番だな」
さすがに俺の出番となり、魔物を押さえつける。そして、その隙に他の連中が攻撃していく。
後は弱い魔物は各自で倒していく。
で、みんなＬｖが上がったわけなんだけど、驚く成長をした奴が一人いる。
70から71に上がった瞬間、全てのステータスがグンと急に伸びた。
名前はリーシア＝アイヴィレッド。
修行の成果か？
いや、確か肉体強化ってステータス魔法とは別扱いだから、急に上がるはずはない。
その日、盗賊に出会えず魔物ばかりと戦ってＬｖは72まで上がったのだが、やはり72でも三割くらい上がっている。
以前、眷属器に選ばれる前のラフタリアのステータスの半分にまできている。
元々が三分の一だったからそこまでかとは思うかもしれないが、このまま成長するとあの時のラフタリアに75で追いついてしまう。
どうやらリーシアの才能が開花するのは71以降だったということなのだろう。
やっとリーシアが戦力として大きく期待できる状態まできたようだ。

十五話　仮面の男

「というわけで、Ｌｖ上げもしたし、本格的に盗賊を捜すとしよう。宝を奪った後はＬｖ上げを再開すればいい」
危険な魔物とやらの退治を適度に終えた俺はそう言った。
「ちょっと待て！　盗品をどうするつもりだ!?」
「誰が所有者なのかわからない品を持ち主に返せと？」
俺の返答にエクレールが呻く。
霊亀の時も似たようなことを言っていたもんな。
「証明できるなら返すさ。だが、それを証明できるのか？」
やがてエクレールは諦めたように深く溜息を漏らした。
「……はぁ。イワタニ殿のように逞しくないと領主はやっていられないということか？」
「ラフタリア、盗賊の金品を奪うのは悪いことか？」

「え？　悪いことですか？　物を盗む人達の方が悪いんじゃないんですか？」
「ラ、ラフタリア？」
「ふむ……反応としてはエクレールの方が正しいような気もするな」
まあ今更やめるつもりもないが。
「だが、盗賊の宝は俺のものだ。それで復興資金が潤う」
この前の奴隷購入みたいに、急遽金が必要になる可能性もあるからな。
金はいくらあっても困るものじゃない。
「……これも必要なことだというのか？　私は……どうしたらいいのだ……」
エクレールが何か思い悩んでるぞ？　どうしたんだ？
実はもうちょっと噛みついてくると思っていたが……まあ面倒がないだけ楽でいいか。
「はぁ……」
「ラフ？」
お？　ラフタリアとラフちゃんが同じモーションで首を傾げてるぞ。
これはいい！　なんかテンション上がってきた。
「町よりもイワタニ殿の村の方が復興してきているような気がしてならない」
「隣の芝生だ。気にするな」
メルティや他の貴族達の協力もあってエクレールが管理している町も多少、復興が進んできている。
俺の村はまだ人手が若干足りないからな。
家と畑しかなくて町というにはほど遠い。
「いや……このままでは、いずれ……」
「そこまで気にするなら修行なんてしてないでメルティの手伝いをしろ！」
まったく、脳みそ筋肉のくせに俺を羨ましがってどうするんだ。
武術を取るか、政治を取るか、どっちかにしろ。
「とりあえず、魔物退治もある程度済んだ。次は盗賊狩りだ」
俺達は盗賊が住み着く街道近くの山で準備を整えていた。

「知っているとは思うが、盗賊はせいぜいＬｖ40が限界だろうからな。いつも通りやればいい」
クラスアップは信用がないとできない。だから盗賊のＬｖはそこまで高くない。
もちろん、ゼルトブルとかでクラスアップをした流れ者がいるかもしれないがな。
相当前に行商していた頃、一度だけ遭遇したな。
コロシアムで実績が必要なんだろうな。
しかしコロシアムで稼げる奴が盗賊になるかと言われると微妙だ。
まあ知ったことではないけど。
「とりあえず、二人一組で盗賊かアジトを捜してくれ。ボスに関してはまだ情報が足りない」
盗賊のアジトを見つけるには盗賊を見つけて吐かせるのが手っ取り早い。
手始めに数名捕らえないとな。
さて、人員は……適当に仲良さそう、もしくはバランスが良さそうな同士で振り分けるか。
「フォウルとアトラ、ラフタリアとエクレール、フィーロとリーシアで捜してくれ。イヤなら好きに分かれていい」
俺はラフちゃんを抱っこして歩き始める。
「ラフちゃんは俺と一緒だ。さ、ラフちゃん、撫でるぞ」
「ラフー」
「なんでですか！」
ラフタリアが異議を申し立てる。
「あんまりぞろぞろと集団で動いてもな。俺はボスの習性に合わせて、一見一人にしか見えないようにして獲物が来ないかラフちゃんと試してみる。何かあったらラフちゃんがラフタリアに伝えてくれるだろ？」
「ラフ！　ラフラフ！」
使い魔のラフちゃんはラフタリアへ緊急信号を飛ばせるらしい。
だから戦力的に優れるラフタリアには自由に動いてもらいたいのだ。
ラフちゃんもなんかやる気あるみたいだしな。
まあ、魔物とエンカウントしたら俺だけだと対処に困るけど、逃げるのは容易い。
魔物や襲撃者相手に絶対に俺が戦わなければいけないわけじゃないしな。



最悪、セインを呼べば来るだろ。

「なるほど、わかった。では行こう」

「……わかりました」

エクレールに言われてラフタリアも納得したようだな。

「アトラ、お前は察知能力が高いから頼りにしているぞ。盗賊のアジトを見つけ出してこい」

「お任せください。さ！　お兄様行きますよ！」

「く……」

フォウルは相変わらず俺への敵意が強い。

とはいえ、妹に引きずられるように盗賊捜しを開始した。

「では、行ってきます」

「ごしゅじんさま、フィーロも行ってくるねー」

リーシアも落ちついているのか、フィーロと一緒に捜し始めた。

「さて……」

ラフちゃんと俺も盗賊とそのアジトを捜し始める。

ま、俺が盗賊の不意打ちで傷を負うことはないはずだから、この依頼も余裕だな。

なんて散歩気分でラフちゃんと戯れながら山道を歩いていた。

「ラフゥウウウ！」

ラフちゃんが警報とばかりに鳴いて指を向ける。

なんだ？　振り返ったが誰もいないぞ。

だが、目の前に突然、黒い影が現れたので思わず盾を前に出す。

「アサッシングソード！」

「なに!?」

盾から思い切り火花が散る。ガツンという衝撃から相当力の籠った威力の高い攻撃であることを理解する。

俺以外の奴が受けたら死ぬんじゃないのか？
「いきなり何すんだ！」
ブンッと盾を振り回して俺を不意打ちした馬鹿を薙ぐ。
パッと俺を突き刺そうとした奴の姿を確認する。
「正々堂々勝負だ……！」
「な――」
自分でも信じられない者を見て、俺は絶句してしまった。
怪しい骸骨を模した黒い仮面をつけて顔を隠しているが、体型、声、武器の構えから、仮面の人物の素顔が浮かんだ。
天木錬。剣の勇者が真っ黒な禍々しい剣を握りしめて構えていたのだ。
「チッ！」
気の所為か前見た時より装備が貧相になっていて、仮面の隙間から見える目付きもやさぐれていて、どこかおかしい。
いや、俺が言うのもなんだけど、そんな次元じゃない。
精神的にすり切れているのか、瞳孔が開いているように見える。
「れ、錬!?」
「……ハイド……ソード」
ゆらぁと錬は陽炎のように姿を消した。
なんだ？　何か幻覚の魔法でも掛けられて変な幻でも見てしまったのか？
とりあえず、ハイドなんてスキルを使っているところであやしさ抜群。
だから俺も交戦状態に入る。
「ラフー！」
居場所はラフちゃんが教えてくれる。
そもそも正々堂々勝負とかほざいておきながら背後から突然斬りかかったり、姿を消すスキルを使うとか、どういう神経をしているんだ？

ゲームシステム上での正々堂々だとでも言うつもりか？
それにしても、妙に覇気のない声だったな。
まあいい、今は敵に集中しよう。
「ヘイトリアクション！」
魔物を引きつけるこのスキル。実はもう一つ隠し効果があるのがカルミラ島で判明している。
それは軽度の潜伏魔法やスキルで隠れている相手を引きずり出して正体を明らかにさせることができる効果だ。
ラフタリアが幻影剣を放つ時に、俺がヘイトリアクションを使った時だった。
ラフタリアの潜伏効果が解除されてしまったのだ。
だから隠れている場合は発見できる。
錬はまた俺の背後に回り込もうとしていたのか、俺の左後方に移動している最中だった。
ちょっと間抜けな光景だが、逆にイラッとくる。
その手のスキルを使うなら一度離脱しろよ。
まあ、ラフちゃんやラフタリアには効かないだろうがな。
「く……」
「お前……錬だろ？　どうしたんだ？」
「…………」
これが幻覚だったら良かったんだがな……まさかこんな所に潜んでいるとは。
もしかしてヴィッチが盗賊の親玉でもやっているのか？
……すげぇ似合う。
アイツは王女の器じゃない。
どちらかと言えば海賊とか盗賊がお似合いだ。
「羅刹・流星剣！」
流星剣のモーションで錬が俺に剣を振るう。
すると剣先から星のような黒い粒子が俺に向かって飛んでくる。
盾を前に出して受け止める。

……そこまでの脅威ではないな。受け止めきれた。

相変わらずよええな……いい加減強化方法を習得してほしいもんだ。

が、俺が分析しているその隙を錬は逃さなかった。

「チェーンバインド！　チェーンニードル！」

ぐ……盾で堪えたが、僅かに鈍い痛みが走る。

ラフちゃんを守らないといけないし、やばいな。

その隙に、錬が連続でスキルを放つ。

『その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は処刑による斬首也。叫ぶ暇すらなく、自らの首と胴体の分離に絶望するがよい！』

「ギロチン！」

いきなり地面から現れた鎖に体を縛られ、しかも鎖がとげのついたものに変わって俺の肌に突き刺さる。そして俺の頭上に巨大な刃の付いた処刑具が出現した。

この攻撃……雰囲気から憤怒の盾にあるアイアンメイデンと同系統の攻撃だと思う。

く……受けてたまるものか。

「ふざけんなぁああああああ！」

鎖を引きちぎって、降り注ぐ刃を手で押さえる。

いってぇな。血が出たじゃないか。

やっと俺の防御を突破したのか？

強化方法の共有……じゃなくてスキルの性能でやっというのが悲しいな。

……ＳＰがごっそり削られている。

「錬……いい加減にしろよ？　こっちが本気で怒る前に戦うのをやめろ」

「ナオフミ様！」

ラフちゃんの警報を聞いてラフタリアが駆けつけてきて、錬に向かって斬りかかる。

よし、そのまま錬を押さえつけろ！

「転移剣！」

「あ、てめぇ！　逃げんな！」

俺が掴むよりも早く錬は転移スキルで跳躍して消えた。

な、なんだったんだ？

錬のフリをしていた魔物か人か？

いや、俺の防御を突破できるって相当の化け物のはず。

もしくはババアみたいな防御無視や防御比例攻撃でも使わないとダメだろ。

隠れた状態からアサッシングソードというスキルを放ってきた。

スキルや名前から察するに隠蔽状態、ステルス、ハイディングからの必殺攻撃と見ていい。

ゲームによっては存在するスキルだと思う。

職業枠とかだと正統派の剣士とか騎士とかとは異なる、暗殺者とか忍者とかスカウトとかの職業が使うスキルって感じだ。

今までの錬とは毛色が違う気がするぞ？

しかも、なんかカースシリーズ臭い、禍々しい剣持ち。

しかし……突然の襲撃って……アイツはネットゲームに出没するＰＫかなにかか。

……もしかして盗賊の首領とやらとは錬のことか？

事前情報の行動パターンと完全に一致しているな……。

まあＶＲＭＭＯとかいう怪しいゲーム出身だからな、アイツは。

挙句カーススキル臭い攻撃。

俺じゃなかったら即死を通り越して、真っ二つになっているところだぞ。

ラフちゃんが教えてくれなかったら後ろからばっさりやられていたかもしれない。

本当、反吐が出るな。

「大丈夫ですか？」

「ああ……だけど」

「そうだな、私も見ていたぞ」

エクレールが来て、殺気を放つ。

「なんなのだ一体……」
とりあえず、受けた傷の回復をするために、俺は回復魔法を唱える。
ああ、ちなみに呪いの所為で、あのギロチンってスキルの攻撃は凄く痛かった。
しかも回復が遅い……。
盗賊捜しを開始して僅か三十分。俺は今回の任務の先行きが非常に不安になるのだった。

それから俺達は盗賊のアジトを発見したのだが、やはり錬は見つからなかった。
話通り一人一人倒す卑怯な戦法を取っているわけか。
「さて……どうしたものかな」
「まさか剣の勇者がその首領だとは……」
「背後にヴィッチがいると見ていいな」
「元王女か……あの方はどこまで愚かな蛮行を繰り返すのだ……」
ヴィッチもこの盗賊のアジトにはいなかったな。他の所に潜伏しているのかもしれない。
とりあえず盗賊から情報を……ん？
「あのさ」
俺はアジトの管理をしている盗賊の一人に顔を近づけて盗賊の顔をよく見る。
見覚えのある顔だ。
それもつい最近見た……というか、錬が捕らえた盗賊じゃないか。
なんでこんな所にいるんだ？
「お前……捕まってなかったか？」
フィーロで脅しをした時に、いつもいる盗賊がそこにいる。
捕まえた当初、アジトに乗り込む俺達に余裕を見せていたが、俺を見るなりガクガクと足を揺らしてキョロキョロと辺りを確認している。だからフィーロがどこにいるのか指差してやる。
「ラッフッフ」
ニヤリとラフちゃんが邪悪な笑みを浮かべた。

ラフちゃんは本当にノリが良くていいな。ラフタリアも学んでほしいくらいだ。
「さてフィーロ、召し上が――」
「降参する！」
あっさりと盗賊は投降して今に至る。
他の奴は例に漏れず、怖気づいたのか、とかその盗賊を罵っていた。
もちろん、速攻で身のほどを教えてやったけどな。
「盗賊と知り合いとはどんな関係なんだ、イワタニ殿？」
「腐れ縁だな。まだ冤罪が晴れる前に出会って、自警団に連れていけないから宝を奪った。次はメルティ誘拐疑惑の時に出会ってアジトを宿代わりに利用させてもらったんだよ」
「捕まえるに捕まえられない状況ということか」
「まあな。その後は一週間くらい前に錬が捕まえた時に再会して、これで四度目だ」
「……そんな盗賊がなぜここにいるのだ？」
「だから聞いてんだよ」
戦意ある盗賊共は、俺の配下が瞬時に倒していく。
今回は配下の人数が多いから非常に楽だ。
「な、なんだこいつ等！　化け物じゃないか！」
「そ、そうだよ。こいつは首領と、いや首領よりも強い化け物だ」
「そんなに褒めても何も出さないぞ。むしろ払え」
「なんで請求しているんですか！」
ラフタリアのツッコミも冴えているな。
なんかコントをしている気分になってきた。
「く……」
「でさ、お前等、あの時捕まったのになんで盗賊してんだ？」
考えてみるとコイツの存在がおかしい。
もう刑務所とかその辺りに収監されているはずだ。

「ですよね。何があったんですか？」
「……連行されてる時の馬車が盗賊に襲撃されて、逃げられたんだよ」
「へー」
すっげー雑だな。
連行時の馬車を襲撃って……仲間とかそんな感じから助けが入ったのか？
この国の警備も案外頼りにならないなぁ。
女王に注意した方が良さそうだ。
「首領に」
「錬————————ん！」
思わず叫んでしまった。
あの馬鹿、盗賊を助けるって何をしてんだ！
というか、自分が捕らえた盗賊を自分が助けるって、どういうことだよ。
これが噂の自作自演……意味が違うか。
「はぁ……あの方は一体……」
ラフタリアの嘆きも深いな。俺もそう思う。エクレールなんて転びそうになってたぞ。
「それっていつごろの話だ？」
「えーっと……一週間くらい前だ」
別れて割とすぐじゃないか。
……ヴィッチの奴、錬を誘惑して即座に盗賊組織を作ったのか？
「そうだな。じゃあ、錬……じゃない。お前等の首領と一緒にケバイ赤髪の女がいなかったか？」
「あー……ナオフミ様のその説明に関しては色々と指摘したいことがあるのですが、あの方の特徴といったら確かにそうですね」
「女？　首領はいつも一人だ」
「確かに、アイツはいつも一人だな。仲間とも距離感あったし」
錬のスタイルはネットゲーム用語でいうところのソロプレイヤーとでも表現しておくか。

「なんでしょう。可哀想に思えてきました……」
ラフタリアも同情するほどのぼっちが錬だ。今はヴィッチがいるんだろうがな。
だが盗賊はヴィッチのことを隠している様子ではない。
本当に知らない、見たことがないって感じだ。
となると、ヴィッチは錬と一緒にいない？
そういえば錬の装備が随分と劣化していたな。
冒険者を襲って金回りもいいはずだから、装備を売って生活費の足しにしているわけはないし。
豪遊するヴィッチのために貢いでいるとかか？
う～ん、その割に盗賊共が貯め込んでいる宝が多いな。
「一体あの方々は何をしているのでしょう？」
ヴィッチ達は姿を現さない黒幕をしているのか、錬が既にヴィッチに捨てられているのか。
そのへんの解明は錬を捕らえてからでも遅くないな。
眼前の錬の捕縛を優先しよう。
「錬はカースシリーズっぽい剣を所持していた。下手に近づくのは危ないから気を付けないとな」
「ですね……」
「しかし、カースだったとして何のカースなんだ？」
スキルの構成や威力からカースシリーズで間違いない。
特定することで行動が読めるなら考えるべきだ。
問題は何のカースなのか、だ。
憤怒……別の種類があるとすれば、七つの大罪辺りが連想できる。
しかし奴の使ったスキル……ギロチンだったか。
拷問具、あるいは処刑具という共通点はあるが同じスキルではない。
仮に憤怒以外にも何かあるとすれば、効果の違う武器があってもおかしくはない。
「俺のラースシールド……元は憤怒の盾と言ったが、これは七つの大罪という要素から取られたものだろう。この世界にはあるのか？」

ラフタリアは地方出身だし、こういうことはエクレールに聞くのがよさそうだな。
「ああ、勇者の残した伝承類の中に存在する罪と聞いたことがある」
俺達みたいな勇者共が異世界から伝えたものがルーツだろうな。
ま、異世界から召喚された勇者は総じて、そういう要素が好きなのかもしれない。
「七つの大罪の確認を取るぞ。それは傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲でいいんだな？」
俺の質問にエクレールは頷く。
「イワタニ殿の言ったもので間違いない」
俺の場合、ヴィッチやクズ、この世界の連中に対する怒り、憤怒から出た。
錬の場合は……色欲ではなさそうだよな。
残りがどれも当てはまりそうで特定できない。
「というか、なんで剣の勇者が盗賊のボスをしているんだって話にならなかったんだ？」
「仮面をつけていたからでしょうか？」
「それが妥当なところだろうな……」
剣も変えていれば勇者だってわからない。
さすがに盗賊のボスをやっている剣の勇者、なんて突拍子もない話は俺のところに来る前に消えてしまったということだろう。
「剣の勇者の声を知っている盗賊はいなかったのか？」
「話したら殺すと俺も脅かされていたんだ。下手に騒いだら殺される！」
ああ、錬も秘密癖があったもんな。
仮面をつけてわからないようにしていたのもその所為か。
「正直、ここで捕まって俺はホッとしてる。やっと終わるってな」
「ああ、そう……」
錬は一体何をしているんだ？
と、考えながら俺達は盗賊共を縛り上げて戦利品を強奪した。
「まったく、勇者とはどれもこうなのか？」

「知らんな。あいつ等と一緒にするな」
「イワタニ殿……これも領主として必要なことなのか？」
「またそれか。何度も言うが知らんな。お前の親が何をしていたか人伝でしか聞けないからな」
「父上も闇の部分を抱えていたのだろうか……？」
どうもエクレールは何かに悩んでいるようだ。
後でラフタリアやサディナにケアを頼んでおくか。
「とにかく、今は錬の問題だ。このまま野放しにしておいたら被害が出るのはもとより、勇者の命を狙っている奴に出くわす可能性もある。どうにかして捕獲しなくちゃならん」
いつまでもゲーム感覚でいて、風向きが悪くなったら自分に甘いことを言う奴だけを信じるなんていう錬の性根を叩かんとな。
俺は甘いことを言う奴すら疑って掛かっているからな。
むしろ甘いことを言う奴が一番怪しい。
背後関係を確認しとかないといつ足元を掬われるかわかったもんじゃない。
今は錬を捕まえて死なせないようにしなきゃいけない。
「しかし……カースを持って暴れる奴を捕まえるってどれだけ難易度が高いんだ」
「難しい問題ですね。死なせないようにしないといけないわけですし。倒せばいいだけならまだ手はありますが」
「俺のことをボスか何かと思って不意打ちしたということは経験値が目当てかもしれん」
「ありそうで怖いですね……」
この世界は人間を殺しても経験値が手に入るらしい。
「となると経験値を貪るという意味で『暴食』といえば暴食かもしれない」
Ｌｖアップさせるのが好きそうだし、錬みたいな奴はその傾向が強い。
その感情が暴走していると仮定して、ラフちゃんを連れていたとしても一人で歩いていた俺がカモに見えたのだろう。
「他に『強欲』……全てを欲し盗賊を使って宝を集めているというところから強欲である可能性がある」
むしろ強欲は俺の専売特許だと自負したいんだが、俺には出ていないんだよなぁ。

「なんか自虐的なことを考えていませんか？」
「よくわかるな」
「付き合いも長いですから」
俺の考えてることを察するラフタリアの能力の高さに脱帽だ。そんなに俺は表情に出るのだろうか。
ともかく、武器ごとに出るカースシリーズが違うとかだと見当もつかない。
後は『傲慢』か？
Ｌｖこそが全てで、Ｌｖが低い相手は見下すべき存在とか思っている奴もネットゲームでは見かける。
プライドが高いというか、錬って孤高を気取ったところが自尊心の表れであるとも言えるからな。
まあ、これはむしろ樹か。
「エクレール。七つの大罪以外に八つの枢要罪の可能性もある」
「あ、聞いたことがありますぅ」
リーシアが恐る恐る手を上げて告げる。
そっちもあるのか……過去の勇者ってどんだけ罪系好きなんだよ。
中二病か？
まあ七つの大罪はなんだかんだで改訂された罪で、古い方は八つの枢要罪と言う。
暴食、色欲、強欲、憂鬱、憤怒、怠惰、虚飾、傲慢。
嫉妬はなく、憂鬱と虚飾というものがある。
後に怠惰と憂鬱が一つにされて虚飾が傲慢に含まれ、嫉妬が追加されたという経緯がある。
「もしも古い方の八つの枢要罪が入っているのなら、『虚飾』……実質的なものはない、外見だけのことを指す罪かもしれん」
「そうなんですか？　よくわからないのですが……」
「剣の勇者が外面に拘るのか？　確かにないとは思えないが少し理由が弱く思えるぞ」
ラフタリアとエクレールが俺の導いた可能性に疑問を持つ。
「まあ、これは俺の認識というか異世界人独自の感性だな。わかりやすく言えば、そうだな……エクレール、リーシア、魔物との戦いをカード類……テーブルとかで遊ぶもので模したゲームはないか？」

「あ、はい。魔物と戦って強くなるのを教える教材があります」
「教材か……まあ、それでいい。わかりやすく言えば俺や錬のような異世界人はそういう教材で遊ぶことが多い。だが、この教材で遊んだからといって本当に強くなれるわけじゃないだろ？」
俺の問いにリーシアを筆頭に皆が頷く。
リーシアはそういうの詳しそうだもんな。
「その教材……この世界の場合は数名でやるものなんだろうが、世界中の人達と遊べるものが勇者がいた世界にはある」
「ふぇえ……そんなに沢山の人達と一緒にやっていたんですか！」
「樹の場合はまた別だが概ね違いはない」
樹はコンシューマーゲームだ。
オンラインの要素があったかどうかは根掘り葉掘り聞いたわけじゃないからわからないけどな。
「なるほど、勇者殿達が世界に詳しいのはそれで理解はできるな。事前知識は必要だ」
オンラインゲームで手に入る強さなんて実際は偽りの強さであり、その強さに執着するってのは虚飾でしかない。
もちろん、オンラインゲームで得る経験は嘘ではないし、強さにも価値があるだろう。
俺の元の世界でもそういった繋がりで仕事を得た奴もいるし、俺もネット内の知り合いから、大学を卒業したら正社員にならないかと誘われたことがある。
リアルでも会ったことがある奴だ。
本当かどうかは知らないけど『お前の物怖じしない性格とギルドマスターの時のカリスマが会社に欲しいんだ』とか耳に心地いいことを言われたな。
今考えると、俺を適当に褒めて使いパシリにでもしようと思っていたんだろう。
でも、錬の人格や交友関係を考えると、そういった期待に満ちた関係を築けるとは到底思えない。
せいぜいボスドロップの珍しいアイテムを自慢するソロプレイヤーとかそんな立ち位置だっただろうことは簡単に想像できる。
別に最強である必要なんてないし、そんな程度のアイテムの所持を自慢したってウザイだけで無意味だとギルド管理をしていたら痛いほどわかるものだ。

だけど、ネットゲームではそういうことを喜びにしている奴もいるし、そんなプレイヤーがいるから運営会社が儲かっているとも言える。
「もしも、その仮初の強さが正しいんだと突き進み、内面の成長を蔑ろにしていたら……それは虚飾の強さと言って間違いないだろ？」
とはいえ、もしも虚飾だとしたら錬が一番該当するのか？
むしろ樹こそ該当するだろう。
「カースシリーズの発動条件自体が謎だから一概に言えないし、俺もどの罪かはわからないが……平気で犯している罪はかなりある」
「ふむ……イワタニ殿が犯している罪のうち出現しないのがその説の反証であり、特定を困難にさせているということか」
そうだな……単に悪人に作動するなら俺が犯した罪は多い。
にもかかわらず発動したのは憤怒だけだ。
もしも行動パターンで発動するなら強欲が一番怖い。俺は自分でもわかるが強欲だからな。
憤怒は最近、抑え方もわかってきているし、助けてくれる仲間がいるから怖くはない。
心が砕かれそうなほどの感情爆発が条件ではないのか？
何か……それこそ発動する条件の特定を考えないと俺も危ない。
だけど強欲って、金銭欲とかだろ？
真後ろにある宝を思えば欲望の塊みたいな気がしてきた。
後は際限のない欲望だったたか。
だが、俺は侵食されない。だとすれば理由があるはず。
とりあえず錬が汚染されていそうなカースシリーズは暴食、強欲、傲慢、虚飾、辺りか。
ある程度絞れているから、ここから考えを導けるかもしれない。
あんまり暴走状態を維持されるのも危ない気がする。
カースシリーズには代償を支払わせるスキルがある。
どうにかして使われる前に抑える方法はないものか。

「……？」
「ラフ？」
ラフタリアとラフちゃんが俺の後方、盗賊のアジトの入り口の方を見て何度も瞬きしている。
「どうした？」
「いえ……なんか、隠れているように見えまして」
ラフタリアとラフちゃんは幻覚の魔法が使えるからか隠蔽スキルや魔法に関して耐性があるみたいなんだよな。
現にさっきもラフちゃんが錬を見つけたしな。
最近だと強くなった影響か監視のために隠れている影とかも発見するそうだし。
「何かいるのか？」
「よくわかりません。巧妙に隠れているようでしたし……私達が気付いた時にはもう逃げられてしまいました」
「錬か？　ますます厄介だぞ」
「剣の勇者でしたらわかると思います。たぶん、別人だと思うのですが……」
俺達がアジトを潰したのを隠れて見ていたということか？
更に逃げられたとしたら手に負えん。
「イワタニ殿、一応、国に報告するのが最良だと思う」
「報告して逃走妨害のために儀式魔法を唱えてもらうか？」
「うむ」
妥当な戦略だとは思う。
ポータルスキルで逃げられたら元も子もない。
今は逃げられたが、どこかで発見したら逃げられる前にポータルを封じないといけない。
本当、倒すだけなら楽なのに生け捕りとなるとこんなにも面倒なんだな。
というところで、ふとゼルトブルでの出来事を思い出した。
「セイン」
マーダーピエロことセインを呼び寄せる。
俺のことを見張っているわけだし、呼べば来るか？

瞬く間に俺の目の前にセインが現れる。

「なに？　――」

相変わらず会話の成立が難しい相手ではあるが、こっちの言葉はある程度聞こえてるみたいだからいいか。問題はあんまり頼りにしたくなかったという点なんだがな。

「と、突然現れた⁉」

そういやエクレールに説明してなかったな。

「俺がポータルで移動していきなり現れることもあるだろ。いちいち驚くなって。コイツもまあ……俺専用の影だと思ってくれればいい」

異世界の勇者云々を説明するのも面倒なので、このままでいいか。

「敵ではないみたいですから、警戒しないで大丈夫ですよ」

ラフタリアがどういった人物なのかエクレールに説明している。

まあ、信用が置けるかどうかは別だが、俺を守ろうとしてくれているのは事実なんだよな。

だから頼りにしていいかもしれん。

ん？　セインの周りにぬいぐるみが二匹浮かんでいる。

一匹はラフちゃんそっくりの等身大ぬいぐるみだ。

もう一匹は獣人形態のサディナを模したぬいぐるみに見える。

俺がぬいぐるみを見ているとセインがコレ？　とばかりに指差してる。

「それだ。後でラフちゃんの方を譲ってくれ」

「何をねだっているんですか！」

「ラフー」

ラフタリアに思い切り突っ込まれてしまったぞ。

いいじゃないか。寝る時に枕元にあれば癒されそうだし。

「私はセ――様の使い魔――。よろしくお願いします」

と、ラフちゃんのぬいぐるみがお辞儀をする。

……ないわー。

ラフちゃんはラフーと鳴くから可愛いんだよ。

「却下。お前はラフちゃんの可愛さを理解していない。人語を喋るラフちゃんはラフちゃんにあらず。別のデザインにしろ」

「うん。じゃあ喋らないように――する」

隣の奴もよりによってサディナだしな。

セインが何か弄るとラフちゃんのぬいぐるみが動かなくなる。

「なんでセインさんの作ったぬいぐるみ……使い魔の談義になっているんですか！」

そういえばそうだな。話を戻そう。

「お前、相手のスキルを妨害するスキルを持っていたよな」

「うん。スキル――ルを使えば封じられる」

「どうせ俺を監視していたんだから何をさせたいのかわかるよな？」

俺の問いにセインはコクリと頷いた。

「逃げる――を捕まえればいいの？」

「そうだ。頼めるか？」

セインは任せろとばかりに全力で頷く。

「殺すなよ？　呪いの武器を持っていても俺達の比じゃないくらい弱いと思うから」

「……そんなに弱――の？」

セインの問いに俺は視線を外しながら頷く。

「なんか悲しくなってきますね……」

「言うなって……」

不意打ちの必殺スキルを放っても俺に耐えられてしまったわけだし、アイアンメイデンクラスの攻撃でも呪いの影響で痛かった程度なんだよな。

グラスが俺達と戦った時の気持ちがわかる。

弱いという事実は変わらない。

死なせないよう、逃げられないように生け捕りにしないといけないのが面倒なだけなんだ。

これでどこかの育成ＲＰＧみたいに弱らせた後、ボールを投げて生け捕りにできたら苦労しないんだけどな。

「じゃあ——て来る？」

「ああ、頼む。不意打ちが好きだから一人で歩いていたら襲ってくると思うぞ。大丈夫か？」

「うん」

と、セインは盗賊のアジトから軽快に出ていく……と思ったらすぐに戻ってきた。

「どうした？」

「あれ——！」

で、切迫したセインが指差す方向を見る。

「なんでお前が生きているんだ⁉」

そう、セインがぶち殺した男が平然と仲間を連れてやってきていたのだ。

十六話　異世界侵略のメリット

幽霊か何かか？　いや、見た感じだと生きている。

セインと戦った時に死んだのは身代わりとかだったのか？　魔法で分身を生み出したとか。

それだと激しく面倒臭い。

「お前は盾の勇者！　イヒヒ、あの時殺された恨み、晴らしてくれる！」

「へー……四聖っぽい奴がこの辺りにいると聞いたが、当たりか」

仲間の方は若干長身の鎖鎌っぽい武器を持った大柄な男だ。

小柄な奴と合わせてデコボココンビって感じに見える。

台詞から察するにどうやら錬を殺すために盗賊のアジトを探していたところを、偶然俺達にばったり遭遇してしまったというところか。

というか、返り討ちにあったくせに恨みも糞もねぇだろ！

「尚文様！」

アトラが緊迫した表情で叫ぶ。

「敵か⁉」

フォウルも場の空気に合わせて臨戦態勢に入るが、アトラがフォウルを遮るように手を伸ばして下がらせようとしている。

「お兄様、ダメです。実力に大きな差があります！　今の私達が敵う相手ではありません！」

「だ、だが——」

「前に出れば尚文様達の足を引っ張ってしまいます」

おお、アトラは目が見えないから別の部分が本当に敏感なようだな。

正直に言えば俺ですらも苦戦するであろう敵だ。

そんな状況でアトラ達が前に出たら足を引っ張られかねない。

「お兄様と私は捕まえた盗賊達に被害が及ばないよう、距離を取るのが最善策だと思いますわ」

「よくわかってるな。そうだ、下がっていろ。俺達がコイツ等の相手をする」

「はい！」

「ラフー！」

ラフタリアが刀を抜き、ラフちゃんが俺の肩に乗る。

「イワタニ殿が話していた敵か⁉」

「ふぇええ……」

エクレールとリーシアもいつでも戦えるように構える。

「目的の相手じゃねえけど、イヒヒ、その程度の人員ならやれるか」

今、俺の周りにいるのはラフタリア、フィーロ、ラフちゃん、エクレールにリーシア、そしてセイン。

アトラとフォウルが状況を察して下がってくれたのは素直にありがたい。

俺の負担が少しでも減るからな。

対して敵は二人……俺達の方が戦力は多い。

だが、敵は妙に高威力の魔法を使いこなしていた。

ラフタリアに後れを取らない動き……それでありながら、今度は二人か……。

俺とラフタリアが前に出て戦ってどうにかできるといいんだがな。

「お前等の目的は四聖殺しか？」

「イヒヒ、まあな」

「それはお前等の世界での伝承とかに関わっている……とかか？」

話が通じるのなら戦闘を回避できるかもしれない。

絆のように世界同士の戦いを望まず、不干渉の同盟を組むことができる……か？

「あー……なるほど、その程度の認識はしてるわけか」

「こいつ──話は通じない！」

セインがハサミを大きく振りかぶって身長の高い方に斬りかかる。

「ふん！」

背が高い方の敵がセインのハサミを受け止め、殴りかかるかのように思い切り鎖鎌を振るう。

セインは大きく後方に下がって避けるのだが、投擲された鎖鎌がハサミに絡みついた。

「悪いけど、この世界の四聖に死んでもらうのは決定事項だから」

「……世界の延命のためか？」

絆の世界のグラスは伝承を信じて俺達を殺そうとしていた。

きっと、コイツ等の目的もそうなのだろうと分析する。

何が答えかわからないが、こういう相手には一応は説得しておくべきだろう。

最悪、情報を聞き出すことくらいはできるはずだ。

「延命？　俺達の世界が生き残るのは当たり前だろ？　お前等知らないのか？」

さも当然とばかりに目を輝かせて、小柄な方の奴が自信満々に答える。

「イヒヒヒ、まあ、どうせお前等は波が起こるまでに殺されるだろうから教えてやるよ。他世界を滅ぼすとすげー経験値が入って、いろんな技能が習得できるんだぜ？　俺の所の眷属器様はボーナスって言ってたな」

……クソみたいな理由だな。そんな理由で世界を滅ぼされてたまるか。

だが、気になる話だな。

「そのボーナスで死んでも大丈夫になってるのか？」

「イヒヒヒ、当たり前だろ！」

「無駄話はそれくらいにしておけ。どうせコイツ等は仲良しごっこをする気だろ？」

「そうだろうな。四聖ってこういうのいるよな。イヒヒ」

そうでもないがな。

などと考えていると、二人組は自信に満ちた表情で言い放つ。

「最強の世界は俺達の世界だ！」

「な、なに？　最強の世界？　何を言っているのだ？」

エクレールが困惑したように答える。

それはラフタリア、リーシアも同じだった。

だが、コイツ等の言葉から、故意に他世界を滅ぼして回る連中がいるということがわかった。

他世界を滅ぼすと膨大なボーナスがある。

で、コイツ等は四聖でも眷属器持ちでもない。

……よく考えてみればエクレール達と会話が成立しているのは、その技能のお陰かもしれない。

そしてセインの気迫に満ちた表情から察するに、セインの世界はコイツ等に滅ぼされたと見ていいな。

だとしたら、和解はありえない。

一度人を殺した奴の抵抗感が薄まるように、世界を滅ぼした奴はまた同じことをする。

で、その報酬として死に戻りとかができるようになるとか、完全にネットゲームみたいな環境だ。

こっちは死んだら蘇生できずに相手は殺しても蘇るとか無理ゲー状態だぞ！

いくらでもゾンビアタック、死んでも大丈夫で襲撃されたらどうにもならん！

ゲーム知識や経験からの傾向と対策ってわけじゃないが、どこかにセーブポイント的な施設があってそれを破壊するまでゾンビアタックをしてくるとかだろうな。

キョウよりも厄介な敵であるのは確実だ。

……つーか、絆の世界でキョウや他の眷属器持ち、その他天才がやろうとしていたのはこれだろ。

他世界を滅ぼすとそんな技能が習得できるのか……いいな。

道徳的じゃないし、やりたくないがこれからのことを考えたら視野に入れるべきかもしれない。

波が鎮まるまでという条件でだけど。

「……」

セインが俺を凝視してる。

ま、そんなことのために自分の世界を滅ぼされたからこそ、セインは漂流しているんだ。こういう奴が生まれるようなことが良いはずがない、と絆なら言うだろうし、俺も同意だな。

「イヒヒヒ、いくぜ！」

シャムシールを取りだした小柄な奴が素早く俺の懐へと入りこむ。

「死ね！」

俺の喉元目掛けてシャムシールで突いてくる。

が、その間にラフタリアの刀が入り込み、エクレールの小剣が小柄な奴に向けて突き出される。

「おっと！」

紙一重で避けた小柄な奴が、手で印を結ぶ。

俺は咄嗟に手を思い切り掴んで邪魔をしたが、小柄な奴は魔法を即座に発生させる。

「爆裂弾！」

小柄な男を中心に爆発が巻き起こる。

どうやら術者は傷を負わないとかそういう便利な効果がありそうな魔法だな。

「キャアアアア！」

「くううう……」

爆風が巻き起こり、ドシンと衝撃が俺に襲いかかる。

後ろにいたラフタリアとエクレールが数メートル後方に飛ぶ。

幸い、受け身は取れたがダメージが深い。

僅かな戦闘時間であるが、相手がかなりの使い手であるのが手に取るようにわかる。

「とー！」

「てい！　衝突！」

一方でフィーロとリーシアがセインと一緒に大柄な男の方に相対していた。

相手が大柄だからかフィーロはフィロリアルクイーンの姿だ。

「はいくいっくー！」

フィーロが加速して素早く蹴り飛ばそうとする。

よし！　援護魔法を掛けてやる。

「ツヴァイト・オーラ！」

俺が手をかざしてフィーロのステータスを上昇させる。

するとフィーロの速度が大きく上がった。

「ラフー！」

更にラフちゃんが援護とばかりに幻覚魔法を展開、フィーロが複数に分裂して見える。

どれかが実体だが、特定できるかな？

「む？　おい！」

大柄な男が小柄な男に声を掛ける。

「援護魔法を無効化しろ！」

「イヒヒ……コイツ等無効化するとパワーアップするんだよ」

最初に戦った時にラフタリアに掛けた援護魔法を無効化しようとして、呪いまで一緒に無効化されて追い詰められた時のことを言っているようだ。

「ほう……そんな能力を持っているのか。面白い！　じゃあこれでどうだ！」

フィーロの蹴りが命中する直前、まるで水の波紋のように何か防壁のようなものにぶつかってフィーロの蹴りは遮られる。

「な、なに？　ごしゅじんさまのとも違う……海を蹴った時みたい」

「攻撃が……手ごたえがあったはずなのに、なんですかこれぇ！」

フィーロとリーシアがそれぞれ声を上げる。

なんだあの防御方法は⁉

セインも使い魔と一緒に攻撃しようとしているが無効化されてしまっている。

あの使い魔ってコロシアムで不気味な人形だった奴のデザイン変更だったのか？

ファンシーな変化をしてるな。
ラフちゃんとよく似たモーションで尻尾で叩いたり、引っ掻いたりしようとしているが失敗してる。
サディナのぬいぐるみは空中を泳いで突進を繰り返すタイプみたいだ。
「何に遮られたのか知らないのも可哀想だ。これはアブソリュートシールド。お前達の攻撃は吸収させてもらった」
「え!?」
くそ、なんか便利な力を色々と持っている連中みたいだな。
攻撃吸収系の防御壁で身を守っているのかよ。
「なによそ見してんだよ!」
小柄な男がフィーロの特技、スパイラルストライクのようにシャムシールを持って回転しながら突撃してくる。
くそ……地味に厄介だな!
思い切り掴んでやるのだが、ガリガリと俺の防御を突破しようとしてくる。
「イヒ! なんだかんだ言って防御系の四聖か。かてーな!」
「今度はこっちの番だ」
俺が今、装備しているのは相変わらず魔竜の盾だ。
攻撃を受けたのならばカウンター効果である魔弾が飛び出して相手に襲いかかる。
接触回数が多いからか、その分、相手に向かって飛んでいく。
バリバリと盾から魔弾が飛んでいって、俺が受け止めている小柄な奴に命中する。
「いていていて! くっそ! 多段攻撃は不利ってか?」
俺が捕まえるよりも早く小柄な男は笑うのをやめて距離を取る。
「逃がしません! はぁ!」
ラフタリアが袈裟掛けの要領で刀を振りかぶる。
「イヒ……またお前。地味に厄介」
「私を忘れてもらっては困る!」
エクレールの鋭い突きが小柄な男の頬を掠める。

「弱くはあるが技術はあるって感じか……侮れないな。盾の勇者は地味に堅いし。やるにはアイツを呼ぶべきか?」
「イヒヒ、対防御系勇者用の力を持った奴を連れてきた方がいいだろう」
「隙あり!」
エクレールがその隙を衝いて……なんだ? 今までよりも遥かに高威力の突きを小柄な男にドスンとぶつける。
「おー! やるじゃねえか」
肩に思い切り突き刺さり、小柄な男は痛みで顔を歪ませる……はずだったのだが、突いた部分がぼやっと陽炎のようにぶれて小柄な男は横に逸れる。
死に戻りができる体の応用か?
厄介極まりない。
「とー!」
フィーロの渾身の蹴りが大柄な男の顔面に命中する。
「ふむ、腕は悪くない。だが勝つのは俺だ」
反撃とばかりに鎖鎌を振りまわし、フィーロが本能でその鎖を避ける。
「じゃらじゃらー!」
そして、羽の中に隠し持っていたモーニングスターを投擲した。
あれはゼルトブルで手に入れた命中すると火柱が上がるフィーロの玩具!?
どこに隠し持ってんだ! 危ねぇだろ!
最近見かけないからなくしたのかと思ったら羽の中に隠していたのか。
とはいえ、奇策なのも事実だ。実際、パインと水が大きくうねって弾けている。
「てえい!」
「行きます!」
そこに入りこむようにフィーロの鋭い蹴りとリーシアの投げナイフが命中した。
「シールドを突破したのか。思ったよりはやる。久々に楽しめそうだぞ」
「だな。弱そうだと言ったのは訂正してやる」

何だろうか？　痛みもなく、ゲームのような感覚で俺達に挑んでいる……とも違う。
実際に殺し合いなのを自覚していてなお、相手に余裕があるような。
戦いを楽しみ、自分達が勝つことを確信しているようなそんな様子が感じられる。
「イヒヒヒ……ま、このままじゃじり貧だな。本気でやるには人手が足りないみたいだ」
「逃がさない――」
「また殺されたらたまったもんじゃねえな」
セインが糸玉から糸を射出して追撃しているが、小柄な男がまたも魔法を唱える。
「さて、じゃあ俺も……全員に援護魔法を掛けるとしよう」
じり貧であるのは事実。だが、攻撃が通じないわけじゃない。
それにラフタリアはこの中で一番攻撃力が高い。
一番強いスキルをアタックサポートと併用してぶちかませば仕留められるかもしれない。
「ツヴァイト・オーラ！」
ラフタリアに援護魔法を掛ける。何度も唱えられるように意識を集中しよう。
相手もこちらを分析してきている。
実力を完全に測られる前に仕留めないと不利だな。
そもそも交渉が不可能で、強くなるために四聖を殺そうとしている世界が存在する。
この事実は間違いなさそうだ。
「ラフタリア、わかってるな？　アタックサポートをやる」
「はい」
ラフタリアが大きく頷いて刀を鞘に収める。
速度を上げて、強力なスキルを叩きこむためだ。
「フィーロ、リーシア。分散させて悪いが、俺が指示をしたらどっちかに一番強い攻撃を加えろ。エクレールはラフタリアに続け、セインは、わかるな？」
「はーい」
「わかりましたぁ」

「了解した」
「――ん」
これだけの人員で戦力を分散させる必要はない。
相手は厄介な能力を所持しているが攻撃が通じないわけじゃないんだ。
どうやら痛みに鈍感なのか、グラスのような種族なのかはわからないが、煙のような特徴を持っているみたいだしな。
よくもまあセインはコイツを殺せたものだ。
どこが急所かわからないが、仕留めた方がよさそうだ。
殺すというのに若干の抵抗があるが、相手も俺達を殺そうとしているんだ。
ここで引くわけにはいかない。
「イヒヒ、次こそ殺してやる。盾の勇者！」
小柄な男は大柄な男の隣に跳躍してまたも魔法を唱える。
「させません！」
「喰らえ！」
俺が投げつけたアタックサポートが大柄な男を守っていた水の波紋のような障壁にぶつかる。
「じゃらじゃらー！」
「はぁ！」
いつのまにかモーニングスターを拾い直していたフィーロとリーシアの投擲が波紋を貫く。
「瞬刀・霞一文字！」
ズバッとラフタリアの刀がその隙間に入り込んで小柄な男に命中……する前に大柄な男が庇う。
大柄な男の腕から鮮血が散る。
「鋭い切れ味……アレは眷属器だな！」
「イヒヒ、みたいだな。勇者パーティーだけあって連携はあるが――」
「逃がさん！　フォークロス！」
エクレールが光り輝く小剣で斬りつける。

再生しようとしていた波紋の壁を貫いて更に敵二人に命中！
が、避けられないと判断したのか二人とも防御の構えを取ってダメージを抑え込んでいた。
くそ……厄介な。
「じゃあな！　転位――」
「させ――ない！」
というところで、セインのスキルシール……糸玉から糸が伸びて二人の体に巻き付く。
「ち、妨害をしているぜ？」
「この程度の糸、引き千切れ」
「わかってるって」
セインが俺に視線を向ける。
逃げる相手を仕留めろってことだな。
「アタックサポート！」
二度目の投擲。後は誰が攻撃してもいい！
よし！　アタックサポートは大柄な男に命中した！
「はぁ！」
ラフタリアが二刀流で斬りつける。
「三連突！」
一瞬で三つの突きを放つスキルを両方の手で器用に放つ。つまり六つの風穴を作り出す。
上手くいけばな。
「ふん！」
大柄な男が鎖鎌を意のままに操って十字を組んで防御の構えを取った。
ガキンと火花が散って、ラフタリアの攻撃は往なされてしまう。
「おらよ！」
ぷつんとセインが張った糸が切られる。
「イヒ、ちょーっと焦ったな。転位光！」

と、言うと共に二人は一瞬で姿を消してしまった。
「ちっ！　逃げられた！」
くそ！……後味悪いな！
こんな所で遭遇するのもどうかと思うが！
「何なのだ？　あの者達は」
「セインの話と奴等との問答から察するに、異世界からの刺客だな。しかも悪意を持ってこの世界を滅ぼそうとしている」
世界を滅ぼすことによって恩恵がある……グラス達はまだ実現していなかったから知らなかったのだろう。
滅ぼすと死に戻りとかができるようになるとか……どれだけ世界同士の戦いを強要するんだよ。
「波とは異なる世界同士の衝突現象だ。つまり異世界の勇者同士で殺し合いができる。そこで一番強いことを証明したいんだろ」
すごくくだらない理由だ。
しかも眷属器でも四聖の勇者でもないということは俺の仲間……フィーロやリーシアのような連中が乗り込んできて戦ったってことになる。
アレだけ強い奴等を引き連れている親玉……四聖は異世界に侵略できないから眷属器持ちだろうが、そんな奴等が来たらどうなる？
俺達が殺されかねないほどの強さを持っているのは間違いない。
「とにかく、あんな連中が闊歩している状況で鍊を野放しにはできない。どうにかして保護すべきだ」
俺はみんなの手当てをしながら言う。
「波とはどういうものかを私も聞いたが、あのような敵が存在するのか……」
「理解しがたいがな。しかも殺しても蘇るっぽいんだ」
「ふざけてはいるが、化け物のような強さを持っている。そんな化け物が不死身ときた。イワタニ殿、これは素早く対策を講じるべきだ。どのように蘇っているかを突き止めるんだ」
「わかっている。だが、それよりもまず勇者共だ」
「そうです。いち早く三人の四聖勇者を保護しないといけません」

ラフタリアの意見に俺も同意だ。
「すごく強かったよ。だけど、相手もまだＬｖ上がってないとフィーロは思う」
確かに、そうかもしれない。
経験から察するに異世界に渡ってＬｖ上げをしている最中に俺達に挑んだように感じる。
早めに炙り出し、死に戻りのプロセスを解析して仕留めるか、勇者共を保護するのが先か……悩みどころだな。
時間を掛ければ掛けるほど不利になりそうではある。
俺とラフタリアとフィーロは呪いでステータスが低下中で、完治はまだ遠い……。
セインはそこまで強くないし、エクレールは変幻無双流を習得したが未知数。
リーシアは発展途上で、Ｌｖ１００にさせてみないとわからないが期待値は高い。
敵の死に戻りの方法を分析して確実に死ぬようにする方法がわかったとしても、それができるかは不明だ。
どっちにしても勇者の保護が先決だな。
俺の代わりに強くなってもらえば不安はある程度拭えるし、招集している七星勇者と話ができれば安泰だ。
「尚文様」
「ああ、アトラか」
アトラがもう安全と判断して近づいてきた。
「私……自らの弱さを痛感しましたわ。もっと強くなりたいです」
「アトラがそんな真似をしなくてもいいんだ！　俺がやる！」
「お兄様、もっと現実を見てください」
そこでアトラはフォウルを詰問するように眉を寄せて注意した。
「尚文様と共に戦うには私達はあまりにも貧弱なのですわ。私が出なくてもとおっしゃいますが、今のお兄様では尚文様の足手纏い……もっと強くなることを視野に入れるべきですわ」
「あ、アトラ……!?　く……もっと、俺は強くならないといけないのか！」
アトラの言葉にフォウルがやる気を見せる。
ハクコ種は亜人の中でも上位種で、かなり強くなる。
これからのことを考えれば早く成長してほしいのは事実だな。

「イワタニ殿、私も力になれるように努力する。あのような者に私達の世界を滅ぼされてたまるものか！」
「ああ、そうだな。とりあえず当面の課題として早く錬の保護をすべきだな。セイン、当初の予定通り錬を——」
と、指示を出そうとした時だった。
何かがバシィッと通り過ぎるのを感じる。
まったく……こう立て続けに問題が起こるとウンザリする。

十七話　テンプテーション

「今度は一体なんだ！」
さっきの奴等が戻ってきたのか？　それとも錬か？
「う……な、なんですか？」
ラフタリアは頭に手を当ててブンブンと振って辺りを見渡している。
「ん！？　何かお腹の下が変な感じがする！！」
フィーロも察したか。
「う……」
何か衝撃のようなものが通り過ぎたが、特にダメージはないな。
しかし、おかしな反応をしている奴等がいる。
「アトラー！」
「尚文様ー！　お兄様、放してください！　放して！」
「アトラアトラアトラー！」
「ふぇえええええ……!?」
「よ、よくわからんが……く、なんだこれは」
振り返るとみんな何かしらの違和感を持ったようだ。
えっと、ハクコ兄妹は無視しておこう。

フォウルを助けても面倒だし、アトラを助けても面倒そうだ。
俺は……よくわからん。
リーシアとエクレールは症状が軽そうだな。何かもぞもぞとしているけど。
何が起こったのか。対処するにしても判断材料が足りないぞ。
「ごしゅじんさま……はぁはぁ」
フィーロがなんか……血走った目で俺を見ているような気がするのだが……逃げるべきか？
フィーロやフォウル達の反応を見るに、状態異常のようなものを受けている？
「ラフー！」
ラフちゃんがフィーロの頬を殴打する。するとフィーロは瞬きをして普段の態度に戻った。
「あれ？　どうしたの？」
「ラフ！」
で、ラフちゃんはフィーロの頭に乗っかって何かしている。
きっと何かしらの防壁でも築いているのだろう。
ラフちゃんは結構便利な技能を持っているからな。
「あそこ――」
セインが指差す。
「何があった？」
「目で確かめた方がいい」
すると、その方向で土煙が上がっていた。
「イワタニ殿！」
「ナオフミ様！」
「そうだな。何が起こっているかわからないが見に行くべきだ」
一体何が起こっているのかわからないが、それを確かめるために俺達は走り出した。
「お兄様！　放して！」
「アトラー！」

えっと……うん。コイツ等は置いていこう。Ｌｖ的にも危ないしな。
あの敵兵は勇者殺しが目的だろうから俺の近くにいない方が安全だろう。
「てりゃあああ！　とう、ですぞ！　弱い！　弱すぎますぞ！」
「く……くそ！」
俺達が到着するとそこには――
「元康!?」
「あ、お義父さん！　俺はがんばりますぞー！」
なんか言葉使いが更におかしくなっている元康が、錬と鍔迫り合いをしながら俺に手を振ってアピールしている。
うざい。何がお義父さんだ。戦闘中に手を振るな。
「な、何をしている？」
「お義父さんは錬を生け捕りにしたいと仰っていたので、俺が誘き出して逃げられないようにしたのですぞ！」
「ナオフミ様！　もしかしてさっき盗賊のアジトで隠れていたのは槍の勇者だったんじゃ……」
「おそらくそうだろうな」
俺達の問答を聞いて先行し、勝手に行動していたということか！
で、すれ違いに俺達の元に敵が現れたということだな。
というか、元康、お前も捕縛対象だろうが！
なんか頭が痛くなってきた。
「転移剣！」
あ、錬が俺達に気付いて逃げようとしてやがる！
「……」
俺達と錬の間に沈黙が漂う。
が、錬のスキルは不発に終わったのか、何も起こらない。
もしかしてさっき通り過ぎた怪しげなアレが妨害しているのか？
「はっはっは！　俺のテンプテーションの力でお前はもう逃げられませんぞ！」

やはり元康の所為か。

しかし……元康の槍も何か黒いモザイクが掛かって見える。……俺の目がおかしいのだろうか？

スキル名と……さっきのフォウルの反応から察するに……魅了状態にさせるフィールドを生成するとかか？

元康らしいな。

あれ？　なんだ？

元康が輪を掛けて美形に見える。

その周りではラメが入ったみたいにピカピカと光が走り、背景がピンク色に染まっていた。

ヤダ……凄いイケメン……ここまでの美形なら俺も掘られていい……。

「……わけねえだろ！」

頭をブンブン振って意識を保つ。

危なかった。取り返しのつかないことになるところだった。

とんでもなく強力な状態異常を発生させるフィールドだぞ。

「大丈夫か!?」

「は、はい」

ラフタリアには特に影響はないようだ。

まあ、幻覚とかの類には耐性が高いみたいだから魅了もブロックできているというところか。

ラフタリアが元康に魅了されたらたとえ状態異常でも俺はへこむぞ。

良かった、ラフタリアが幻覚耐性を持っていて。

人を騙す狸という意味でラクーン種万歳。

「う、うむ」

エクレールは反応がちょっと気になる。大丈夫だと思いたい。

「わ、私にはイツキ様がいるのでダメですぅ」

リーシアは若干微妙な反応だ。魅了スキルの効果で樹と元康を天秤に掛けているんだろうか。

「フィーロも大丈夫！」

「ラフー！」

フィーロ、お前はラフちゃんが肩に乗っているからだろ。

さっき俺に向かって何かしようとしてただろうが。

セインは……。

「大丈夫——」

問題はなさそうだ。

状態異常を引き起こすフィールドだけど、元康が作ってくれた好機を逃すのもアレだな。

「あー……とりあえず、錬。鬼ごっこは終わりのようだぞ」

どう反応したらいいかわからないが、錬が逃げられないようになっているなら丁度良いか。

元康も俺達のために行動しているなら大目に見てやろう。

「フィーロたーん！」

「やー！」

あ、フィーロは元康を見てじりじりと下がりながら逃げ出した。

「こら、フィーロ。どこに行くんですか！」

「ラフゥウウウ——」

「あ、ラフちゃんは置いてけー！」

ラフちゃんを乗せたまま……。

なんだろうか。どんどんメンバーが抜けていく。

今、俺の傍にいるのはラフタリア、エクレール、リーシア、セインか……。

この面子で錬と元康を同時に生け捕り……できるか？

「年貢の納め時ですぞ！　錬」

「年貢？　それは俺の言葉だ」

勝手に問答が始まっている。

まあ、元康も一応俺達に協力してくれているのだから、錬を捕まえるハードルは十分に下がっているか？　錬は相変わらず現実逃避をしているみたいだけどさ。

「群れなきゃ何もできない奴が俺に向かってくるとはな」

「どうとでも言え、このぼっち野郎。この前のことを忘れたわけじゃないぞ」
イラッときたので錬に嫌味を返してやる。
「一対多数で勝負を挑もうなんて卑怯者に、俺は負けない！」
「攻撃能力のない相手に対する隠蔽スキルからの必殺攻撃は卑怯じゃないのか？」
「察知できないのが悪い」
「ぬかせ、俺は察知したぞ。ぼっちのお前に足りない、仲間のお陰でな」
やはり錬は俺ルール全開だ。
言動も何やらおかしいし、深層意識でも表面に出ているんだろうか。
まるで、というかまんまネットゲームに出没する最強厨みたいだ。
正直、使える手駒が少ないのがお前の敗因だと言ってやりたいが、聞く相手じゃないしな。
「いくぞ！」
「話を聞け――」
俺が注意するよりも先に錬は元康を突き飛ばして駆け出してくる。
「あ、待つのですぞ！」
とりあえず受け止めるか。それからラフタリアやエクレールに攻撃を命じよう。
俺の意図を察したのかラフタリアとエクレールが下がる。
セインも俺を盾にしているな。
リーシアは……オロオロするなよ。戦えるように準備しろ！
不安ではあるが、とりあえず上手く連携は取れそうだ。
そして錬は俺に向かって剣を――ではなく目標をリーシアに変えて走ってきた。
おい……今の錬はやっぱり何か変だ。
一貫性がないというか、方向性に欠ける。
「ふぇ⁉」
突然の攻撃方向の変更にリーシアが声を上げる。
コイツ、この場で見る限り一番弱そうな人物を狙って攻撃するとか……。

弱い奴から狙うのは戦略の基本だけど、正々堂々はどこにいったんだよ。
それにな、お前は大きく間違っている。
今のリーシアは……。
「でりゃあああああああああ！」
錬が掛け声と共にリーシアに向けて剣を振りかぶった。
「ふぇえええええええええええ！」
だが、リーシアは咄嗟に屈みこむかのように体勢を変えたかと思うと、ロープ付き投げナイフを近くの木に投げつけて、スーッと高速で距離を取る。
その距離を取る動作のついでに錬に向かって四本ほど、鉄の串みたいなものを投げつけた。
「ビックリしました」
「むしろ俺の方がビックリだよ」
なにその早業回避。ほとんど一瞬だったぞ。
コイツだけ別の世界で戦っているんじゃないか？
いや、見えたから防御できないほどではなかったが。
「リーシアさん、本当に凄いです」
だよな。これだけあざやかな動きをされたらラフタリアでもそう思うよな。
そもそもあの鉄串をどこに持っていたんだ？　変幻無双流の隠し武器か何かなんだろうか。
「く……」
刺さりはしなかったが、思い通りにいかず錬が煩わしそうに声を漏らす。
「俺を忘れてもらっては困りますぞ！」
「できれば忘れていたいがな」
なんか元康のペースに乗せられたくない。
できれば下がっていてほしい。
というか錬が逃げられない状態の今のうちに、色々と聞いておきたいことがある。
錬の背後にいる奴に関してだ。

元康のことじゃねえぞ。
「おい。ヴィッチは来ないのか？」
「……」
俺の問いに錬は顔を歪め、剣から溢れだす禍々しい力が高まった。
「失言だったようだぞ、イワタニ殿」
む……下手に問い詰めるのは逆効果か。となると聞き出すのは難しい。
せめてアイツの居場所を聞いておきたかったんだがな。
「とりあえず錬、俺はお前の敵じゃない。あのクソ女の下で盗賊の親玉なんてしていても何も――」
「たあああああああああああ！」
俺が言い終わるよりも前に錬は激昂し、剣を高く振りかぶって襲いかかってくる。
「勇者を僭称する悪魔め。俺が成敗してくれる！」
現実が見えていないんじゃないか？　追い込まれているのはお前だ！
「目覚めろ！　俺の力よ！　俺は、戦いの中で強くなる！」
いってぇ！　めっちゃ痛い！　背筋に悪寒が走ったぞ。
中二病も大概にしろ！
「殺りますぞ！」
「殺すな！」
元康が錬にトドメを刺そうと槍を振りかぶるのを止める。
ガキンと錬の剣が俺の盾にぶつかる。
ふむ……やはりそこまで攻撃力は高くないな。
多分、素手でも錬の剣を握ることができる程度だろう。
どうする？　実力の違いを理解すれば降参してくれるだろうか？
「俺は、誰よりも強くなる。そう……俺の欲望に限りはない……俺はここで更なる強さに目覚め、お前を倒す……俺の欲望に限界はない！　欲望を糧に最強になるんだ。力に覚醒し、勝利し、装備を整え、金を集め、力を高め、全ての世界で俺は最強になり、全ての世界は俺を求める！」

……頭、大丈夫か？　コイツ。
同じことを何回言うんだ。欲望欲望うるさい。
力に覚醒？　既に剣の勇者に覚醒しているんじゃ……。
呪いに侵食されるとあそこまでおかしくなるのか？
もはやただの痛い奴でしかないぞ。
さっき戦った連中の所為で全ての世界で最強を求めることに対して嫌悪感が湧くな。
……なんとなく、錬がなんのカースに侵されているのかわかった。
――強欲。
でもなぜだろう。凄く惨めでちっぽけな強欲に感じる。
あれを強欲と呼ぶのは厳しい。
強欲というのは、底なしの欲望だろう。
なんでもかんでも求めて欲する、限りのない欲だ。
錬の場合、強くなりたいということに集約している。
もちろんそれが欲望でないとは言わない。
だが、本当の欲に駆られた奴ってのはもっと醜いし、なんでもかんでも欲しがるもんだ。
所詮強さだけに拘った……ああ、なるほど、どうしてなのかわかった。
あえて言うなら過程が目的になっているんだろう。
欲望というのは、アレが欲しいから手に入れる。これが手に入ったけど、ソレも欲しいから手に入れる。て、感じだ。
しかし錬の場合、強くなるのが目的で、何かが欲しくて強くなりたいわけじゃない。
結果と過程が反転している。
似たような経験がある分、なおのことよくわかるな。
以前、行商をしていた頃……装備を整えるために金を稼いでいたはずが、金を稼ぐことが目的になっていたことがあった。
この程度でもカースシリーズに侵されるのか。

そしてそれは、俺の憤怒に勝てない理由にもなる。
どれだけカースの力を増やしても、その強欲では俺の憤怒に勝てないだろう。
あれは仮初の強欲なんだ。
あの武器はおそらくカースシリーズだ。これは確信している。
それなら、カースが発動するだけの理由があるはず。
俺の時は元康と決闘をしてヴィッチに邪魔されたのが切っ掛けか。
あの時点では発動しなかったが、ドラゴンゾンビとの戦いでフィーロが死んだと思った時に初めて憤怒の盾が出た。
元康もカースっぽい武器を手にしているし……いや、もしかしてカースシリーズは伝説の武器の使用者が精神的に追い詰められた時に発動する、とかか？
俺にしても元康にしても、相当やばい状態だったしな。
それこそ自殺してもおかしくないほど、精神的に追い詰められていたと思う。
だが、この世界において勇者は死んではならない。
勇者が死んだら世界が滅びるかもしれないんだからな。
自殺なんて以ての外だ。
……これは当たりかもしれないぞ。
つまりカースシリーズは勇者が精神的に問題を抱えた際に発露する防衛本能ということか。
とはいえ……仮にこれが正しいとして、何が錬をここまで追い詰めたんだ？
少なくとも最後に会った時は話ができる程度には落ちついていた。
まあ仲間が死んだのは弱かったからだ、とか言い訳していたけどさ。
「俺は世界を救う最強の勇者なんだ！」
……錬の言葉にイラッとして思考が途切れた。
くっだらないことにしか興味のない奴だな！　いい加減にしてくれ！
カースの原因とか、もうどうでもいい。こいつをなんとか黙らせたい。
「世界を救う？　なら救えよ大ボケ野郎！　こんな所で盗賊の親玉をしている奴が世界を救えるわけねえだろ！」

最強？　世界を救う？
こんな所で盗賊の親玉をして、気に食わない奴が出てきたら奇襲して、勝った負けただ？
そんなんでこの腐りきった世の中を救えるなら幾らでもしていろ！
だが、そんなことで世界は救われないし、波は終わらない。
「お前の最強談義に付き合うのはもうコリゴリだ！　こんなちっぽけな所でお山の大将を気取る奴に俺は付き合ってなんていられないんだよ！」
「まだだ！　まだ終わらない！　俺の最強を受けてみろ！」
錬の剣がもう一段変わる。
グロウアップか？
確か、憤怒の盾がラースシールドに変わったことがあった。
あれと同等の状態と見てまず間違いない。
となると錬の剣が上位の剣に変わった可能性が高いな。
「そうだ。新しい技が閃いたぞ！　羅刹・流星剣！」
それは俺と戦った時に使っただろ！
今まで使っていた技を、さも今閃いたみたいな言い方をしている。
王道マンガですら、一度使った技は通用しないんだぞ。
なんなんだ、本当に。
『その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は神の名の下による圧潰！　我が財産を糧にし、放たれる神の一撃をその身に受けよ！』
「ゴールドリベリオン！」
錬が剣を天に掲げると、どこからともなく金銀財宝が集まり、上空で人の形を成す。
禍々しい造形の、凄く趣味の悪い金で作られた像だ。
さすがに受け止めたら痛いじゃ済まなそうだが……周りにいる仲間達の中には避けられない者もいそうだ。
はぁ……こんなくだらない攻撃を俺は受け止めなきゃならないのか！
嘆きたくもなる。そもそも羅刹・流星剣はどうしたんだよ。

どう考えても別の技を使っているじゃねぇか。
段々と手段が卑劣になってきている。これも勝つための強欲だとでも言うんだろうか。
あれは……たぶん、ブラッドサクリファイスと同等のスキルなんだろうな。
おそらく代償があるはずだが……ああ、錬の装備が貧弱なのはこれが原因か？
「喰らえ！」
「お前等、下がってろよ！」
「は、はい！」
「ナオフミ様大丈夫なのですか？　今はステータスが……」
「逃げ切れないだろ……」
空でも飛べるような仲間がいれば、もしかしたら逃げられたのかもしれないがな。
絆の方の世界にいた時のようにフィーロが飛べたらなぁ……こっちの世界に帰ってくるころには俺が乗っても大丈夫そうだった。
と思いつつ、俺は降ってきた像の一撃を受け止める。
ドシンと内臓に響きそうな衝撃が全身を伝う。
くー……やっぱり呪いの影響か地味に体の芯に響くな。
「ラフタリア！」
「はい！」
刀を鞘に入れたラフタリアが居合い斬りの構えを取って、俺が受け止めた像に駆け寄る。
「瞬刀・霞一文字！」
スパンと綺麗な音を立てて、ラフタリアは刀を抜き、スタッと着地して鞘に刀を収める。
チンと音を立てると同時に一の字の剣閃が像に刻まれ、崩れ去った。
まったく……いい加減にしてほしいもんだ。
「イワタニ殿……」
「あー、いくら俺が頑丈だといっても限度があるんだからな」
エクレール達が上手く逃げ出してくれりゃあこんな攻撃、避けてやり過ごすのが相場なんだがな。

とはいえ、しょうがないとも言える。
組織的になればなるほど、即応性には欠けるからな。
もう少し、即座に動けるようにしたい。
見方を変えれば、俺達も絆達のように戦力が増えてきたと考えることもできる。
……今は錬か。
「くそ……まだだ、俺はまだ強くなる……もっと、全てを犠牲にしてでも勝たねばならないんだ！」
「いい加減にしろ！」
錬は俺を斬り殺さんと剣を振りかぶり、上段、胴当て、袈裟斬り……多種多彩な斬撃を繰り出す。
俺はその全てを逸らし、受け止め、流す。
付き合っていられない。
自分の都合のいいことを言う奴の台詞を信じて、俺を信じず、挙句こんな所で呪いの武器を振り回して強くなるとか。
霊亀の時にしろ何にしろいつまでゲームのつもりなんだ！
変幻無双流の修行は苦痛だから投げる、強化方法の共有はありえないと信じない。
もう我慢も限界だ。
四肢でも飛ばして死なないようにどこかに監禁でもしてやったほうがいいんじゃないか？
死なれると困るわけだしな。
「殺りますかな？」
「殺すなって言ってんだろ！」
元康の方は錬を殺したくてたまらない、みたいな提案ばかりしやがる。
つーか、お前はなんで味方面してんだ？
「セイン、とりあえずスキルを使えないように錬を押さえつけろ。それから全員で昏倒させて連行する。それでも暴れるようなら……」
俺がそこで言葉を中断したことで、何を伝えたいのかその場にいた全員が察したようだった。
「しょうがないかもしれませんね……」

ラフタリアも残念そうに頷く。

「いや、ちょっと待ってほしい」

そこで一人、俺の言葉に異議を唱える者がいた。

「イワタニ殿……剣の勇者と私とで一騎打ちをさせてくれまいか？」

「なんでだ？」

「前に戦った時から私は剣の勇者に対して思っていたことがある。もしかしたら剣術でならば話が通じるかもしれん」

「かなり脳みそ筋肉的なことを言っている自覚はあるのか？」

「……ああ。それに、私も少々我慢も限界なのだ。自分勝手な剣の勇者に活を入れたい。一対一の決闘をさせてくれ」

「そっちの方がまだ良い台詞だな。危ないと判断したらすぐに介入するが、いいか？」

エクレールの騎士道精神には合わないかもしれないが、戦力を……俺らしくないが、仲間を失うわけにはいかない。

世界が平和になるまで誰も犠牲を出さない、などと青いことを言うつもりはないが、少なくともこんなふざけた状況で失っていい命じゃないからな。

あと……さすがに勇者相手に、心得があるといってもエクレールじゃ不安だ。

「勇者の武器のブースト分、俺がエクレールに援護魔法を掛ける。それを承諾しなきゃ決闘は許可しない。不公平だからな」

「……それでいい。できる限り公平であるようにとの配慮、感謝する」

俺はエクレールにツヴァイト・オーラを唱える。

サディナがいれば合唱魔法の雷神降臨を掛けられるんだがな。

今はこれが限界だ。

さすがに……エクレールにサクリファイス・オーラを掛けるわけにもいかないからな。

俺の魔法を受けたエクレールは小剣を錬に向けて構えた！

しかし、またもやリーシアの方へ駆けだそうとした錬を遮るようにエクレールが立ちはだかった。

「剣の勇者、アマキ殿よ。貴方と戦うのは二度目となる」

スッと小剣の切っ先を錬に向ける。

「イワタニ殿や槍の勇者であるキタムラ殿と戦いたくば私に勝て！」

「ふん！　何者であろうと、俺に敵うはずもない！」

「あの時、うやむやにされた戦いの決着をここでつけようではないか！　剣の勇者よ。私の名前はエクレール＝セーアエット！　お前の甘ったれた根性を正すため、女王から賜った我が剣を振るおう！」

エクレールが宣言すると同時に勝負が開始される。

十八話　閃光

俺達はそのぶつかり合いの隙に距離を取って決闘を観戦する形になった。

……元康が隙あらば錬を後方から刺し殺そうとしているようにみえる。

「元康、邪魔をするな」

「わかりましたぞ！」

一応協力してくれてはいるんだが……コイツもどうにか説得しなくちゃならないようだ。

まあ俺の話を聞く分、錬よりはマシなのかもしれないが、どうにも逃げたい衝動に駆られる。

エクレールの鋭い突きが錬の肩に命中する。

刺さりはしなかったが、一本取ったな。

「ふむ、この程度なのか？　前回よりも動きが鈍いぞ」

エクレールの挑発に錬が大きく目を見開いて剣を強く握りしめる。

「オレは……負けない。オレ、は最強で、その、強さを、得るために、全てを、手ニ入レ、クラ、ウ！」

片言になった錬が、所持する剣……禍々しかった片手剣が、どす黒い大剣に変化する。

しかも、黒いオーラが先ほどよりも強く噴出している。

エクレールの奴、大丈夫なのか？

あの剣だと、俺の防御力を超えるくらいの能力上昇をしていても不思議じゃないぞ？
よくよく見ると、剣には色々と装飾が施されている。
鍔の部分は犬っぽい生き物……狐か？　他に豚っぽいものが柄にあるな。
だが……変化した時に錬の言葉がおかしくなっていたな。
全てを手に入れて「クラウ」か。
「クラウ」が「喰らう」だとすると『暴食』も覚醒してしまった可能性がある。
「オレ、は最強になる！　今、この瞬間でさえも成長し、永遠の先の単位の強さで動くように、なり、お前等を倒し、経験値を喰らってミセる！」
大剣を振り上げ、錬は駆け出す。
動きがぎこちないがかなり速くなっている。
「でりゃあああああああああ！」
錬が大剣をがむしゃらに振り回し始める。戦いの型も糞もないな。
エクレールはそれを体をのけぞらせたり、屈んだりして避け続けている。
「太刀筋が単調だ。それではどれだけ能力が上がったとしても、あの時の私にすら当てることはできん！」
おお……まあ確かに動き自体は速くなっているが工夫はないな。
エクレールくらい長いこと剣を振るっていると避けられるものなのか。
ラフタリアとサディナがやりあった時と似ているような気がする。
サディナはラフタリアの太刀筋を読み切って紙一重で避ける、という離れ業をかましたからな。
それと同等のことをエクレールはできるようになっているのか。
「く……当たれ！　俺の攻撃は、どんなものでも破壊する最強の一撃になっているはずだ！」
能力的にはおそらく錬の方が上だ。
それでも当たらないのは、技術面の差だろう。
「なぜだ、なぜ当たらない⁉」
「当たるものか。そんな力の入っていない剣。工夫のない攻撃など、当てる意思がないのと同義だ」
「だまれえええええぇぇぇぇ！」

ラフタリアやフィーロだったら、どんな風に避けるか？
あんな紙一重で避けたりせず、単純に速さで避けるだろうな。
俺と一緒に戦ってきた所為か、ラフタリアは攻撃傾向が強く、それもしょうがないとも言える。
避けるよりも俺を壁にして、如何に強烈な攻撃を当てられるか、という戦いばかりしてきたしな。
俺達も、もっと修練を重ねる時期なのかもしれない。
見て学ぶために、同門の弟子であるリーシアに聞いてみるか。
「なあリーシア、見た感じはどうだ？」
「ふぇえ？　えっとですね、剣の勇者様の攻撃は全て単調です。あれでは戦闘慣れした者なら誰でも避けられると思います」
「ふむ……」
まあそうだよな。速くはあるけど、俺でも避けることはできるだろう。
それくらい、単調に剣を振り回している。
基本、縦切りか横薙ぎしかない。時々、直角に曲げたりもするけど、曲げる瞬間が丸見えだ。
技術的にはラルクやグラスの方が遥かに上だろう。
奴等に比べれば今の錬の攻撃は子供のチャンバラ程度だ。
呪いの力で強くなるってステータス的にだろ？
むしろカースに侵食される前の方が工夫があって強かったんじゃないか？
「さて、お前の本気とはその程度なのか？　では私からも行かせてもらおう」
「く……まだだ！　俺は、一方的に勝てる！」
凄いセリフだ。相手の反撃を許さずに攻撃こそ全てってか？
あーそういや、錬のやってたＶＲＭＭＯは盾職が死んでいるんだったな。
だからこそ、反撃を許す前に倒すとかそんなことを言っているのか？
回避前提とかも言っていたが……なんか怪しいぞ。
古来ネットゲーム関連で、防御職が存在する意味なんて対人に関わってくるものが多い。
元康も錬も樹も、対人戦に関しては相当の素人だと思っている。

もちろん、奴等の言葉通りのゲームなんだろう。だけどこの世界では違う。
これは確信して言える。
「喰らえ！」
無謀にも錬が大きく剣を振り下ろす。
その切っ先が地面に触れた瞬間、地響きと共に地割れが発生した。
おー、地面すら切り裂く攻撃ってやつだな。威力が高そうだ。
「隙あり！」
エクレールが錬の肩目掛けて、前回戦った時のような鋭い突きを放つ。
錬への突きはガツンと音を立てて、虚しく弾かれた。
先ほどよりも更に防御力が上がったようだな。
「くっくっく……今俺が使っているこの剣には自動回復の大が付いている。お前の貧弱な攻撃など意味がない。素直に負けを認めろ」
錬が邪悪に笑い、目を光らせている。
ああ、エクレールに決定打がないことを理解して笑っているんだな。
だけど、なんで説明口調なんだ？
まあ俺が前に着けていた鎧も自動回復が付いてたけどさ。
「ふむ……イワタニ殿に比べれば柔らかいのだろうが、斬ったその場で回復されるか。厄介な」
剣先を見てからエクレールは呟く。
まだまだ余裕があるのか、額に汗一つ浮かんでいない。
「大人しく負けを認めて経験値になれ！　羅刹・流星剣！」
またそれか！
大剣だからか、範囲が大きくなって飛び散る黒い星。
エクレールはその全てを……なんか姿がぶれながら避ける。
「あ、あれは変幻無双流、回避の型の一つ、陽炎！」
……うん。中二病率はエクレールも変わらない。

「リーシア、説明キャラになるのはやめろ。そんなこと言われても『なに!?　あれが！』とか言えるほど詳しくない」
「まあ……確かにそうですよね。ですが、リーシアさんとエクレールさんの技術を見ていると、私達も修行をしなくちゃいけないと自覚させられますね」
ラフタリアの台詞はもっともだな。
エクレール達に技術的に負けてる気がしてきた。
ちょっと前までそんなに差はなかったはずなのに、だ。
「そうだな……なんか真面目に覚えないといけない気がする」
ああいう動きができるのなら優先的に覚えておいた方がよさそうだ。
勇者の武器の所為で何かしら習得が上手くいかないらしいけど、覚えて損はしないだろ。
山奥にでも籠るか？　この先を生き残るために。
「まだだ！　チェーンバインド！」
「ふん！」
錬が呼び出した鎖がエクレールに向かって飛んでいくのだが、エクレールが剣を振ろうと鎖が砕け散った。
「なに!?」
「やはりそうか……強固な鎖、防御も点を活用すればいとも容易く砕ける」
「まだだ！　俺の必殺スキルを受けてみろ！　ハイドソード！」
ゆらぁっと錬の姿が闇に消える。
お前……攻撃がワンパターンだぞ。ハンドレッドソードとか、雷鳴剣はどうしたんだよ。
攻撃の手段が無数にあっても工夫しないとエクレールにも勝てないぞ。
「ぬるいな。ラフタリアが目の前で消えると気を追えない……」
スパンとエクレールは剣を横に薙ぐ。
それだけで錬の隠蔽スキルが掻き消されて姿を現した。
おお……凄いな。
「と、エクレールは言っているが、どうなんだ？」

「そりゃあ……私の得意な魔法ですし……」
まあ得意魔法で負けたら悔しいだろうな。
俺も防御で負けていたら、不快な気分になると思う。
「さて、私からも受けさせるとしようか」
腰を低く屈めたエクレールは錬に向かって駆け出して剣を突き出す。
錬の奴も、防御の必要性がないと思って……いや、咄嗟に大きく後ろに下がった。
「無駄だ」
下がった錬よりも早くエクレールは錬の懐に入り、
「フォークロス！」
光る小剣で十字に素早く切りつける。
魔法剣の技というやつだな。スキルとも魔法とも異なる剣技だったか。
さっきの敵にも放っていたな。
「ふ……」
エクレールの放った攻撃が錬に命中。
なんとなく光のようなものが錬の体を突き抜けたように見えたな。
しかしダメージが入ったその場で傷が塞がっていく。錬は何事もなかったように立っており、笑みを浮かべた。
「俺に攻撃を当てるとは、なかなかやるじゃないか。少し本気で相手してやろう」
……なに言ってんだ？
錬の奴、思いっきり苦戦していたくせに演技でしたってか？
大概にしろ。俺達が本気になればお前を倒すことは多分造作もないんだよ。
というか錬にカースシリーズの呪いは効果がないのか？
普通に動き回っているけどさ。
俺に呪いは効かない、呪いこそが俺の力になるとか言いそうだからあえて突っ込まない。
「戯けたことを。実戦で相手に手加減するなど失礼にもほどがある。余裕のあるふりをするな、愚か者が！」
あー……また錬がエクレールを怒らせている。

相性悪すぎだろ、この二人。
ともあれ、エクレールは完全に錬を見抜いたな。
速くはあるけど、速いだけで見切られている。あれでは速い意味がない。
しかし、エクレールの方も攻撃力に難がある。
ババア直伝の防御比例攻撃も、俺みたいな極端に高い防御力がないと成立しない。
元々剣術に秀でていたんだろうが、カースに侵食された勇者相手では分が悪いか。
大体、あの攻撃って対盾の勇者みたいな、不自然さがあるよな。
変幻無双流が生まれた土地がどこかは知らないが、メルロマルクであった場合、敵対国の関係で対盾の勇者用に作られた技かもしれない。
「俺の攻撃は全てを喰らう。そう、貴様の経験値さえも！」
「どんなに強力な攻撃も当てなければ意味がない！」
しかし戦況が拮抗したな。
攻撃を当てられない錬と攻撃が通らないエクレール。
長期戦になればエクレールの方が不利だ。
当たらないだけで威力までなくなったわけじゃないからな。
この勝負、現状錬の方が勝つ見込みが高い。
「どうするエクレール？　このままじゃじり貧で負けるんじゃないのか？」
「イワタニ殿、もう少しだけ猶予をくれ！　もう少しで剣の勇者の本心が聞けそうなのだ」
本心ね……盾しか使えない俺にはわからない世界かもしれないな。
なんて考えていると、エクレールが錬に問いかけている。
「さて剣の勇者。お前は何が目的なんだ？　ちなみにイワタニ殿は元の世界に帰りたいそうだぞ？」
「俺のことを話題に持ち出すな！」
最強を欲する錬に俺が狙われるだろ！
まったく……おや？　錬が少しうろたえている。
え？　これが説得の糸口になるのか？

「お、俺は……」

「目的だ。お前は何を目指して、強くなりたいんだ！」

おいおい。そんな質問しても馬鹿な答えが返ってくるだけだろ。

錬の目付きがおかしいし、あれはもう何も考えちゃいない。

「俺は最強にならなきゃ我慢できない！　全ての世界、全ての時間、全ての時空で俺は最強になる！　それこそが俺の強欲であり、全ての経験値を求め喰らう暴食だ！」

そう言い放った錬から真っ黒なオーラが更に噴出する。

何か使う気だな。

「だから、お前も、俺が強くなるための経験値になれ！」

『その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は神の名のもとによる捕食！　我が得た大地の力を贄することによって放たれる腐敗をその身に刻み、喰われるがいい！』

「ストロングディクライン！」

錬が大きく拳を握りしめると、全身から蛍火のような何かが漏れ出し、地面に消えていく。

ゴゴゴと辺りが揺れ始め、エクレールの足もとが突然割れる。

ああ、さっきの地割れを起こす攻撃の派生？　詠唱がブラッドサクリファイスと似てたけど。

地割れでできた亀裂にジャキッと牙が生えて、エクレールに喰らいつこうとする。

「その攻撃は隙が大きすぎる！　イワタニ殿なら当てているぞ！」

「俺を比較対象に出すな！　錬が俺を狙うだろうが！」

「ナオフミ様、ちょっと静かに見ていましょうよ」

「だが……」

「大丈夫ですって。なんか上手くいきそうな気がします。エクレールさんを信じてください」

そうなのか？　武術に関わる者の感性ってやつなんだろうか。

まあラフタリアがそう言うなら、信じてやろう。

ちなみに錬の攻撃は避けられた。

……なんか、ブラッドサクリファイスそっくりなんだけど。

あ、でもちょっと違うみたいだ。

地面から何か、灰色の異臭を放つ物体がドバッと吹きつけられる。

さっき出てきた金の像もそうだが、気色悪いな。

さすがの俺もアレに当たったら厳しそうだ。

エクレールには当たらなかったけど、それってブラッドサクリファイスのように避けられたら代償だけ支払うってことなんだよな。

俺の場合、現状を鑑みるに外したら目も当てられないぞ。

うん。もしも次に使う機会があったら、確実に当てられる状況で使わないとな。

教皇の時は女王が足止めしてたから当てられたってことを肝に銘じておこう。

「ふ、ふぇぇえ……なんですかあれ!?」

「さあな。だが触れたら危なそうだ」

一応、距離があるからまだ大丈夫だけど、地面がドロドロと溶けだしている。

焼け野原になっていた周りにキノコとかカビが生え始め、凄い異臭を放ちだした。

その腐敗した大地……腐海がハエの化け物みたいな生き物を形作る。

カーススキルのオンパレードだ。

ターゲットはエクレールだけみたいだな。

やがてハエの化け物がエクレールに向かって降り注いだ。

「狙いはきちんと定めろ。そして攻撃の覚悟が足らん。イワタニ殿がオスト殿の願いを込めて無駄にしないように放った一撃こそ、重みがあった。私はあの時の意志こそが真の強さだと思う」

サッとエクレールがハエの化け物による侵食攻撃を……なんと正面から飛び越えて錬の前に立った。

行き場を失ったハエの化け物は無残にもそのまま走り抜け、やがて崩れ落ちて消えていった。

あー……なんかこの辺り、汚染が酷くなってないか？

どこまでも人に被害を与える奴だな。

「さて、では再度尋ねるとしよう。お前は最強になってその後、何を望む？」

「最強の……後、だとっ……!?」

「そうだ。その最強とやらにお前はなったのだろう？　その力で何をするのだ？」

「く……」

言葉に詰まっている。

ああ、やっぱりそうか。錬の『強欲』がなんで弱いと思ったのかわかった。

過程と目的が逆転しているとは前に思ったな。

だが、その先が……錬の強欲にはない。

俺が強欲に目覚めないのもそれが理由かもしれないな。

俺は金を強欲に稼ぎたい。

だが、俺に取ってこの世界の金銭はあくまで波を生き残るために必要なものであって、それ以上の興味はない。

どうせ帰るんだし、せいぜい帰る直前にラフタリアへ今までの報酬として渡すくらいしかない。

もちろん、本音を言えば少しくらいは贅沢をしてみたいとも思うが、そんな金があったら装備や施設投資に充てたい。

『暴食』もそうだな。

強くなりたいから派生して覚醒したのだろうが、どっちにしても相手を経験値として喰らった後のことがない。

最強になったら満足してしまう。満腹になったら満足してしまう程度の暴食なのだ。

際限なき飢え、食べても食べても満足できない飢えからくる暴食ではない。

俺のカースは『憤怒』。

理不尽に対して気が狂いそうになるほどの怒りをこの身に宿す。

その矛先はヴィッチを筆頭にしてこの世界の全てに向かっている。

もちろん、元の世界に帰ったら俺の憤怒は消えるかもしれないという期待はあるが……おそらく、現実の世界でも理不尽な怒りがあると思う。それに堪えていかねばならない。

終わりのない怒りに呑まれ続けるのと、手に入れたくても手に入らない最強、どっちの方が強く身を苦しめるんだろうな。

……もしかして最近、憤怒に耐えられるようになってきたのは、ヴィッチやクズにある程度の報復をしたからだろうか？　もしかしたら感情の揺れ幅で性能が変わるのかもしれない。

「お、俺は……俺は最強になって……せ、世界を救うんだ！」

「他者から与えられた使命をここで語るな！　言い訳にしか聞こえん！」

エクレールがズバッと錬の返答を切り捨てる。

まあ錬の目も言葉も泳ぎまくってたしな。

「そんなに認めたくないのなら私が直々に教えてやろう。お前が何を望んでいるのかを」

「なに⁉」

錬の奴、思いっきり動揺している。

やがてエクレールは諭すように言った。

「お前は強くなりたいんじゃない。失ったモノを取り戻したいだけなのだ！」

「う……」

「お前が愚かにも考えなしに突き進み、失った仲間、入々、信頼、その全てを、ただ取り戻したくて、最強という目に見える力を欲しているに過ぎない！」

「だ、黙れ！」

「そんなこと、たとえ神であろうとも、いや神である勇者であろうともできはしないのだ。お前が今しなくてはならないのは最強になることとか⁉」

「黙れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

錬がエクレールに向かって大きく剣を振りかぶった。

間に入った方がいいか？

俺が一歩踏み出そうとすると、エクレールは邪魔をするなとばかりに俺達に手を広げてみせる。

そして錬の攻撃を紙一重で見切って全て避けてみせた。

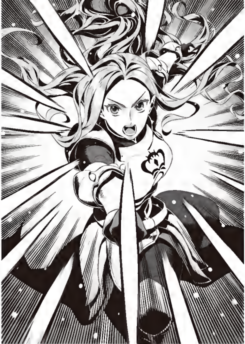
……凄いな。

「お前は本当はわかっているんだ。こんな所で腐っている暇がないことを！」

「う、うるさああああああああああい！　俺に意見するなぁああああああ！」

それでも錬は止まらず、エクレールに斬りかかる。

「最後までお前を信じ、散っていった者達の代わりに、私は剣を振るおう！」



剣を胸の前に掲げたエクレールが錬に向けて技を放つ。
「変幻無双流剣技！　多層崩撃！」
エクレールの連撃が、全て錬に向けて注ぎこまれる。
魔力の流れ……あれが気というやつか？　よくわからないな。
エフェクトにも見えるが、多分そうなんだろう。
で、光のようなものが錬の中で膨れ上がっている。
まるで内側から破壊するかのような技だ。
これはババアが得意とする防御比例攻撃だな。以前受けたものに似ている。
あれだけの攻撃を防御比例で受けたらたまったもんじゃない。
防御比例攻撃に弱い俺からすれば、背筋にひやりとしたものが伝う。
「ガハ！」
「剣の勇者よ、お前は弱い。だからこそ、その弱さを受け入れることでもっと強くなれる」
と告げて、エクレールは剣を鞘へと戻した。
「失った者は帰ってこない。だが、これからその者達の分、生きて戦えばいい。私もできる限り力を貸そう」
かっこつけているが、錬は実際にはそんなにダメージを受けてないみたいだぞ。
まあ腐っても勇者だし、カースシリーズが二種類も出ているんだ。
エクレールとしても相当な接戦だっただろう。
仮に錬の攻撃を一撃でも喰らっていたら真っ二つだったんじゃないか？

「う……ぐは……」
その直後、錬は昏倒する。
おお、アニメみたいに倒されたな。まだ体力はありそうなのにな。
「罪から逃げるな。逃げる度に私はお前の前に立ち塞がろう。死んだお前の仲間のために」
「う……」
錬が倒れたまま目から涙を流している。
無意識か？　それ以上ピクリとも動かない。
そして、大剣が普通の剣に戻った。禍々しい様子もない。
やがて振り返ったエクレールに俺は言った。
「精神攻撃とは、お前もなかなかやるじゃないか」
あんまり絶賛するのも俺のキャラじゃないからな。
こんな言い方が無難だろう。
「嫌な言い方をする……」
エクレールが嘆くように俺に答える。
実際、物理的に倒したわけじゃないしな。
「剣で語り合い和解した感動的な場面のはずなのにナオフミ様の所為で台なしです」
なんかラフタリアが俺を半眼で見ている。
「そうか？」
実際、精神攻撃みたいなもんだろ？
「……おー、やってるじゃねえか。イヒヒ！」
そこに……最悪のタイミングで先ほど逃げた二人組がぼんやりと姿を現した。
なんでお前等がここにいるんだよ！
この流れで戻ってくるなよ！　逃げてろよ！
「逃げようと思ったら何か煙が上がってるから来てみれば、そこにいるのは残りの勇者か？」
「く……」

やばい。錬も元康も俺とは比べ物にならないくらい弱いぞ。
しかも錬は気絶していて動けない。
「誰ですかな？」
元康はなぜか錬とエクレールの近くでボケッと突っ立っていて事態に追いついていない。
「さっきの戦闘とスキルの連打、威力を見ると……盾の勇者と違って弱いみたいじゃねえか」
「好機を逃す道理はない。早々に仕留めるか」
「させるものか！」
エクレールが小剣を二人組に向けて構え、錬を守ろうとする。
俺だって錬と元康をむざむざ殺させるわけにはいかない。俺の負担が倍増するわけだしな。
「死ね！　四聖勇者！」
小柄な男が魔法を唱え、大柄な男が鎖鎌を振りまわしながら向かってくる。
「させません！」
「させるか！」
「間に合え！」
俺とラフタリアが急いで駆けだし、リーシアが妨害とばかりに投げナイフを投擲しながらロープを巻きつけようとしている。
アタックサポートを使ってスキルを放つべきか？
エアストシールドの射程まであと少しだ。
大柄な男が倒れている錬に向かい、もう少しの距離まで近寄る。
エクレール達には攻撃に決定打がない。
「く……まだ、あの技は完成していないが、やるしかない！」
エクレールが腰を深く沈めて何か技の構えを取る。
何をする気だ？
「イワタニ殿、これを放つと私は戦闘不能になるが、時間は稼げる。剣の勇者を頼んだぞ！」
「わかった！」

何か切り札があるんだな。
俺が錬を守るように、エクレールが時間を作ろうとしている。
「私もがんばります！　無双……」
リーシアも意識を集中しだした。
もっと早めに切り札を使えと突っ込みたくなるが、今はそれどころじゃないか。
「お義父さんの敵ですかな？　負けませんぞ！」
元康が飛び出してエクレールの隣に立つ。
「元康、下がれ！　お前の敵う相手じゃない！」
功労者であるが、正直、下手に動かれると厄介なのも事実だ。
ここで元康まで死なれたら俺はどうすりゃいいんだよ！
「変幻無双流表奥義――」
「これで俺達の勝利だ！」
大柄な男が笑みをこぼしながら元康と錬に向けて鎖鎌を振りかぶり、小柄な男が呼び出した隕石が上空に出現する。
エクレールとリーシアの攻撃が間に合ってくれ！
俺はラフタリアを含めた全員に援護魔法を掛けるために集中しながら駆ける。
よし！　錬と元康を守れる射程に入った。
「エアストシールド！　セカンドシールド！」
錬と樹を守るように盾を出現させる。
これで僅かに時間を稼げるだろう。
「喰らうのですぞ！」
元康が出現した盾の脇から大柄な男に向けて槍を突き刺す。
そいつは謎の波紋の障壁を持っている。お前の攻撃じゃ届かない！
たとえ呪われた武器であっても、錬と同じく倒すには攻撃力が――
バシュッと空気が弾けるような音が響き渡る。

フィーロとリーシアがやっとのことで壊した時よりも大きな音だったと思う。
「――ガハ⁉」
元康の槍が……障壁を容易く貫き、大柄な男の胸にアッサリと突き刺さっていた。
槍は大柄な男の体を貫通し、元康はブンブンとまるでおもちゃのように大柄な男が刺さったまま槍を振り回す。
「な、に？」
大柄な男はもとより、小柄な男も驚愕している。
「う……ぐ……やめ、くそ！」
振り回されつつも、大柄な男は自らに刺さった槍を引き抜こうともがいている。
「隕石が降ってきますぞ。お義父さんの手を煩わせる必要はないですな」
元康は空を見上げ、今にも降り注がんとしている隕石を見つめている。
「……いつまで槍に引っ付いているのですかな？　邪魔ですぞ！」
自分で突き刺しておきながら、まるでゴミを見るかのように大柄な男に告げる。
「ふ、ふさけるな！　ゴホ……」
突き刺された方はやっとのことで声を絞り出し抵抗している。口の隅から血が噴き出した。
もう少しで槍から抜けそうだ。
「どうやらお前等はお義父さんの敵のようですな。敵には死！　ですぞ！」
元康は槍を強く握りしめる。
「バーストランス！」
元康の槍の先端が赤く輝き始める。
「な、うわあああああああああ！」
突き刺された大柄な男は悲鳴を上げながら槍から脱出しようと試みているが……。
ボンと大きな爆音が響き渡り、元康の槍の先端を中心に大きな爆発が起こった。
「ぎゃあああ――」
大柄な男は元康の槍に突き刺さったまま俺達の目の前で爆散した。
幸いにも肉片が飛び散るなどといったグロい光景はなく、爆発によって塵になった。

「な、な……ウソだろ!?」
唖然とするのは小柄な男の方。
しかしすぐに気を取り直したのか、ゲスな笑いを浮かべながら口を開く。
「イヒヒ……まさかアイツが殺されるなんてな。復活が面倒になるじゃねえか」
仲間の死すらもヘラヘラと笑うか……本当にゲーム感覚なんだな。
錬よりも性質が悪い。
「転位光は……どうやらできねえみたいだな。面倒なことになりやがった」
「次はお前ですぞ」
「やれるものならやってみな!」
シャムシールを取り出していつでも応戦できるとばかりに構えた小柄な男が元康に向けて走り出そうとした矢先
──既に元康は小柄な男の目の前にいた。
いつの間に!?
いくら俺のステータスが、呪いの影響で防御以外は半分以下といっても、これは速すぎるだろ。
「な、ナオフミ様!? 槍の勇者はもしかして……」
「槍の勇者殿!?」
「ふぇえええええ……」
アッサリと人一人を爆殺しておきながら平然としている元康の表情に狂気を感じる。
そうだった。元康もカースを使用しているんだ。
元康が俺の言うことを聞いていたから失念していたが、こいつも何かで歪んだ状態だった。
「おらぁ!」
「遅いですぞ! お義父さんの敵は死ね、ですぞ!」
元康が槍を横に薙ぐ。すると小柄な男は持っていたシャムシール諸共……首を切断されていた。
「な……」
鮮血が飛び散り、元康に返り血が降りかかった。
元々赤い色を好んでいたが、今の元康は血を浴びてさらに赤く染まっている。

強敵だと思われた敵二人がすごく呆気なく秒殺されてしまったことに、俺達は言葉をなくしてしまった。
「元康……お前……その強さはどこから?」
「お義父さんのお言葉は絶対に正しいのですぞ」
「つまりお前は俺が教えた強化方法を?」
俺の質問に元康は当然とばかりに頷く。
つまり元康は四聖勇者の強化方法を全て実践してここにいるということだ。
しかもカース武器を強化しているのだろう。
俺のラースシールドと同じⅣ、あるいはⅤかもしれない。
あれは霊亀やキョウと戦った際、大いに役立った。
ものすごく強固で高性能な盾だったが、これが元康だったらどうだろう?
並々ならぬ攻撃力を揃えるのは当然……つまり今の元康は化け物のような能力を宿しているのだ。
間違っても錬のような中途半端な強さではないということだ。
頼もしいといえば頼もしいな。
凄いな。俺が苦戦した相手をこんな……容易く仕留めたらしく仕留めるとは。
「敵は全て仕留めましたな」
「そうだな」
思わぬ敵の出現だったが、元康のお陰で錬を辛うじて守ることができた。
あまりにも意外な結末に動揺したが、今は錬だ。
「とりあえず錬を連れていこう」
「わかった」
転がっている小柄な男の死体をしり目に俺はエクレールと一緒に錬を抱き起こす。
「馬車に乗せて村に連れていくぞ」
「ああ、盗賊のアジトの隣に停めていたのだったな」
「はい。後でフィーロを呼ばないとですね」
「ラフちゃんと一緒にどっか行ってしまったからな」

「ふぇぇぇぇ……どうなっているんですかぁあああ」

今になってリーシアが辺りの状況を見て叫び声を上げている。

俺も釣られて辺りを見渡す。

首が飛んだ死体、腐りきった大地……どんな激戦があったのか一口で説明するのは難しいな。

というか光にならないな、この死体。

何かあるのか？

死に戻りを阻止するヒントになればいいんだが……。

「さて元康、お前も一緒に——」

と、俺が元康のいるであろう方角を見ると、元康は影も形も見えなくなっていた。

ピーという音が聞こえたのでそっちを見る。

少し離れた所で元康がなぜか口笛を吹いていた。

「元康！」

俺が呼び止めようとすると、元康は振り返って言った。

「それではお義父さん、ヒーローは解決と同時に現場から立ち去るのですぞ！」

「何が立ち去るだ、ふざけんな！」

お前は呪われた武器を使ってんだ。早々に立ち去られたら困るだろ！

その代償がどんなものかは知らないが間違ってもまともなもんじゃないだろ！

と、言うよりも前に……元康の後方から高速で何かが近づいてくる。

アレは……フィーロの馬車……か？

「あー！　フィーロの馬車ー！」

お？　フィーロが少し離れた所から近寄ってきた。

「「グア！」」

で、フィーロの馬車を引いているのは……なんだ？

三匹の……赤、青、緑のフィロリアルだった。

「それでは、さらばですぞ！」

走っている車に飛び乗るかのように元康は馬車の縁に手を掛けて走り去っていく。

「フィーロたん！　お義父さん！　俺はあなた達の窮地に必ず駆けつけますぞー！」

「フィーロの馬車返せー！」

激怒の表情で頬を膨らませたフィーロが元康を追いかけていく。

あー……まあ、自分の物を当たり前のように誰かが使っていたら怒るよな。気持ちはわかる。

「ラフー！」

すれ違いざまにラフちゃんがフィーロから飛び降りて俺の肩に乗っかった。

「おかえり、ラフちゃん」

フィーロと一緒にどこかに行って大変だっただろう。

元康はフィーロが追いかけていったし、上手くいけば捕まえられるかもしれない。

まあ、あの調子だと難しいだろうがな。

「ラフ！　ラフラフ！」

なぜかラフちゃんが……キョウの魂を指摘した時のように何かを指差しながら俺の頭に乗ってくる。するとぼんやりと、あの二人組の魂が見えた。

「あ？　盾の勇者、俺達のこと見えてるみたいだぞ？　イヒヒ」

「へー……まあいい。今回はやられたが次はお前等を殺してやる！　俺達をこんな目に遭わせた報いを受けさせてやるからな」

……？

なんだろうか？　何か手段を講じることができそうだ。

「セイン、あそこにあいつ等の魂があるみたいだぞ」

「……そう。魂が復活に——」

音飛びでやはり何を言ってるかわからないな。

だが！　こういう相手に効きそうな攻撃を俺は知っている。

そう……キョウを倒した時と状況が完全に一致しているんだ。

「ラフタリア、霊刀であそこにいる幽霊を……切り裂け」

「は、はい！」
「な、なに!?」
二人組の声が裏返る。
魂なら干渉されないとか思っていたんだろうが、そうはいかない。
勇者殺しをしようとしている敵に同情の余地はない。
このまま放置しても、また復讐しに来る。
今のうちに手を打っておくべきだろう。
これで殺せたら儲けものだ。復活を阻止する手段が判明するんだからな。
しかし、ネットゲームで死に戻りとかだとセーブポイントに戻るよな？
なんであんな所に留まっているんだろうか？
そう思ったところで、現在、ここで起こっていることを思い出す。
なるほど、元康と錬の所為で磁場が安定していない。
ポータルができないのと同じように魂が縛られているわけか。
「ウヒ!? や、やめろ近づくな！」
「そ、そうだ！ 見逃せば、特別にお前等を――」
「生憎、その手の台詞を吐く奴を信用する気はないんでな。トドメだ、ラフタリア」
「はい。霊刀、断魂！」
「ギャアアアアアアアアアア――」
ソウルイーターの素材で出た刀でラフタリアは俺が指差したところを切り裂いた。
ラフタリアの魂を切り裂くスキルを受けて二人組の魂は霧散して消え去る。
これで復活したら凄いがな。
で、死体を確認するといつまで経っても光にならない。
正真正銘……死んだかな？
「……勝った――勝てた……？ こんな方法が――」
セインは音飛びしながらもホッとしたように呟いていた。

何を伝えたいのかはよくわからないが、なんとなく気持ちは理解できた。
倒しても倒しても蘇ってくる敵を倒せたんだ。
ホッとした気分にもなるだろう。
「命を奪う結果になってしまいました。後味が悪いですね」
ラフタリアが刀を鞘に収めながら呟く。
「自分達の世界こそ最強とか言っていた連中だからな。グラス達のような使命感とも違う不気味な感じだった。同情の必要はない」
話し合いが通じない気配があった。子供大人という人種を相手にしていた気がする。
奴等にとっては死闘が遊びなんだ。
戦っている時に相手がゲーム感覚のように喋っていたのは、死んでも大丈夫という状況があったからだろうな。
俺達の命は一つ、奴等の命は無数にあるような状況……やってられない。
どうしてこうも問題が重なってやってくるのか、色々と問い詰めたいが……今は素直に勝利を喜んでおくべきか。
「まだ他にも奴等の仲間がいるかもしれない。注意しながら帰るぞ。警戒を怠るな」
「わかりました」
こうして俺達は、フィーロが帰ってくるのを待ってから村へと戻ったのだった。
ちなみにフィーロは元康を追いかけたのだが、スタミナ切れで逃げ切られてしまったそうだ。
まったく……元康は問題ばかり起こすな。
ただ、俺のためにと行動したのだけは、変化の表れだと思いたい。
あの強さなら、簡単にはやられないだろう。

エピローグ 剣の勇者との和解

そんなこんなで意識を失った錬をそのまま村へと連行した。
「う……ん……ここ、は……」

「起きたか。ここは俺が管理している村だ。お前が荒らしていたのは俺が与えられた領地でな」

「そ、そうか……」

目覚めた錬は大人しく、申し訳なさそうに俺とエクレールを見ている。

ラフタリアは俺が何か仕出かさないかを見張っているのか、ずっと俺を凝視してる。

ちなみにフォウルは元康が去った後、すぐに我に返った。

「まったく……盗賊になんて身を落としやがって……そんな真似すんなっての」

「悪いことをした……」

錬は淡々と俺の話を聞いて受け入れていた。

エクレールの説教が効果的だったみたいだな。

「とりあえず、ヴィッチの居場所を吐いてもらおうか」

「……すまない。知らないんだ」

「ふざけるな。ヴィッチの指示で盗賊をしていたんだろう?」

「違う。盗賊に身を落としたのは……俺自身なんだ」

錬は語り始めた。

なんでも、ヴィッチと逃亡したその日、会いたい人がいると言われて、ヴィッチにとある町に案内された。転移後の場所に近かったそうだ。

そこで錬は一人の男を紹介されたらしい。

どこかで見た顔だったが、思い出せないそうだ。

その男は剣を取り出し、錬に剣の教授を願った。

「わかった。訓練でいいんだな」

錬は心よくその男と軽く打ち合いをし……男はヴィッチと何か話し合いを始めた。

「正直……期待――だ。これなら――」

「そう――なら」

「だが――だろ?」

「そうね――頑固いし、利――づらいのよ」

じろじろと見られてイヤな気はしたが、信じるヴィッチが微笑んでいたので気にしなかったそうだ。

「ではレン様、今日はお疲れでしょう?　宿で休みましょう」

と、錬はヴィッチに連れられてやや高めの宿で休んだ。

「本当、レン様との旅を私達、楽しみにしていたのですよ」

「ええ!　あの槍の勇者よりもレン様をお慕い申していたんです」

「そ、そうか。俺も、君達のために、世界を救うようがんばるよ」

自分を信じる者のため、錬は再度、戦う決意を固めた。

この世界の連中の掌返しにうんざりしつつ、それでも信じてくれる人のためにと……。

翌朝……剣以外のすべてを奪われて逃げられたのを理解するまでは。

宿の備え付けのテーブルには置き手紙があった。

「これがそれだ」

大事に持っていたのか?

錬は俺にその手紙を手渡す。

一度握り潰したのか、くしゃくしゃだが、どうにか読み取ることができそうだ。

「えっと……『貴方はもう利用価値がないから、利用できる物だけを頂いていくわ。盾と槍から逃がしてくれたから感謝はしているけど、私、貴方の外見も性格も好みじゃないの。そうね、盾を倒せるようになったら愛してあげるわ。まあ、今の貴方じゃ一生掛かっても無理でしょうけどね。オホホホ』」

うぜぇ……思わず紙を破り捨てていた。

ヴィッチの奴!　どこまでも救いがねえ!

つーか、翌日には錬を見限っていたとかスゲー早業だな、おい。

むしろ錬の装備や金が目当てで近づいたというのが真相か?

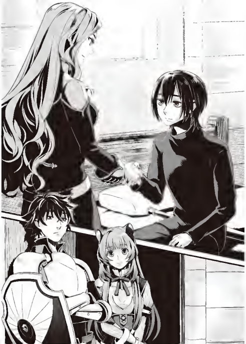
ま、いつまでも錬を騙し通していられないと踏んだんだろう。

「その時、俺は何かがおかしくなったんだと思う……視界が真っ黒に染まって、尚文、お前の言ったカースシリーズが浮かび上がった」

信じようと決めた相手に即座に裏切られたらなぁ。気持ちはわかる。

錬の話を聞く限り協力者がいるようだ。
どこかで見たような男……錬と接点のある人物か。
一体誰だ？
わからないな。とりあえず、ヴィッチの消息は追うとして、問題は樹の方か。
ヴィッチの狙いは俺、元康、錬と来ているんだ。今度は樹が狙われる可能性が高い。
何をするかはわからんが、あんまり良い方向に進んではいない感じだ。
本当、厄介事しか持ってこないよな。
元康に殺されたあの連中のような敵がまだ残っている可能性もある。
「後はそうだな」
錬に強くなる方法を改めて教える必要があるか……だな。
反省しているみたいだし、味方にできるなら悪い手ではない。
本来は絆やグラス達みたいに、勇者が一丸になって波に挑むモノなんだよな。
「カーススキルを連続使用していたから、今どんな状態かの確認が必要だな。それ以外は……ちゃんと俺の話を聞いて強くなってくれ。そんな難しいことじゃないんだから」
「わかった。尚文……これから世話になる」
「ああ、気にするな。俺は少しでもお前等勇者が強くなってくれさえすればいいんだから。今、俺達はどんな状況に置かれているのかも理解してくれよ」
「ああ」
俺は守るだけであって、攻撃は仲間に頼るしかない。
戦力的に優れているのは、たまたまラフタリアが刀の眷属器に選ばれたからだ。
となると攻撃の要になるのは俺以外の四聖勇者なわけで、錬が加入してちゃんと強くなってくれるならこれ以上の仲間はいないだろう。
「俺は……自分のしたことに向き合っていく。死んだウェルト、バクター、テルシア、ファリー、俺の仲間が目指した、平和な世界を取り戻すために戦いたい」
やっと錬が俺の話に耳を貸す状態になってくれたわけか。

俺もラフタリアに信じてもらった翌日に裏切られていたら、憤怒のグロウアップが加速しただろう。
「後は……転落の一途だった。宿を出て、その足で金目の物を探して歩いて……奪われるくらいなら奪いたい、だけど正体は隠したくて仮面をつけて……」
盗賊の馬車を襲撃し、部下にして盗賊団を結成したというところか。
なんともわかりやすい転落人生だな。
「尚文……調子がいいとは思うが、今までのことを許してほしい」
「はいはい。許す許さないは別にして、最初からお前の保護が目的だ。もう二度とこんな真似をしないなら見逃してやるから、俺の言う通りに少しでも強くなれ」
この世界にはどうやら四聖の命を狙っている連中が潜伏しているようなんだ。
これからのことも考えて四聖は少しでも強くならなきゃならない。
少なくとも俺よりは強くなれるはずの錬には、正しい強化方法を学んでもらいたい。
「わかった。尚文の言う通りに強くなるよう、精一杯努力する」
クールを気取っていて、プライドの塊だったあの錬が、俺に向かって素直に頭を下げて謝った。
……本当に反省しているっぽいな。
ここまで謝罪されたら許すことも選択肢に上がってくるのは、俺が甘いからか？
「ヴィッチもさすがにそこまで酷い奴だと思っていなかったんだ。半信半疑ではあった。だけど……優しくされて、信じてしまった。本当に許されない愚行だ。あの女を捕まえる最後のチャンスだったかもしれないのに……！」
錬はかなり激昂してヴィッチを罵っている。
まあやられたことがことだからな。俺と同じくらい憎んでいるんだろう。
そういう意味では錬に共感できる。
こう……共通の敵ができたみたいな気分だ。
「ま、無意味に顔は良いし、嘘泣き上手いもんな、あいつは」
「元王女の悪口か。まあ私もわからなくはないが……」
エクレールもポリポリと頭を掻きつつ呟く。
しっかしあの女、どこへ行ったんだ？

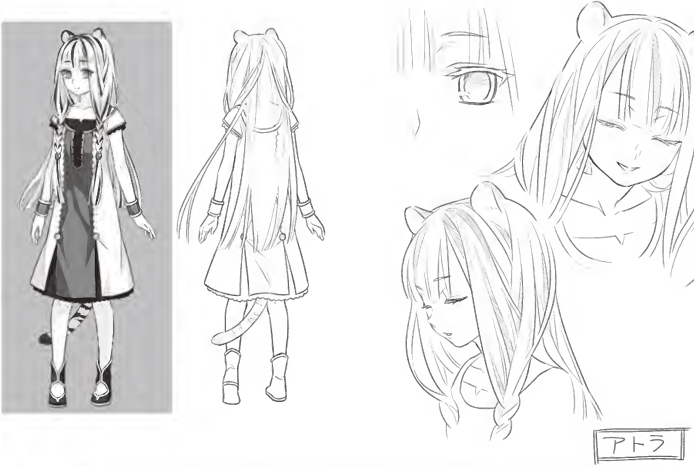


まだ、不安ではあるが、どうにかできる見通しはついたな。
「剣の勇者様、あんまり思い悩まないでくださいね。その……私やエクレールさん、それに私の同郷である村の子達がついていますから」
錬の決意に共感したのか、リーシアが慰めている。
その言葉に錬は素直に頷いた。
「ありがとう」
「剣の勇者であるアマキ殿」
エクレールが錬に向けて一歩踏み出す。
錬はエクレールを見つめる。
「なんだ?」
「あの時に私が言ったことは理解しているのだな?」
「ああ……俺を止めてくれたことを……感謝する」
「うむ。私もできる限り手伝う。これから共に戦っていこうじゃないか」
錬は静かに目を瞑ってからエクレールの言葉に頷いた。
「迷惑を掛けるかもしれない。だけど、俺が間違った道に進んだら、また止めてほしい」
「承知した。もしもまたアマキ殿が道を踏み外したら何度でも私が立ちはだかろう」
「頼む……えっと、エクレール。俺のことは名前で呼んでほしい」
と、錬はエクレールに手を差し出す。
「ではレン殿」
「呼び捨てでいい。エクレール、これから色々と俺に教えてくれ」
「わかった。レン、私の教えは厳しいぞ」
「望むところだ」

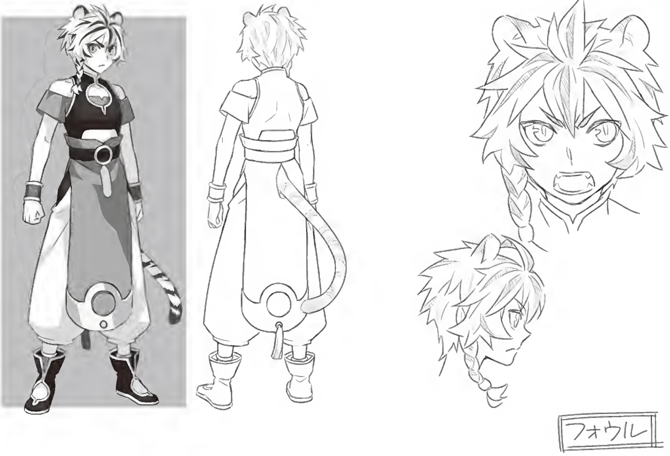
とまあ、何か男の友情のような雰囲気を醸し出しながら錬とエクレールは強く握手をしていた。
「ナオフミ様、何か失礼なことを考えてません？」
「男の友情みたいだなと思ってな」
「エクレールさんは女性です！」
「……イワタニ殿は……まったく」
「尚文」
錬がエクレールの顔を見た後、俺に声を掛けてくる。
「なんだ？」
「信じてやれなくて、すまなかった」
……今更か。まあいいだろう。
ヴィッチに騙された者同士、傷の舐め合いってわけじゃないが、共感はできたような気がする。
あのクソ女に騙された被害者の会の会員がこうして増えていくわけだ。
「とりあえず今日はゆっくりと休め。明日から色々と忙しくなる。じゃあな」
俺はエクレールに錬を預け、部屋を後にした。
ラフタリアが俺の後ろについてくる。
「大きく前進しましたね。剣の勇者が前向きになってくれました」
「そうだな。順調に波に……次の守護獣である鳳凰に挑む戦力が増えていっているな」
あとは四聖の命を狙ってくる勢力か。
アレだけで終わりだとは思えない。
まだまだどこかに潜伏しているかもしれないと思うと、気持ち悪さが拭えないな。
絆の世界にも問題があったが、俺達の世界でも問題は山積みだ。
だが、一歩ずつでもいいから片付けていくしか……ないのだろう。
「さあラフタリア。この後も面倒な仕事があるぞ。俺達はゆっくり休んでいる暇はない。どんな敵であろうとも降りかかる火の粉を払っていくしかないんだ」
「はい！　この後はどうしますか？」

「……復興や戦力増強も重要だが、リーシアやエクレールの急成長を見るに一度本格的に修行した方がいいかもしれないな」
「確かに……ここ最近サディナ姉さんに剣筋が甘いと言われたりして、技術不足を感じますからね」
能力が低下していたから、と言い訳もできるが、全体的に技術を鍛え直す必要があると思う。
今回の敵は所詮尖兵だ。
四聖でも七星でもない、勇者の仲間程度の敵だ。
その程度の敵に苦戦しているようでは話にならない。
今まで通りの作業は継続するが、これからはスケジュールに修行を追加しよう。
「よし、そうと決まれば動くぞ」
「はい！」
着実に復興しつつある村を見ながら、俺はラフタリアと共に作業へと戻っていくのだった。

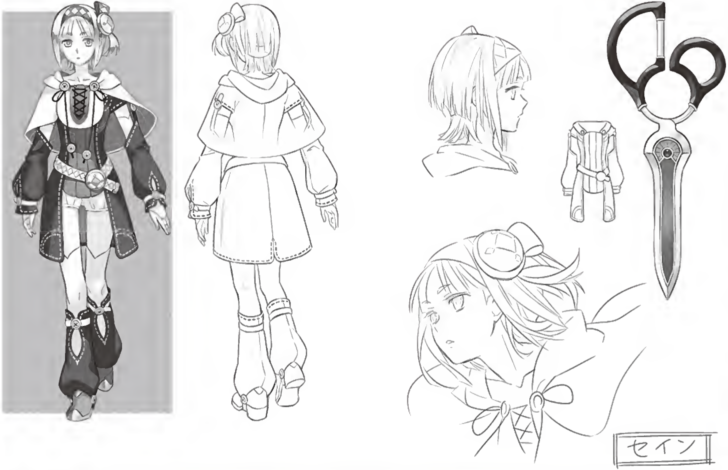
キャラクターデザイン案
アトラ



キャラクターデザイン案
フォウル



キャラクターデザイン案
セイン



著者プロフィール

アネコユサギ

Aneko Yusagi

神奈川県出身。ゲームと読書好きが高じて、小説を書き始める。
「盾の勇者の成り上がり」を執筆し、ネット上に作品を公開。
作品発表後、連日欠かすことなく更新することで病み付きとなる読者が続出し話題となる。2013年8月MFブックスから商業デビュー。
「書籍化によって頂いている期待に応えられるよう頑張ります！」と語る。

企画／株式会社フロンティアワークス
担当編集／今井遼介、大原康平（株式会社フロンティアワークス）
ブックデザイン／ragtime
イラスト／弥南せいら

本書は小説投稿サイト「小説家になろう」（http://syosetu.com/）初出の作品を加筆の上書籍化したものです。

BOOK☆WALKER

盾の勇者の成り上がり 11

アネコユサギ

平成27年6月30日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

ＭＦブックス『盾の勇者の成り上がり 11』
平成27年6月30日初版第一刷発行

発行者　三坂泰二
発　行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
0570-002-001（カスタマーサポートセンター）
年末年始を除く平日10：00～18：00まで

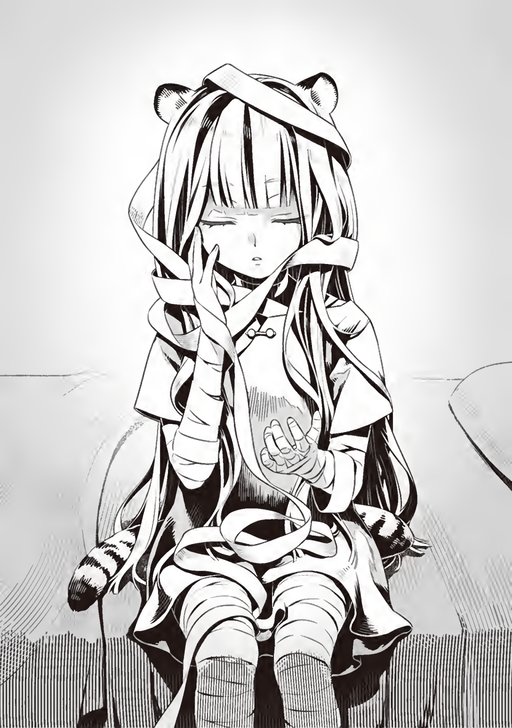
http://www.kadokawa.co.jp/


盾の勇者の成り上がり
11
アネコユサギ
Aneko Yusagi
MFブックス

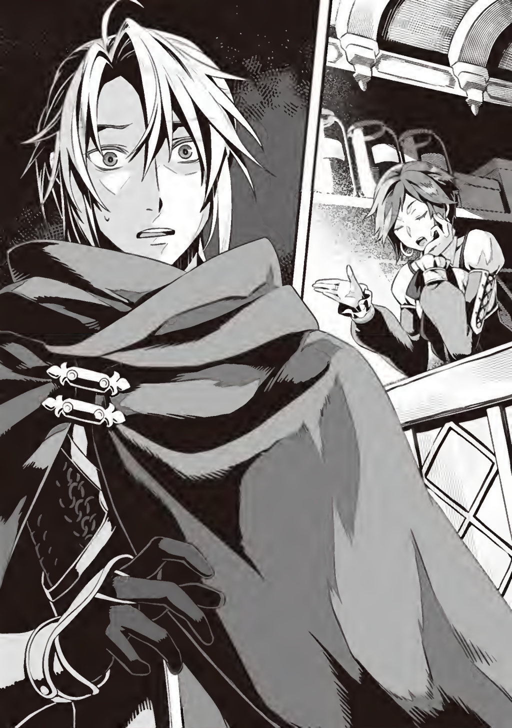

盾の勇者の成り上がり
11
アネコユサギ
Aneko Yusagi

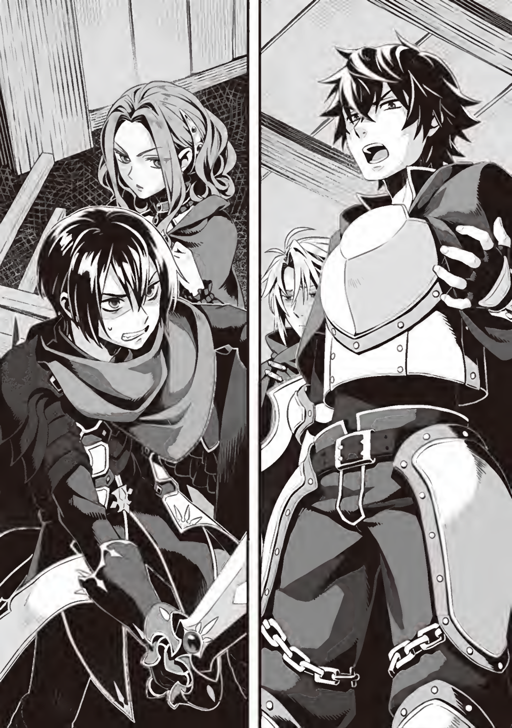

岩谷 尚文
ラフタリア
天木 錬
フォウル
フィーロ
北村 元康
アトラ
セイン
人物紹介
盾の勇者の成り上がり 11


「う……ううううううう……」
元康の奴、ガチ泣きしている。
「ごしゅじんさまー！
助けてー！」



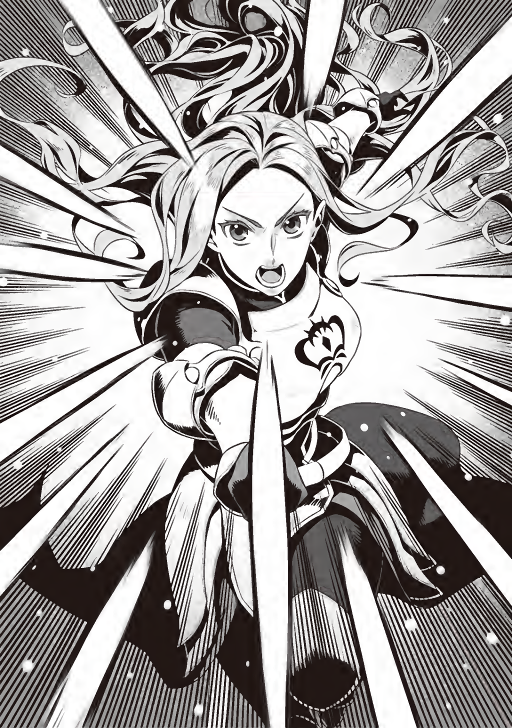


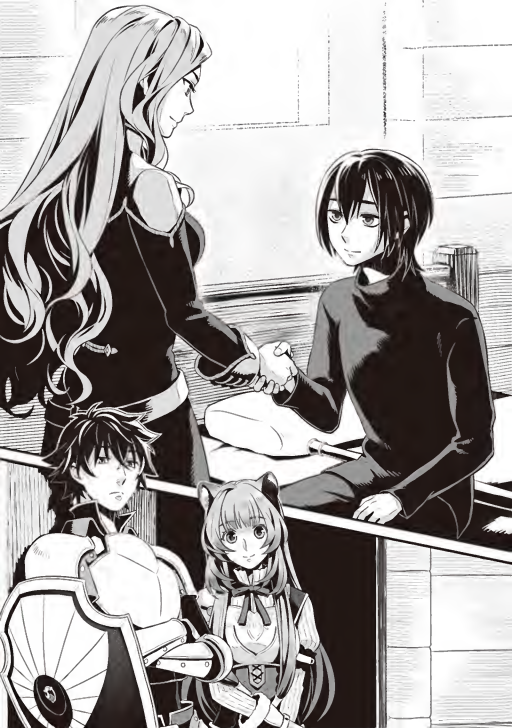




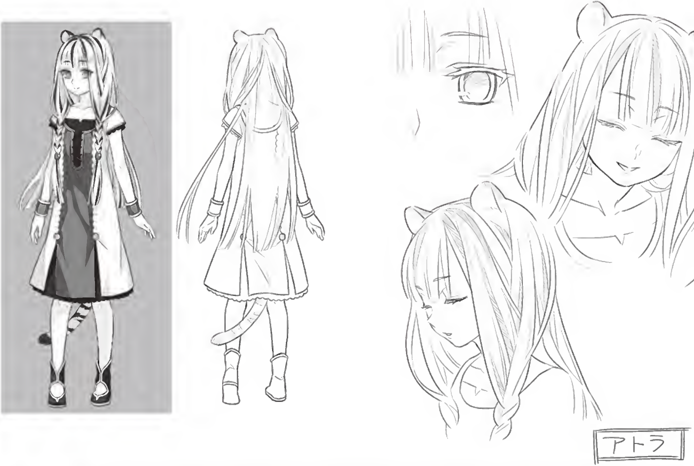








キャラクターデザイン案
アトラ



キャラクターデザイン案
フォウル



キャラクターデザイン案
セイン

